

滋賀大学
漕艇部

百周年

恩湖

SHIGA
UNIVERSITY
ROWING CLUB

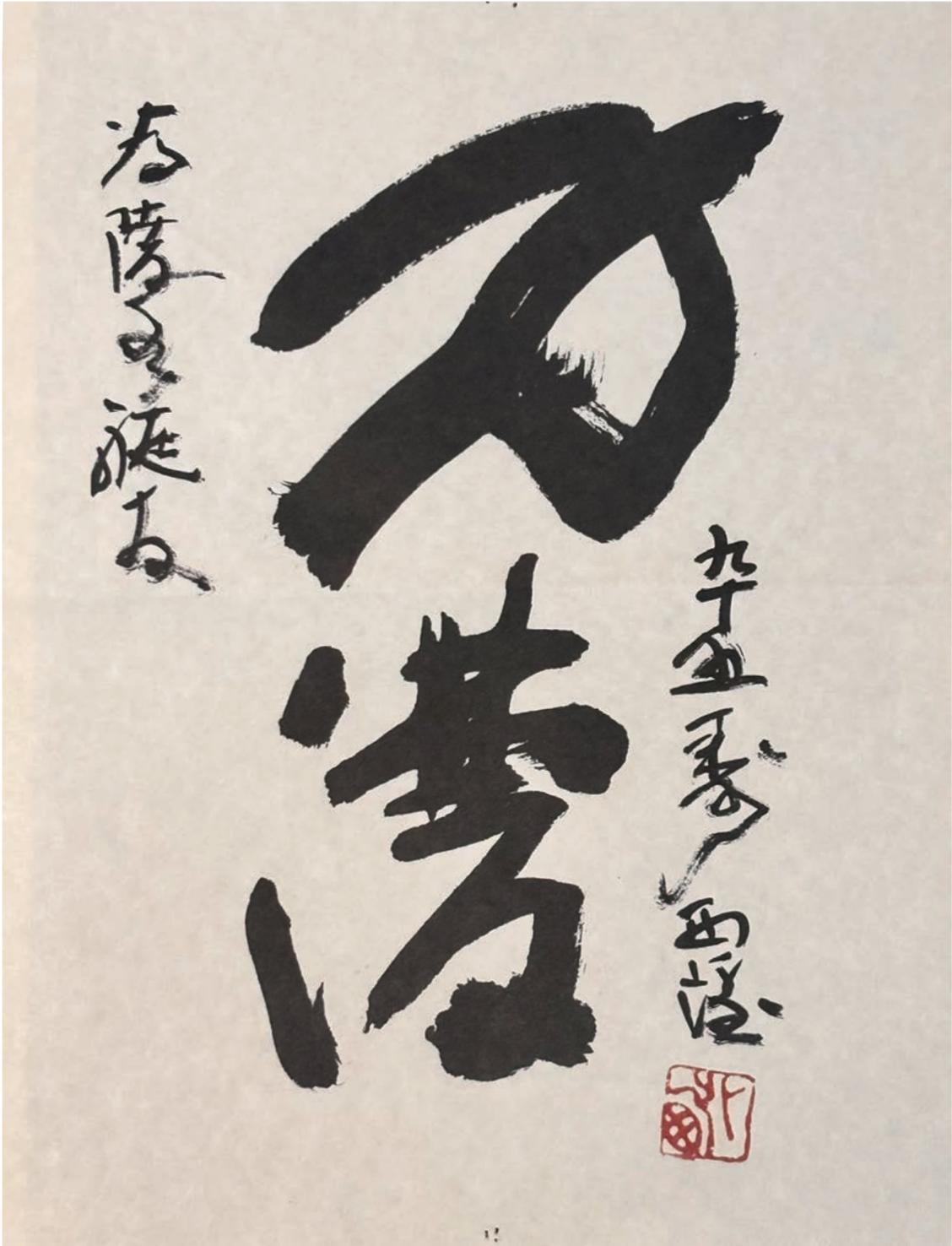
100th
Anniversary

恩湖

滋賀大学 漕艇部 百周年

陵水艇友会

陵水艇友会



「力漕」は高安名誉会長の岳父、北村西望先生（95歳時）の揮毫。我が部の精神的支柱となっている。
代表作：長崎「平和祈念像」（1955年）

恩 湖

～ 100年の歴史を超え、新たな挑戦へ ～



画 高島皓二 名誉会長

～ 彦根キャンパスの風景 ～



大学講堂



大学講堂の内部



陵水会館



陵水会館入口の美しいタイル



彦根城内堀と校舎

滋賀大学漕艇部 部歌「西征歌」

作詞 高橋 郁蔵 (本科1回) 作曲 須川 政太郎

一、あ、水郷に春は来ぬ

繚乱花の風薫り

渺渺遠し水の影

白艇軽く棹させば

一碧の空雲もなく

古城の姿はるけきに

男兒覇業を夢見けん

西征の日は今ぞ来ぬ

二、義憤を包みて二星霜

児等が苦練の跡ふりぬ

琵琶の湖上に逝く秋の

姿淋しき夕間暮れ

落暉に立ちて幾度か

友よ誓いし覇者の栄

長影久しく曳くところ

希望の心若くして

三、さらば征せん西の空

わが戦いの時到来る

部史に燦たる栄光の

血潮染むべき時到来る

郷愁淡く戦士等が

征衣の影に宿れども

涙そそがず声もなく

丈夫は西を指して行く

彦根高等商業学校 校歌

作詞 藤村 作 (文学博士) 作曲 岡野 真一 (東京音楽学校教授)

一、見よ漫々として琵琶の湖

朝生命の色に輝き

夕神祕の虹をうかぶ

踊れる波あり和める面あり

大いなる自然

これぞわが友

二、聞け黙々として語る史書

内に所信を固く保ちて

外に果敢の策を立てつ

国難救ひて身命捧げし

た、ぶべき偉人

これぞわが師よ

三、あ、燦然として残る事業

ながく富国の訣は伝はり

ひろく聖者の徳はにほう

不屈の商魂不滅の正心

仰ぐべき軌範

これぞわが道

滋賀大学 学歌

作詞 花田 比露思 作曲 片山 穎太郎

一、遠がすむ琵琶のみずうみ

とりよろふ比良霊山

近江はや国の真中

正気にあつまるところ

二、ここに建つ滋賀大学

学術を深く究め

人格を磨き高め

天下の模範とならむ

三、比良が嶺を雲は隠さめ

みずうみに霧は立ため

我等は倦まず励む

無限の進歩を信じ

琵琶湖周航の歌

作詞 小口 太郎 作曲 吉田 千秋 (大正7年 旧制三高水上部)

- 一、われは湖の子さすらいの旅にしあればしみじみと昇る狭霧やさぎなみの志賀の都よいざさらば
- 二、松は緑に砂白き雄松が里の乙女子は赤い椿の森陰にはかない恋に泣くとかや
- 三、波のまにまに漂えば赤い泊火なつかしみ行方定めぬ波枕今日は今津か長浜か
- 四、瑠璃の花園珊瑚の宮古い伝えの竹生島仏の御手に抱かれてねむれ乙女子やすらげく
- 五、矢の根は深く埋もれて夏草しげき堀のあと古城にひとり佇めば比良も伊吹も夢のごと
- 六、西国十番長命寺汚れの現世遠く去りて黄金の波にいざ漕がん語れ我が友熱き心

琵琶湖哀歌

作詞 奥野 椰子夫 作曲 菊池 博 (昭和16年旧制四高漕艇班 琵琶湖遭難追悼歌)

- 一、遠くかすむは彦根城波に暮れゆく竹生島三井の晚鐘音絶えて何すすり泣く浜千鳥
- 二、瀬田の唐橋漕ぎぬけて夕日の湖に出で行きし雄々しき姿よ今いずこああ青春の歌の声
- 三、比良の白雪溶けるとも風まだ寒き志賀の浦オールをそろえてさらばごとしぶきに消えし若人よ
- 四、君は湖の子かねてより覚悟は胸の波枕小松が原の紅椿御魂を守れ湖の上

偲聖察察歌

作詞 江崎 三男 作曲 古賀 政男

- 一、眼もはるばると暁の湖上を渡る春風に陽と波の交響は佳き日明けぬと告ぐるかな佳き日明けぬと告ぐるかな
- 二、希望の朝日身に浴びて若き男の児の雄叫びはかの大賢が感激の熱き血潮を伝うなり熱き血潮を伝うなり
- 三、人の心よ浄かれと北に峙つ胆嶺の肌に耀う白雪に見よや久遠の啓示あり見よや久遠の啓示あり
- 四、今学び舎の窓に倚り夜の静寂に聞き入れば古城に通う松籟に故郷の思慕香かなる故郷の思慕香かなる
- 五、夕闇湖に迫る頃聖偲びて立つ時に小波遠く融けゆくは吾等が若き歌の声吾等が若き歌の声

滋賀大学漕艇部 創部100周年記念「偲湖」

目 次

| | |
|-----------------|----------|
| ごあいさつ | P 2 ~ 8 |
| ご 祝 辞 | P 9 ~ 18 |
| 滋賀大学漕艇部 100年の歩み | P19 ~ 31 |
| 彦根新艇庫建設 | P33 ~ 37 |
| 追悼寄稿 | P39 ~ 46 |
| 現役活動報告 | P47 ~ 50 |
| 陵水艇友会活動報告 | P51 ~ 55 |
| 会員からの寄稿 | P57 ~ 65 |
| 巻 末 | P67 ~105 |
| 年 表 | |
| サークルスクエアご案内 | |
| 広 告 | |
| 編集後記 | |



百周年に寄せて

陵水艇友会 会長 辻 岡 榮 一 (大23回)

滋賀大学漕艇部は、大正12年（1923年）の彦根高等商業学校開設から、1949年に滋賀大学開学を経て、一世紀を超える歴史が伝え継がれ、今日を迎えられたことに、改めて陵水艇友会会員の皆様、また関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

学友会端艇部創設以来、その歴史と伝統の先達に始まり、漕艇部活動にあらゆる方面からのご支援頂き、温かく応援し続けて頂いている大学の皆様、歴代担当顧問、体育教官、陵水会や体育会関係者、そして陵水艇友会会員、監督、コーチ、多くの関係各位の皆様々に心より感謝申し上げますと同時に、百周年の感動と喜びを分かち合いたいと思います。加えて、他界されました艇友会の先輩の皆様も天国から祝福頂いていることと思います。

百年続きました我が漕艇部を振り返りますと、輝かしい戦績が部史・年表に記録として残っています。関西屈指の強豪と謳われた時代が窺えます。その一方で、部の存亡に憂慮すべき事態も数多くありました。戦禍、部活停止、艇庫の朽廃、艇の劣化処分、部員不足による廃部の危機、練習拠点の移動、コロナ禍など、幾多の変遷を繰り返し、その都度現役部員と陵水艇友会が一体となって創意工夫で乗り越え、部の歴史が繋がれてきたことに深い感慨を覚えます。

そして、漕艇部創設百周年を期して新艇庫が完成したことを皆様とともに祝いたいと思います。新艇庫建設プロジェクトチームが発足し、適地調査、計画策定、総会承認、寄付金活動、建築確認、工事着工・竣工まで7年を要しました。そして、遂に、国宝彦根城、濠のほとりに、陵水艇友会会員の総意で、新艇庫が堂々と完成致しました。まずは、新艇庫建設資金の寄付金活動にご尽力、ご支援頂いた滋賀大学竹村学長様を



新艇庫の外観

じめ、陵水艇友会会員、その友人関係の皆様深く感謝申し上げます。ありがとうございました。そして、プロジェクトチームメンバーには、粘り強い取り組み、ご協力に感謝と本当にお疲れ様の言葉を贈ります。

創部当初、艇庫は校庭にありました。解体前の旧艇庫は、老朽化が進む中で、移設前の1951年に建設されてから、三四半世紀の間、漕艇部の練習を永きに亘り見守って来てくれました。従来より、大学、艇庫、琵琶湖が一か所に集中した、正しく文武両道で活動できる練習環境は国内随一のものであり、新艇庫とともに、より工夫改善され、整備されました。そして、既に、現役部員の活躍ぶりは、ご承知の通りであります。昨年の全国大学ローイング選手権女子ペア優勝は、創部百年にして悲願のインカレ優勝を達成し、部史に輝かしい記録が記されました。

現役部員が主体性を持って進める活動計画、目標設定、特に達成に向けてのPDCAサイクルの取り組みは、外部招聘コーチ、監督陣の指導、スタッフとの連携による精度アップが図られています。男女共、スカル、スイープ各クルーの決勝進出、入賞の流れが出来ており、今シーズンからの成果にも期待が大きく膨らんでいます。

私自身振り返ると、大学でボートに触れ、卒業以来現役支援に関らせて頂き、大きな夢の一つひとつ叶える現役漕艇部と陵水艇友会との総力結集の素晴らしさに、晴れがましさと胸躍り心弾む境地であります。

オアーズマンよ、湖水に、いざ漕ぎ出かん!! 『一艇ありて、一人なし』の名言は、オアーズマンシップの神髄であり、日々練習に向かう基本姿勢を表わす言葉であります。そして、オアーズマンシップは脈々と受け継がれ、漕艇部部員、クルーの足跡が綴り続けられる部史をこれからも大いに楽しみたいと思います。

現役部員の皆さんには、湖国彦根の地で、建学精神、大学憲章の下に生まれ、漕艇部で培われたオアーズマンの誇りを糧として、社会に漕ぎ出でていただきたい思いを強くするところでもあります。

創部百周年を迎えた母校漕艇部を誇りに思いますと共に、陵水艇友会会員並びに永きに亘りご支援頂いた関係者の皆様にあらためて感謝申し上げます。漕艇部の次の百年も更なる輝かしい歴史を刻み続けることを願って止みません。



2024年9月の全日本大学ローイング選手権での女子ペアが優勝した際の集合写真



滋賀大学漕艇部100周年記念誌 「偲湖」に寄せて

陵水艇友会 名誉会長 高 島 皓 二 (大5回)

100周年記念事業開催に際し、記念誌『偲湖』発行 全員が一丸となり励む姿が臉に浮かびました、おめでとう！

誰が命名したか？ 「偲湖」と
『びわ湖とは別れ難い！ 父母とも、友とも、呼びたい!!』初代 高安会長の80周年の巻頭言です。

丁度そのころの陵水艇友会・漕艇部は、平成バブル経済危機に遭遇、会員参加者は激減、現役支援者も一部に偏り、現役部員も減少、廃部の危機など幾多の困難に直面、私たちは今こそ原点にたちかえりボートマンのメッカ“彦根”を蘇らせようと立ち上がったところでした。

90周年を迎え、ご来賓の佐和学長より『琵琶湖の絶滅種となるな!』と温かい(?) 檄を飛ばされました。私は、答礼で『有難うございます“大学こそ消え去るな!”』と互いに励まし合い、競い合いましたと叫んでしまいました。

「負けるな」と奮起しながらお互いが解り合う機会も増え、「集い、議論し、行動し、模索し、挑戦する」燃え上がったチームのような雰囲気が出てきました。その後、世代が替わってもこのチームはぶれることは有りませんでした。世界を目指す挑戦を誇りとし、励まし合うようになって来たのです。

大学では、日本で最初のデータサイエンス学部創設のイノベーション「挑戦」が始まりました。ふとしたきっかけで、日本品質管理学会・日本ボート協会・経団連との繋がりも出来たりして楽しみが出てきました。

そして今、学生は輝き、家族やOB・彦根市民たちも誇らしく100年の伝統を持つ経済学部と日本初のデータサイエンス学部創立により文理融合のリーダーとなり、未来社会「滋賀から世界へ」と確かな足取りを始められています。

漕艇部・陵水艇友会も伝統復活を目指し「意欲、結束、協調」を合言葉に全力で挑戦することが出来ました。

若い Oas Person 達の胎動も始まりました。現役と若手先輩コーチとの共感、OB 達の温かい社会人教育や就職支援への感謝、OB 達が集い・楽しむ姿を見て、このチームの仲間になろうと!!

情報の一体化は、父兄・地域市民にも広がり、艇友会員参加率は58%までとなりました。全員参加の異例の体制としてボート界では評価されているようです。

あとがき

生涯 OASMAN がテーマでした。

大学時代にボートの聖書と言われたS・フェアバーンやDJ・ブラウンの著書を紐解きながら、「なぜボートを？」「どのように漕ぐのか？」と苦悶し語り尽しました。

Daniel James Brown (著)「The Boys in the Boat」の出会い…

“協調、バランス、リズム” この三つは君たちの生涯にずっとついて回る大事なことだ！ これらを欠いた文明は、やがて崩れてゆく。

ボートパーソンは人生に乗り出した時に“人生と真正面からぶつかり、奮闘し、人生に対処できる。君たちはそれを、漕ぐことから学んでいるからだ！”

世界へ飛び立つ君へ！ 家族の支援に感謝し、信頼できる友を持とう！！
“仲間・琵琶湖・家族に感謝！感謝！をこめて”



シングル会 2018年5月29日
前列左より 松島 (7)、川端 (6)、高島 (5)、内田 (6)
中列左より 中田 (6)、松野 (8)、高田会長
後列左より 小笠原 (7)、高橋 (5)、苅田 (4)



前列左から 高島 (大5)、高安初代会長 (高商5)、
北澤 (大9)、北村 (大12)
後列左から 木村 (大2)、小池 (大1)



滋賀大学ボート部100周年を迎えて

陵水艇友会 幹事長 河崎 泰行 (大31回)

大学4年生8月のインカレが終わって引退した後のことだったと思いますが、彦根の城町を自転車で走っていたら、当時馴染みの飲食店店主(?)の方に呼び止められて「河崎、晩飯食べに行こう」と誘われました。自転車をその場に置き、当時自分が住んでいた下宿よりも大きな外車に乗せてもらって、西今町だったと思いますが「なべや」というホルモン屋に連れて行ってもらいました。そこで、人一倍のホルモン(焼肉)をごちそうになった訳です。

このような体験は一度や二度でなく、その店主の方だけでなく、また私以外にも諸先輩方も経験されていることかなと思います。当時の彦根の皆さんは「ボート部員」に優しく寛容でした。市民レガッタを開催するので協賛をお願いしても、快く協力してくださり、盛大に市民レガッタが開催できたと記憶しています。これはボート部が100年継続してきた要因の一つであろうと私は考えます。ボート部は彦根市民の皆さんに応援していただけてきました。

私の時代のボート部員は、華美に着飾るでもなく、勉学はソコソコにひたすらボートを漕ぐ。中には勉学に勤しみ、立派な学業を修めて卒業される方も居らっしゃいましたが、一途にレースで「勝ちたい」と皆が願っていました。着飾らない姿は清貧であり、勝ちたい一心で練習に励む姿は「志高く」も見えたのかと。皆さんから応援していただいたのもそのあたりに理由があるのではと思います。このご恩は、いつかお返ししないとイケませんね。

時は移り令和の時代、ボート部に対する大学や社会からの要請事項も変化してきました。授業への取組み姿勢や、練習環境・安全性への配慮が欠かせぬものとなり、昭和、平成の「ボート部」事情とはかなり変化して参りました。時代の変化に応じた「ボート部」が望まれ、それを実現しないことには継続していけないと思います。思い返せば昭和20年、先の大戦終了後に、諸先輩たちは食料も無く、艇も無く、社会に出た先輩を頼りに、再び彦根でボートを漕ぎ始めました。これは、当時の諸先輩がバイタリティに満ちた活動力で「時代」に適応し、皆で一致団結して困難を乗り越えて、次の時代にバトンを渡された事例です。共に困難を乗り越えた先輩方の団結は強かったですね。「ボート部」は時代の要請に応じて果敢に「変化」していかなければなりません。どのように時代が変化しても、社会が移ろいでも「ボート部」は時々の構成者が自らを変え、その「時代」に沿う、相応しい姿に「変化」していかなければならないと考えます。

最後に「強いボート部」であること。強さは人を引き付けるし、魅力的であります。強いボート部になろうとすることで知恵を絞り、工夫して人は成長する。簡単に諦めないメンタルを育てる。長きに渡り強くあり続けることには相応の努力が必要となります。

滋賀大学ボート部が創部100周年を迎えることができたのは、その背後に「100年継続してきた理由」があるはずで、それらを良く自認して良い要素を抜き出し、次の100年を漕ぎきる策とすべきと申し上げて、筆を止めます。今後の益々の現役諸君の健闘と艇友会の発展を祈っています。

古川イズムの継承

滋賀大学漕艇部 監督

奥 城 哲 郎 (大32回)



6年前、兵藤さんからOBコーチの誘いを受けたとき、正直お断りしようかと思いました。時折オールを握る程度で、昔の知識が役に立つと思えなかったこと、長年勤めた銀行を退職後、母の認知症発症と介護、新しい仕事が始まったばかりで余裕がなかったこと、そして趣味の自転車にのめり込んでいたこと、さらに、還暦を迎えようとする年齢で、彦根まで100kmを通うのは現実的に難しいと考えていたからです。

それでも、最終的にお引き受けしたのは、同期の太田さんが監督となり一緒に指導したいと思ったこと、そして3年前に亡くなった古川元コーチへの恩返しからでした。古川さんからは現役時代に「相手より強く漕げば勝てる」というボートの面白さを教わり、国体優勝とともに経験しました。その情熱的な生き方には卒業してからも大いに刺激を受けていました。コーチを引き受けることで、少しでも恩を返したい。そして、当時味わった熱いローイングを現役にも体験してほしい、そう考えたのです。

それから6年、毎月彦根に通い続け、昨年からは監督を務めることになりました。自分でも驚くほど深く関わるようになり、今ではローイングの「沼」にすっかりはまっています。指導する中で現役との交流に刺激を受け、まさに“ジジイの青春”を謳歌しています。余談ながら、趣味の自転車の年間走行距離は増加し続け、昨年は23,000km、地球半周分を走りました。

この6年間で、数々の成績を取めることができました。女子ペアインカレ3位、男子舵手付フォア関西選手権優勝、女子シングル朝日レガッタ優勝、女子ペア全日本選手権2位、インカレ優勝、男子舵手付フォア西日本選手権優勝など。特に、昨年の女子ペア優勝の際に戸田のセンターポールに校旗が掲げられた感動は今でも鮮明に覚えています。「負けても仕方がないから、頑張れば勝てる」チームへと成長を遂げたことに誇りを感じます。

もちろん、これらの成果は現役部員のたゆまぬ努力があればこそですが、杉藤コーチの指導も大きな要因です。杉藤コーチは日本代表時代に古川コーチの薫陶を受け、私たちとは兄弟弟子のような関係にあります。彼が教えるワールドスタンダードの漕ぎは、古川イズムと共鳴し、改めて当時の指導が非常に先進的であったことを実感させてくれます。世代を超えて「古川イズム」が受け継がれたと言っても過言ではありません。

また、陵水艇友会の支援も大きな力になりました。杉藤コーチ招聘やコーチ費用、艇やオールの購入、女子ペアの海外留学など多方面からの資金援助により、現役活動を支える基盤が整いました。特に、不可能と思われた新艇庫の建設を実現させたOBの熱意には深く感謝しています。現役に寄り添い、ともに歩む姿勢は、まさに日本一の熱いOB会だと思えます。

そして今、当部は創立100周年を迎えました。ここまで歩んでこられたのは、その時々々の回生が「愚直に頑張る」滋賀大らしさを守り続けてきたからにほかなりません。現役諸君には、自分たちが歴史の一端を担っていることを胸に、先輩たちの努力があって今があるという自覚を持ち、後輩へとバトンをつなぐ責任を忘れずにいてほしい、そして次の100年に向けて、愚直に前向きに頑張りを続けてほしいと思います。

目指そう、再びの日本一。



挑戦の歴史を未来へ繋ぐ

滋賀大学漕艇部創部 100周年記念事業実行委員長

竹村 信 克 (大38回)

滋賀大学漕艇部は、2023年に創部百周年の佳節を迎えました。大正十二年、数名の若者が琵琶湖に一艘の艇を浮かべて以来、百年の歳月が流れました。百年という大きな節目を経て、いまこのように皆様にご挨拶できること、そして本記念誌に寄稿できますことを、心より光栄に存じます。

創部からの百年間は、決して平坦な道のりではありませんでした。戦争による活動の中断、戦後の混乱と復興、部員数の減少、国立大学法人化に伴う体制の変化、練習拠点の大津から彦根への回帰、そして施設の老朽化など、幾多の困難に直面してきました。しかし、いかなる時代にあっても、代々の漕艇部員たちは決して權を置かず、挑戦し続けることを選んできました。艇を進めるといふ、単純にして苛烈な営みの中に、学ぶこと、耐えること、仲間と共に在ることの意味を見出し、琵琶湖の水面にその揺るぎない意志を刻んできたのです。

本漕艇部の歩みは、まさに「挑戦の歴史」そのものです。記録に残る栄光だけでなく、ひたすらに汗を重ねた無数の日々こそが、今日の私たちを形づくっています。早朝や夕暮れの琵琶湖で、ひたすらにオールを漕ぎ続けた日々。身体が悲鳴を上げても、心が折れそうになっても、仲間と声を合わせ、艇を進めた記憶——それは単なるスポーツ経験を超え、人生を豊かにするかけがえのない財産として、脈々と受け継がれてきました。鍛錬を重ね、困難に抗い、時に自らを変革しながら歩んできたその姿こそ、私たちの誇るべき伝統であり、精神の礎です。

私自身も、漕艇部の一員として琵琶湖で仲間と共に艇を漕ぐなかで、多くのことを学びました。目標に向かって努力し続けることの尊さ、苦しい時に支え合う仲間が存在、そして何よりも、自分自身の限界に挑み、それを乗り越える喜び。これらは、座学では決して得られない、漕艇部だからこそ得られた貴重な経験です。琵琶湖の雄大な自然に抱かれながら、私たちは人間としての成長を遂げてきました。

そしていま、私たちは新たな時代の扉を開こうとしています。百年の伝統を受け継ぎながら、より良い未来を切り拓くために——。「百年の歴史を超え、新たな挑戦へ」という言葉を新たな標とし、私たちは第二世紀への航海に漕ぎ出しました。新艇庫の竣工も、その決意の証にほかなりません。最新の設備を備えたこの艇庫は、部員たちの活動を力強く支え、さらなる高みを目指すための拠点となるでしょう。

この節目を経て、先人たちの偉業に深く敬意を表するとともに、共に時代を歩んでくださったすべての方々に、心より感謝申し上げます。

次の百年を漕ぎ出すのは、今を生きる私たちと、やがてこの水面に集う未来の艇友たちです。挑戦の歴史は、これからも続いていきます。未来の滋賀大学漕艇部が、琵琶湖の波を越え、さらなる感動の物語を紡いでゆくことを、私は確信しています。

ご祝辞





漕艇部創部100周年記念に寄せて

滋賀大学 学長 竹村 彰 通

このたび、滋賀大学漕艇部が創部100周年という輝かしい節目を迎えられましたことを、心よりお祝い申し上げます。漕艇部は、滋賀大学の源流の一つである彦根高等商業学校が1923年に開学した際に、開学と同時に創部された12部のひとつという伝統のある団体であると伺っております。長年にわたりその歴史と伝統を築いてこられたOB・OGの皆さま、現役部員、そして関係者の皆さまに、深く敬意を表します。

特に100周年にあたって艇庫の建て替えに取り組まれたことは特筆に値することです。2023年12月5日には、陵水艇友会より艇庫の建て替えに向けたご支援に対して、学長室にて寄附贈呈式を執り行いました。当日は辻岡榮一会長をはじめ幹部役員の方々が学長室を訪れ、艇庫建設に懸ける並々なぬ思いを伝えられ、寄附目録を拝受しました。私からはお礼の言葉とともに大学としてご寄附を有効活用することをお誓い申し上げます。

琵琶湖という全国に誇る豊かな湖に恵まれた立地にある本学は、水上スポーツの活動に最適な環境を有しております。その中でも漕艇部は、まさにこの地の利を活かしながら、日々のたゆまぬ努力と挑戦を重ね、滋賀大学の体育会活動の中核として輝かしい実績を積み上げてきました。2020年の2月に突然始まった新型コロナウイルス感染症の影響は3年近く続き、漕艇部の活動にも大きな影響を与えたものと拝察いたします。しかしながら、そのような厳し



贈呈式で陵水艇友会役員の皆様と

い条件の中でも部員たちは練習を継続し、その成果は近年の全国の学生大会をはじめとする多くの大会での優れた成績として表れています。特に2024年9月のインカレ優勝は創部初の快挙であり、滋賀大学にとっても大きな誇りとなりました。こうした成果は、まさに諸先輩方が築き上げてこられた伝統と、現役部員の皆さんの情熱、そして指導にあたる関係者の皆さまのご尽力の賜物です。

ボート競技は、一人ひとりの力が結集してこそ艇を進めることができる、まさに協働の象徴とも言えるスポーツです。その精神は、これからの社会を担う若者にとって大いなる糧となり、大学での学びと相まって人生を豊かにする原動力となることでしょう。漕艇部は競技力の高さに加え、礼節や協調性、粘り強さといった人間力の面でも社会から高い評価を受けています。今後もその精神を受け継ぎ、さらなる発展を遂げられることを心より願っております。

滋賀大学漕艇部 創部100周年に寄せて



滋賀大学 経済学部長 能 登 真規子

このたび、滋賀大学漕艇部が創部100周年という記念すべき節目を迎えられましたこと、心よりお祝い申し上げます。

彦根高商以来の本学の歴史と重なる長い年月にわたり、漕艇部という団体の活動が人々の意志と情熱によって脈々と受け継がれてきたという、その事実だけでも深い敬意の念を抱きます。

多くの皆さまとは「はじめまして」のご挨拶になるかと存じます。私が滋賀大学経済学部に着任して21年目を迎えました。現在、経済学部は「総合経済学科」の1学科のみの体制となっておりますが、元々は「社会システム学科」の所属で、専門は民法学です。学生行事のサポート等を行う学生支援委員を何度か務めました。学部長としては2年目となります。

昨年度から各地の陵水会支部総会にお招きいただく機会があり、その折、陵水艇友会の皆さまが、たいへん楽しそうに交流されている様子を拝見し、強く印象に残っております。私が知る元マネージャーや元部員である卒業生たちも、ぜひ、あのようになってほしいと心から願っております。

滋賀大学経済学部の強みとは何か——。学部長として、折に触れて自問しておりますが、その一つは、学生相互のつながりの濃さにあるのではないかと考えています。想像の限りではありますが、漕艇部の活動は、競技という目標に挑み続ける営みであると同時に、信頼と連携に支えられた仲間との協働によって成り立つものだと受け止めております。日々の練習、水上での安全への配慮、そして決して軽くない活動費の管理といった、一つ一つの実践が、部員同士の絆をより確かなものになっているのではないのでしょうか。

さらに、世代を超えた熱い交流が行われていることも、漕艇部ならではの貴重な文化であると感じています。現役学生が“本気の大人”と身近に出会える機会はなかなか得難いものです。

他方で、大学の学部教育そのものは大きな転換期を迎えています。就職活動の早期化により、学生が本来、自由に過ごせるはずの時間が年々短縮されつつあります。加えて、短期間で成果を可視化することが強く求められる風潮もあり、時間をかけてじっくりと学ぶ経験が得にくくなっていることも否めません。

こうした状況のなか、経済学部では2023年度に改組を行い、2年次までは専門領域を限定されることなく幅広く学び、3年次進級時に専攻（経済・経営・社会システム）を選択する「レイトスペシャライゼーション」を導入いたしました。3年次以降も、他専攻の科目も希望すれば履修可能であり、各人が自由に学びを広げる設計となっています。学生の皆さんが、先輩方と同様に、大学生活を存分に楽しみ、充実した日々を過ごされることを心から願っております。

今後とも、滋賀大学漕艇部、そして滋賀大学全体に対し、皆さまの変わらぬご支援とご厚情を賜りますよう、お願い申し上げます。



あの日に帰りたい

滋賀大学 データサイエンス学部長 市川 治

暑い夏、頭がボーっとしてくる。音が聞こえなくなった新幹線のホームに立つ。
そうだった。昨日で授業は終わったんだ。今日から夏休みで家に帰るんだった。
あれ？俺って何歳だっけ？そうだった、大学生じゃないんだった。
帰る家も変わったんだ。
何言ってるんだ。自分の子供も大学を卒業したんだぞ。時は流れたんだ。
でも同じように今年も夏はやってくる。

意識がもうろうとしてしまうような夏は、どこか過去とつながっています。焼けるような日射しの下で汗をかいていたあの光景を思い出します。漕艇部のOB・OGの方は、卒業して何年も何十年たっても、そんな感覚から離れられないのではないのでしょうか。

自分にとっての忘れられない大学時代の思い出は、クラスメートとチームを組んで大学内のボート大会に出場したことです。あれは、東京の大学に進学してすぐの5月のことで、戸田漕艇場で、舵手付きフォアを漕いだのですよね。

自分にとっては、初めて漕ぐ本物のボートでした。素晴らしすぎて世界観が変わるかと思いました。とにかく水面が近い。自分のすぐ両脇を高速で水が流れていく。そしてチームメイトと一糸乱れずに「水をつかみ、投げる」。何も考えずにただひたすら漕ぐ没頭感、そして一体感。そして全力を出した後の爽快感。今でも忘れられない感覚です。

全くボート経験のない4人だったのですが、事前にローイングタンクで練習させてもらったことで、クイックに技術を習得し、たった1か月で妙に強いチームになっていました。全部で50チーム以上が出場する大会で2回の予選を勝ち上がり、決勝に進みました。決勝でも勝つ気持ちは満々でしたね。あんなアドレナリンが出まくった経験はその後の人生でもありません。でも、決勝では、チームメイトの一人の座席のローラーが外れ、残念な結果となってしまいました。もちろん、彼の責任ではありません。けれども、あまりに悔しすぎて彼に辛くあたってしまいました。今思えばそれも含めて青春の1ページです。

その後、自分もチームメイトもボートに乗ることはありませんでした。不思議とあのレースを話題にすることもなかったのです。でも、たぶん、チームメイト全員があの時のことを胸の奥に大事にしまっていると思います。

その時のその人だけが感じられる世界、今となっては踏み込んではいけない聖域、あの時に感じた生きている実感、そんなものを誰もが持っています。今回、漕艇部の記念誌に寄稿する機会をいただいて、ずっと封印してきた思い出がよみがえってきました。ありがとうございます。

滋賀大学漕艇部創部100周年記念に寄せて

陵水会 理事長

池田直樹 (大28回)



滋賀大学漕艇部が創部100周年を迎えられたこと、陵水会理事長として心よりお慶び申し上げます。この記念すべき節目に、寄稿の機会をいただき、大変光栄に存じます。

1923年に前身の彦根高商開校と同じ年に、学友会短艇部として産声を上げて以来、100年という長きにわたり、幾多の困難を乗り越え、琵琶湖の雄大な水面を舞台に、艇を漕ぎ、汗を流し、互いに切磋琢磨しながら、輝かしい歴史を築き上げてこられたことと拝察いたします。これもひとえに、創部から今日に至るまで、漕艇部の活動を支えてこられました陵水艇友会の諸先輩方、現役学生、顧問、監督、コーチの皆様の並々ならぬご尽力と情熱の賜物であると、心から敬意を表します。

私が学生時代を過ごした1970年代後半の漕艇部といえば、体育会系クラブの看板、名門のイメージがあり、鍛え方がすごく、同じ体育会系クラブの学生と比較しても体つきが違うといった印象があります。また、キャンパスの至近に日本最大の琵琶湖を擁するという恵まれた環境を活かし、大半の学生が未経験からのスタートにもかかわらず、関西地区屈指の強豪チームに成長し築き上げた伝統と実績は、滋賀大学の学生、OBにとっても誇らしいものでありました。厳しい練習に耐え、目標に向かって努力を重ねる部員の姿は、多くの学生にとって良き刺激となり、大学全体の士気を高める存在でもあったと記憶しております。

最近では、2024年のインカレで、女子ペアが創部初のインカレ制覇という快挙を達成されるなど、滋賀大学漕艇部に新たな1ページを刻まれました。

漕艇部がこれまでの活動で培ってこられたものは、単に競技力の向上だけではありません。琵琶湖の自然の中で、自らの限界に挑戦し努力を重ねる姿勢、仲間とともにオールを漕ぎ、チームとして一体となり協力し合うことの大切さ、そして何よりも心身を鍛え上げることで培われる不屈の精神は部員一人一人の人生においてかけがえのない財産となっていることでしょう。

卒業後、社会の様々な分野で活躍されている多くのOB・OGの皆様が、漕艇部で培った経験を活かし、リーダーシップを発揮されており、人間形成の場として、大切な役割を果たしてきたものであると確信しております。

また、創部100周年という特別な節目に、記念誌を発刊し、漕艇部の創部以来の歴史をたどることは、滋賀大学の伝統を身近に感じながら、改めてOB会の負う役割が再認識される意味でも大変意義のあることと思えます。

最後になりますが、滋賀大学漕艇部のこれからの100年がさらなる輝きに満ちあふれたものとなりますよう、心よりお祈り申し上げます。そして、この記念誌が漕艇部の新たな歴史をつなぐ礎となることを願い、私の寄稿とさせていただきます。



100周年に寄せて—期待と回想

滋賀大学漕艇部 元顧問・京都橘大学経済学部長
吉川 英治

創部100周年という輝かしい節目を迎えられましたこと、心よりお祝い申し上げます。漕ぎ継がれた伝統と陵水艇友会のみなさまのご尽力に、深く敬意を表します。

私が顧問教員を務めたのは2002年4月から2021年3月までの19年間です。それは漕艇部の歴史の僅か1/5に過ぎませんが、いろいろな出来事がありました。

富田先生から引き継いだ当初は何も分からず、主務担当の学生が差し出す書類に捺印し、活動報告を聴くことしかできませんでした。しばらくして新入部員が定着しない、そもそも入部してくれないという噂を耳にし始めました。漕艇部の年表によると、2009年から2012年までは4回生が5名未満で、2009年と2011年は2名だけ、主将と主務が記録されているだけです。つまり、4学年の部員数が一桁になるのではないかと危惧され、まさに「存亡の危機」に直面していました。この頃は幹部が頻繁に研究室を訪ねてくれました。艇友会の先輩方よりも熱量の低い大人に心を許してくれたのか、彼らの悩みを聴かせてもらいました。この時期には、北村会長、北居監督、水野監督とも頻繁にお会いし、新入部員を増やすための秘策について話をさせていただきました。私も、必修科目の授業で勧誘したり、新入生に単位取得の方法を伝授したり、教員としての禁じ手を使ったこともありました。

データサイエンス学部の開設、これも大きな節目でした。開設を1年後に控えた2016年2月の陵水艇友会関西支部総会では、「2学部の彦根キャンパスで『しがけい』と名乗り続けることができるのだろうか?」「必修科目の多い理系学生が増えたら、どのように練習時間を確保するのか?」と問題提起させていただきました。これらは部の名称変更や石山から彦根への練習拠点の回帰という議論につながっていきました。

これからの期待は、こうした回想の中からはしか紡ぎだせません。漕艇部のみなさまと時間と場所を共有する中で、私には一つの単純な確信が生まれていました。それは、「艇を漕ぐ」諸活動だけで、社会で生きる活動が閉じているわけではない、「艇を漕ぐ」ことが卓越するためには、他の活動も疎かにしてはいけない、ということでした。こうした確信から、「艇を漕ぐ」活動が地域に開かれ、学内外からリスペクトされ、真に自由で誇りと自信に満ちた部員たちが伝統を継承する姿を夢想してきました。この夢に共感を示していただき、一緒に活動して下さったみなさまには、真に感謝しております。

最後に、これから入部してくるだろう学生諸君へ。先輩たちが漕ぎ継いできた漕艇部の卓越したDNAは、生半可な気持ちでは漕ぎ継げませんよ。次の100年に向けて、真摯にがんばりたまえ。

漕艇部創部100周年を迎えて

滋賀大学経済学部 教授・体育会顧問

道上 静香

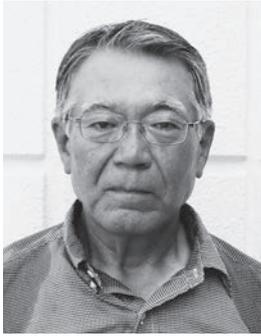


この度は、漕艇部創部100周年を迎えましたこと、心よりお祝い申し上げます。私自身、この100周年という大切な節目を皆様と一緒に迎えることが出来たことを大変にうれしく思っております。同時に、長きに渡り、漕艇部の歴史と伝統を脈々と受け継いでこられた陵水艇友会の皆様方や部活動を支援して頂いている方々の並々ならぬご尽力には、畏敬の念を抱かざるを得ません。関係各位には改めて感謝申し上げます。

近年、体育・スポーツ科学の分野では、科学と実践の懸け橋として、実践研究が重視されています。この研究分野では、指導現場で生起しているコーチングの成功・失敗事例や、優れたアスリートのわざの習得過程における“コツ”や“カン”などといった実践知（暗黙知）を、個々のノウハウとして持っているだけではなく、形式知として表出させ、それらに存在する普遍性や共通性を導き出し、スポーツ科学の基礎研究や指導現場に役立てられる知見を獲得していくことを目的としています。

昨年の『彦根論叢』第440号（2024年夏号）では、「経済学部100周年記念企画」第3弾として、「滋賀大学彦根キャンパスにおけるスポーツコーチングの実際」と題して、多くの方々に論文を投稿して頂きました。その中の1つに、漕艇部のコーチング実践論文が掲載されていることは、周知の事実かと存じます。この論文は、記念企画ができる4年ほど前の2020年初頭、まさにコロナの感染拡大が始まった頃にスタートしたものです。論文執筆の中心にいた兵藤さんが、漕艇部のコーチング実践をなんとか形に残したいということで、その当時は外部の学術論文に掲載する方向で進めておりました。しかし、経済学部100周年を迎えるにあたり、彦根キャンパスのこれまでの体育・部活動の指導実践を、多くの卒業生の皆様や現役学生に知って頂く機会を提供することの方が大きな意味があると感じ、記念企画の1つに組み込んで頂けることとなりました。当時を振り返ると、兵藤さんの論文にかける熱量は凄まじいもので、何度も彦根に足を運んでくださり、時にはメールで論文構成の打合せをさせて頂きました。このような中で、私自身も兵藤さんの熱量に打たれ、いつしか漕艇部の過去の取り組みに思いを巡らせている自分自身がいました。その一方で、現役学生が少しずつ成績を出し始め、過去と現在を行き来しているような、とても不思議な感覚を抱いたことを今でもよく覚えています。近年では、創部初のインカレ優勝という素晴らしい競技成績を残しておりますが、毎朝、散歩がてらに、現役学生と挨拶を交わし、トレーニングの様子を眺めていますが、とても良い雰囲気です。部活動運営ができていると感じています。

コーチングは一様ではなく、毎日が試行錯誤の連続です。うまくいかないときの方が圧倒的に多いのですが、現役学生が悩み、苦しむたびに、手を差し伸べられるようなそんな部活動であってほしいと思います。今後も、末永く発展していけますよう心よりお祈り申し上げます。



滋賀大 OB と共に漕ぐボート団塊号

ボート団塊号 会長 弓 場 常 正

祝辞

シニアクラブ「ボート団塊号」は今年で20周年を迎えました。一方で滋賀大学漕艇部は創部100余年を迎えており、その長い歴史と活躍に敬意を表し心よりお祝いを申し上げ、合わせて今後のご活躍、ご健勝をお祈り申し上げます。

彦根との縁と滋賀大 OB の入会

彦根市には37年前に仕事で立ち寄ったことがあります。タクシー運転手さんが「ここは井伊さんの町、お城が綺麗、美人が多く、酒が上手い」と言ってくれました。仕事が早めに終わり彦根城や町を散策すると都会の喧騒はなく落ち着いた街並みで「ここは学生にとってとても良い環境」というイメージを持ちました。

さて滋賀大の人で最初に団塊号に入会した人は17年前の北居さん（母校の監督・故人）、その後は前田、平居、岡本和之、松下（名コックス・故人）、堀江、岡本幸、桑島、長江、西川、小杉、中村、岡本勝、さらに最近では山本、矢田、辻井と入会。実に16人が入っており最大派閥です。スポットで漕いだのが緒方、伊藤、鈴木さんと皆さんを覚えております。

団塊号の優先順位が、「1位が家庭、2位が仕事、3位が母校、4位が団塊号」と北居さんに説明すると、「4位が団塊号」ということが大変に気に入り、同年配から後輩まで声掛けして頂きました。

マスターズでの快挙

7年前の第10回戸田マスターズ大会の時、北居さんから「今回は関東在住の滋賀大 OB でエイトに参加したい」と申し出があり認めました。本人たちは母校ということで意気盛ん、血気盛んで「打倒団塊号」と練習に励んでいました。横綱の胸を借りる気持ちでスタートについたと申しましたが、スタート6本が決まり1シート出してから徐々に引き離し「あれよあれよと」という間にトップでゴールしました。

その後、朝日レガッタ第65回記念大会で滋賀大の OB ク



【写真1】2017年第10回全日本マスターズ 陵水艇友会クルー

C：松下（故人）、S：北居（故人）、7：前田、6：中村、5：桑島、4：鈴木、3：西川、2：緒方、B：小杉（平均63歳）

※太字：団塊号会員、他もスポット参加者

ルーが優勝したときには「忘れ物を取りに来た」と名セリフを残していました。

翌年11回の熊本の全マス、12回の浜寺では皆さん団塊号に戻り、玄武、朱雀、蒼天、薫風クルーなどで優勝や好成績を残しました。優勝クルーにはいつも滋賀大OBが乗っています。

陵水艇友会への敬意

以前、陵水会の本をいただき読んだことがあります。漕艇部だけでなくいろいろなクラブの人が寄稿しており楽しく拝見しました。陵水は琵琶湖と周りの山々の事で陵水会は滋賀大経済学部全体のOB組織だそうで、漕艇部はこれに付け足してOB会は「陵水艇友会」と名づけたと聞きました。幾多の先人が漕艇部の為に苦難の道を歩き切り開き今日があると書いており私は感動しました。

連覇達成、表彰台の笑顔

2025年5月の東日本夏季マスターズでは岡本幸、西川が乗った朱雀クルーが優勝したものの、6月の全マスでは1秒差で後塵を拝しました。ナックルでは滋賀大・立命連合で2連覇を達成しました。メダル授与では嬉しそうな顔です。

結びに

重ねて滋賀大学漕艇部100周年を心よりお祝い申し上げます。また新艇庫はOB会で寄付を募り完成したと聞いており、二重のお慶びと存じます。これからも、滋賀大学OBと共にマスターズローイングの魅力を広げ若手との交流を通じて漕艇文化を未来につなぎます。次の100年も、滋賀大学漕艇部が新たな伝説を刻むことを願っています。



【写真2】2025年第10回全日本マスターズ 団塊号・滋賀大立命館連合クルー
左からS：中村、3：桑島、COX：岡本、
2：黒田、B：西川 ※太字：滋賀大OB

創部以来のご愛顧に感謝！ 個人のご縁も 90年代から

桑野造船株式会社 社長 小澤 哲史

創部から100年、永く漕艇の灯を繋ぎ、また未来に繋がれていくことに、弊社と社員を代表し、心より敬意を表し、お祝い申し上げます。また、湖西で造り続けてきた弊社の艇を、湖東でご愛顧いただき、漕ぎ続けられていることに、深く感謝いたします。前社長・古川宗壽さんから桑野を引き継いだのが2012年10月でした。以来、私自身も何度か貴艇庫を尋ね、活動のお手伝いをさせていただいています。また今村拓也さん（大38回）には、弊社で尽力いただいているところです。そしてこの度は新艇庫建設で、ボートラックのことなどもお手伝いさせていただき、貴部とのご縁に改めて感謝しつつ、弊社応接室の書棚から「偲湖85周年記念誌」を読み返しているところです。

また手元の資料を発掘して、まだ私が広島にいた90年代末の頃から貴部とのご縁があることを思い出しました。滋賀でのコーチセミナーの折、当時3回生の岩崎恭子さん（大48回）から、技術的な相談（バランスの問題）を受けました。後日、エイトの乗艇ビデオテープ（98年冬、16分）が届き、その観察メモ（16ページ）と助言を返送していました。私の助言は「…バランスの問題を除けば、比較的良く漕いでいる。リズム、前後の動きのイメージ、視線の安定性などは問題なさそう。バランスを改善すれば、パフォーマンス～艇速の向上が十分に期待できる」といった主旨。具体的には、「潜在的問題として、フォワードでハンドルが低すぎ、ドライブ中の上体の内傾が両舷でずれていること。また直接原因として、フィニッシュでのハンドル下降の不統一（大きく、早く、速くハンドルを下げたサイドにフィニッシュで艇が傾く）、フォワード中のハンドルの不安定（ハンドルを下げた方に傾く）、キャッチでのハンドル上昇の不統一（大きく、早く、速く動かしただ方のサイドが上昇、傾いた逆サイドはエントリー動作が小さくなる悪循環）…」などと説明。さらに改善のための具体的方法（原因と現象の正確な理解～リギングとドリルの助言～舵手の注意点）まで。記録を読み返してみると、その後、助言のキャッチボールが返せていなかったかな、と反省。

しかし思えば自分が高校でロウイングに出会ってから半世紀以上！上記のご縁からももう四半世紀。いろいろな出会いをいただいたことで、今の自分がここにあるのだと感慨ひとしおです。

個人情報扱いに、より一層の配慮が必要な時代、また世相の変化もあり、一つの漕艇部が時間の経糸を紡ぎ未来につなげ発展させるのは、相当に大変な時代になっていると痛感します。陵水艇友会のキーパーソン各位の長年にわたるご尽力に頭が下がる思いです。

一方で、これからの時代、一度は遠ざかっても、何かのご縁で再び支援に参加してくれる、そんなOB/OGを増やしていくことがより重要になっていると思います。自分たちが現役だった頃、OBからの支援に支えられてきたことを思い返していただく、そんなきっかけに100周年誌が、この拙稿がお役に立てることを心より願っています。

| エイト | ボア |
|-------------|-------|
| 8. 麴屋 (3回生) | [赤・5] |
| 7. 西 (3回生) | [黄・3] |
| 6. 長瀬 (2回生) | [赤・2] |
| 5. 浜崎 (1回生) | [赤・3] |
| 4. 西山 (3回生) | [黄・8] |
| 3. 山本 (2回生) | [黄・2] |
| 2. 真木 (2回生) | [黄・8] |
| B. 三嶋 (3回生) | [赤・8] |

シックスマン、ボアメンを主に
お送りしましたビデオは、オ！
です。全体で15分余りにま
よろしくお願ひ致します。

相談いただいた岩崎さんのお手紙から、エイトメンバーのお名前部分です

滋賀大学漕艇部 100年の歩み



滋賀大学漕艇部 100年の歩み

中 村 邦 男 (大29回)

はじめに

今でも母校・滋賀大学漕艇部のことを想うとき、部歌の次のフレーズが脳裏を駆け巡ります。

“一碧の空雲もなく 古城の姿はるけきに
男児覇業を夢見けん 西征の日は今ぞ来ぬ”

彦根で過ごした大学の4年間は、かけがえのない人生の財産です。

滋賀大学陵水艇友会100周年を迎えるにあたり、当会の歴史を振り返ります。そこには先輩から後輩に連綿として引き継がれてきた、不屈の魂があります。

さあ、一緒に陵水艇友会の歩みを辿ってみましょう。

目 次

はじめに

1. 滋賀大学と漕艇部

- (1) 彦根高商から滋賀大学へ
- (2) 城下町彦根と滋賀大学漕艇部
- (3) 陵水艇友会の名前の由来

2. わが漕艇部の100年の足跡

- (1) 【草創期：彦根高商時代】 1923年（大正12年）～1948年（昭和23年）
- (2) 【成長期：大学初期】 1949年（昭和24年）～1963年（昭和38年）
- (3) 【発展期】 1964年（昭和39年）～1976年（昭和51年）
- (4) 【黄金期：部員50名体制】 1977年（昭和52年）～1990年（平成2年）
- (5) 【転換期：女子選手の活躍／小艇での躍進】 1991年（平成3年）～2007年（平成19年）
- (6) 【廃部危機からの脱出】 2008年（平成20年）～2019年（令和元年）
- (7) 【コロナ禍を乗り越えて】 2020年（令和2年）～2023年（令和5年）
- (8) 【インカレ初優勝】 2024年（令和6年）

3. 陵水艇友会の活動と生涯スポーツ「ローイング」

- (1) 陵水艇友会の活動
- (2) 生涯スポーツ「ローイング」を楽しむ
- (3) マスターズレガッタでの活躍
- (4) 陵水艇友会100周年に向けて

おわりに

※当稿は、『日本ボートマンクラブ（JBC）2020各校・クラブ紹介』（2021年4月）向けに執筆した「⑨滋賀大学陵水艇友会」を大幅に改訂した上で、2021年（令和3年）以降の活動を加筆したものです。

1. 滋賀大学と漕艇部

(1) 彦根高商から滋賀大学へ

滋賀大学経済学部の前身の彦根高等商業学校（以下、彦根高商と略）は、1922年（大正11年）、全国9番目の官立高等商業学校として発足し、翌1923年に開校しました。彦根藩井伊家の武士の精神と、近江商人の商売の才覚をベースにした「士魂商才」が建学の精神です。

滋賀大学は、戦後1949年（昭和24年）、彦根高商と滋賀師範学校を母体に新制大学として発足しました。経済学部は彦根市、教育学部は大津市に立地し、両者は約60Km 離れていることから、学生は教養課程から別々のキャンパスで学ぶことになります。

従って、経済学部と教育学部はそれぞれが単科大学のように、旧制学校の伝統を継承し発展してきました。2017年（平成29年）、日本で初めて「データサイエンス学部」が本部・彦根に設置され、産業界から大いに注目を集め、活躍が期待されています。

漕艇部も「滋賀大学教育学部漕艇部」と並存していますが、本部彦根にデータサイエンス学部が設立されて2学部になったことから、「滋賀大学経済学部漕艇部」は「滋賀大学漕艇部」と名称変更しました。

ブレードのカラーは琵琶湖の色に由来します。琵琶湖の水深は北に深く、南に浅くなっています。琵琶湖北湖の彦根にある経済学部は濃い緑色、琵琶湖南湖の大津にある教育学部は鮮やかな青色をブレードカラーにしています。

(2) 城下町彦根と滋賀大学漕艇部

滋賀大学漕艇部を語る時、琵琶湖を取り巻く豊かな自然と近江の国、そして城下町彦根のほんわかとした風情を抜きには語れません。彦根市は、滋賀県琵琶湖の東側に位置し、江戸時代は徳川家譜代筆頭の井伊氏の城下町として栄えました。

滋賀大学彦根キャンパスや漕艇部艇庫は、今も市の中心にある国宝彦根城の郭内にあります。

彦根キャンパスから艇庫まで自転車で10分程度、彦根城の急勾配の石段は下半身を鍛える陸トレの絶好の場所でした。



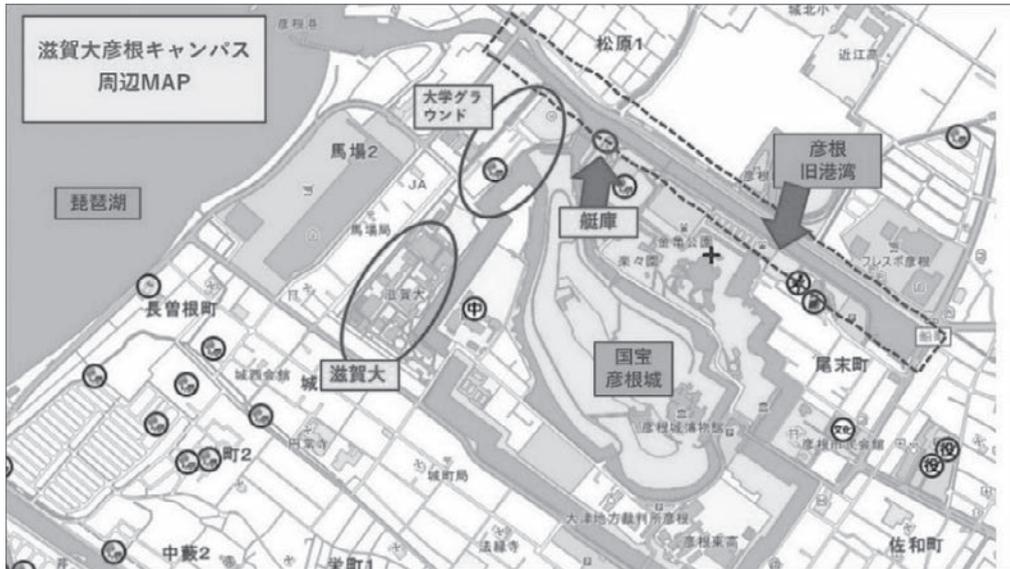
彦根城の坂道ダッシュや外堀外周をランニングして、下半身を鍛えました。1978年頃の練習風景です。



国宝彦根城天守閣前にて。部員数が拡大した1978年頃。筆者の同期生は17人と、当時最多の人数でした。

彦根城の麓の公園の一角に滋賀大学艇庫はあります。艇庫の前の彦根旧港湾（外堀）から彦根港を経て琵琶湖に出られます。45年前の筆者が現役のころは、早朝の波の無い時間帯に琵琶湖の多景島（たけしま）や沖の白石までロング漕をしたものです。

地元彦根市では彦根城のユネスコ世界遺産登録を目指しています。お城周辺の整備も進み、現在は彦根城の坂道をダッシュすることも叶いません。それでも青



春の日々、琵琶湖で見た夕日の美しさ、彦根城の新緑の鮮やかさは、OBにとって忘れがたい思い出です。

(3) 陵水艇友会の名前の由来

滋賀大学経済学部のOB会組織「陵水会」は、1926年（大正15年）彦根高商が第一回の卒業生を世に送り出した際に結成されました。キャンパスから眺望できる美しい山々と碧い湖に想いを馳せ「陵水会」と命名されたそうです。

「陵水会」の名称を承けて、漕艇部のOB会組織は、1964年（昭和39年）「陵水艇友会」として正式に組織化されました。



建て替え前の旧彦根艇庫前での集合写真（1970年秋）



滋賀大学彦根艇庫。1928年（昭和3年）に艇庫が出来、建替えを経て、1979年（昭和54年）に現在の場所に移転しました。写真は2024年（令和6年）11月開催のOB・OG対象とした思い出の艇庫に別れを告げる集い（見学会／試乗会）です。

2. わが漕艇部の100年の足跡

陵水艇友会では5年毎に記念行事を開催、「偲湖」と題する冊子を発刊し、漕艇部の歴史を掲載しています。また現役学生からは「OB通信」が隔月でメール配信され、現役の戦績やクラブの状況を伝えてくれます。本稿では、それらの助けを借りながら、100年に及ぶわが漕艇部の歴史を辿ります。

(1) 【草創期：彦根高商時代】 1923年（大正12年）～1948年（昭和23年）

1923年（大正12年）開校と同時に現在の漕艇部の前身である短艇部が活動を始めました。当初は校庭内の艇庫から掘割を伝って琵琶湖まで漕ぎ出せたそうです。1927年（昭和2年）5月に大阪市の中の島で関西高専競漕大会が開催され、彦根高商はフィックス艇の決勝で強豪の神戸高商に快勝し、学校創立以降初めて優勝を果たします。優勝の翌日は、彦根駅頭に多数の在校生を迎え、盛大な優勝パレードが行われました。1935年（昭和10年）9月、男子舵手付きフォアで関西選手権を制し、11月には関西代表として翌年に行われるベルリンオリンピック派遣選抜レースに出漕しました。



昭和初年、彦根旧港湾（彦根城の外堀）にて、フィックス艇で漕ぎ出す。往時が偲ばれる貴重な写真です。

(2) 【成長期：大学初期】 1949年（昭和24年）～1963年（昭和38年）

1949年（昭和24年）5月に新制滋賀大学発足、漕艇部が再スタートします。早くも翌年には国民体育大会フィックス艇の部で準優勝を勝ち取りました。

1954年（昭和29年）には戦後初めての外国クルーとのレースであるケンブリッジ大学歓迎関西選抜レガッタにて男子舵手付きフォアが優勝。その余勢をかい



1954年（昭和29年）、ケンブリッジ大学歓迎関西選抜レガッタ男子舵手付きフォアで同着1位。

1955年（昭和30年）関西選手権の男子舵手付きフォアの部で優勝、初めての全日本選手権でも堂々準決勝へ進出し、滋賀大学の名を全国に広めます。朝日レガッタでは、一般男子舵手付きフォアで1958年（昭和33年）準優勝、1960年（昭和35年）第3位、1961年（昭和36年）準優勝と実力では関西で常にトップクラスの地位を不動のものにしました。

(3) 【発展期】 1964年（昭和39年）～1976年（昭和51年）

舵手付きフォアでは安定した成績を残しながら、長らくエイトは準決勝止まりでしたが、ようやく1972年（昭和47年）全日本新人選手権エイトで第4位に入賞しました。

この世代が4回生になり、1974年（昭和49年）朝日レガッタ一般男子エイトで準優勝します。荒天の中の決勝レースで惜しくも僅差で鹿児島大学に敗れたものの、この朝日レガッタでの一般男子エイトの準優勝が大いに自信になりました。



1974年（昭和49年）、朝日レガッタエイト準優勝。3年後の1977年（昭和52年）の全日本新人選手権準優勝に繋がります。後輩達の前で果敢に挑むことで、勝つことの執念が次世代に受け継がれました。

た。こうして、「地方大学の一学部だけの漕艇部でも、高い目標と厳しい練習と強い意志を持てば、全国でも勝てる」という伝統的な部の信念が醸成されていきます。

(4) 【黄金期：部員50名体制】 1977年（昭和52年）～1990年（平成2年）

①部員数拡大

1975年（昭和50年）当時、部員数は12名と少なく、部員数の確保が部の最重要課題でした。そこで当時の監督・コーチの号令のもと、新入部員勧誘が活発化します。その結果、1976年（昭和51年）に9名、翌年からは毎年10名以上の大量の新入部員を獲得します。

そのような部員数拡大機運の中で、1977年（昭和52年）全日本新人選手権において男子エイトが準優勝を果たします。新人戦とは言え、全国レベルでの大会の準優勝は大きな自信になりました。このレースを契機に、滋賀大学は朝日レガッタや中日本レガッタ、関西選手権などの西日本の主要大会のエイト決勝進出の常連校となります。



黄金期の幕開け、1977年（昭和52年）全日本新人選手権男子エイト決勝、優勝：東京大学、2位：滋賀大学、3位：東北大学。一番手前が滋賀大学の力漕。優勝の東大とは1/3艇身差で逆転負け。

②外部コーチ招聘

1981年（昭和56年）秋、更なる飛躍に挑戦すべく約25年ぶりに外部コーチを招聘しました。桑野造船株式会社社長、瀬田漕艇クラブの代表を歴任された故古川宗寿氏（1982年～1986年（昭和57年～昭和61年）コーチ）です。1982年（昭和57年）古川コーチの指導が始まって、練習はより科学的かつ実践的になり、しかも練習量は驚くほど増加します。

初めて迎えるシーズンで、朝日レガッタの一般男子エイトでは準決勝を1位で通過。優勝を狙っていましたが、悪天候のため決勝レースは中止。中日本レガッタでは一般男子エイトで準優勝を勝ち取り、そのあと関西選手権でも男子エイトで準決勝1位通過。通過タイムは全体のトップで、優勝は濃厚と見られました。しかし、朝日に続き悪天候で決勝中止、幻の優勝となりました。このクルーはインカレでも敢闘しますが、敗復上りの準決勝にて、予選最高タイムを出した早稲田大学に逆転負け、インカレ決勝の厚い壁に阻まれました。

しかしこのレースを見ていた当時の1回生たちが3年後の1985年（昭和60年）に男子エイトで関西選手権初制覇を達成します。戦前の彦根高商からの伝統を受け継ぎ、戦後は舵手付きフォアで漕艇部の基盤を作り、エイトでは1974年（昭和49年）の朝日レガッタ準優勝を経て、1977年（昭和52年）の全日本新人選手権準優勝。それから8年目、ついに常勝の東レ滋賀を破り、エイトで関西の頂点に立ったのです。

翌1986年（昭和61年）のインカレでは、前年の関西選手権優勝メンバーの半数が対



1985年（昭和60年）、関西選手権エイト決勝にて、東レに1艇身差をつけて優勝。関西選手権エイト初制覇、歓喜の雄叫び。

校エイトに残りました。その年の圧倒的な優勝クルーである中央大学に、予選と準決勝で対戦するという不運に見舞われ、共に惜しい敗戦を経験しました。但し準決勝36クルー中、滋賀大学は中央大学に次いで2位の好タイム。準決勝が事実上の決勝戦と言われました。部員数拡大と古川イズムにより、滋賀大学は漸く学生トップレベルまで肉薄していたと言えます。

また、その当時、古川コーチが所属する瀬田漕艇クラブとの混成クルーで国民体育大会に出場するチャンスを得、1982年（昭和57年）島根国体成年男子ナックルフォア優勝、1986年（昭和61年）山梨国体成年男子舵手付きフォア準優勝など、滋賀大学は華々しい戦績でまさに黄金時代を築きます。



1982年（昭和57年）、島根国体ナックルフォア練習風景。古川コーチから艇上で沢山のことを学びました。

(5) 【転換期：女子選手の活躍／小艇での躍進】 1991年（平成3年）～2007年（平成19年）

①女子選手の活躍

滋賀大学経済学部は長らく圧倒的に男子学生が多く、女子学生は3%程度しか在籍していませんでした。しかし女性の社会進出、数度にわたる入試制度改革を経て、女子学生が徐々に増加します。

数年にわたる女子マネージャーの活躍を経て、1993年（平成5年）には、初めての女子選手が誕生しました。女子選手を受け入れる体制が未整備の中、男子選手に交じって練習し、2001年（平成13年）にはインカレ女子シングルスカルで4位入賞、朝日レガッタ・関西選手権でも上位入賞を果たします。女子シングルスカルの活躍はその後も続き、2002年（平成14年）から5年連続で関西選手権女子シングルスカルの決勝進出を果たします。またマネージャーとして入部する女性も継続的になり、体調管理・栄養管理・メンタルサポート等に貢献しました。



2001年（平成13年）、インカレ女子シングルスカルで土田選手が4位入賞。

②小艇での躍進

中日本レガッタ・男子エイトで1996年（平成8年）から6年連続で常に上位の成績を残し、また2000年（平成12年）から2年連続で全日本軽量級選手権において男子エイトが5位になりました。しかし、エイトで全日本のトップクラスを目指すには依然高い壁がありました。

当時のコーチから「滋賀大学から全国トップを」という提案で、対校エイトの中から、男子舵手なしペアを編成したのは2003年（平成15年）のことです。

その結果「男子舵手なしペア」においては、2005年（平成17年）に全日本選手権5位、全日本軽量級選手権3位、インカレ2位になるなど、2003年（平成15年）から2007年（平成19年）にかけて男子舵手なしペアで連続して全国レベルの大会で好成績を残しました。



2005年（平成17年）、全日本軽量級選手権舵手なしペア3位。

(6) 【廃部危機からの脱出】2008年(平成20年)～2019年(令和元年)

「女子選手の活躍」と「小艇での躍進」で部全体のレベルアップが一定の成果を見せたそのころから、部員数減少という漕艇部にとっては死活問題となる傾向が現れ、ついには廃部危機に瀕します。

原因は時代の変化と共に学生気質の変化や学業との両立の困難さなど様々です。部員が激減することにより、「有名校に負けない、やればできる」という伝統的精神の継承すら困難になりました。

多くの地方国立大学の漕艇部が同じような状況に追い込まれ、漕艇部が廃部になった大学もあまた聞こえてきました。



ファミリーデーで部員の保護者と相互理解を深めました。実際にエルゴや乗艇を体験してもらいました。

しかし危機に瀕した時に、OBが一丸となって現役を支援するのが滋賀大学漕艇部の強みです。新入部員勧誘の効果的なノウハウも継承されていなかったことから、OBと現役が一体となり新入部員の勧誘を実施しました。その結果、約5年で部員数が60人を超える体制に戻したのです。

また学生がクラブ活動を継続する為には保護者の理解が必要との観点から、ファミリーデーを企画し、漕艇部と保護者との相互理解に努めました。

このような地道な強化策が功を奏して2015年(平成27年)の全日本新人選手権男子舵手付きフォアでは決勝4位に入賞します。の多数のOBが戸田漕艇場へ応援に駆け付け、大いに盛り上がりました。

令和以降も組織的なクラブ強化は継続します。男子は舵手付きフォア、女子はシングルスカル・ダブルスカル・ペアに重点を絞り突破口を模索します。

2019年(令和元年)は朝日レガッタの一般男子舵手付きフォアで16年振りの決勝進出、関西選手権男子舵手付きフォアでは3位入賞と成果が出てきました。関西選手権でのメダル獲得は実に12年振りです。



2015年(平成27年)、全日本新人選手権フォア4位クルー。久しぶりの現役の活躍に、OBも興奮しました。

(7) 【コロナ禍を乗り越えて】2020年(令和2年)～2023年(令和5年)

2019年(令和元年)秋にはコーチングスタッフが一新され、太田監督(大32回)が就任します。また杉藤氏を外部アドバイザーとして迎え、より組織的な指導体制の整備をはかりました。

そのような矢先に、突然コロナ禍が襲い掛かります。2020年(令和2年)4月から2021年(令和3年)6月の間に3回の緊急事態宣言が発出され、練習や新入生勧誘活動の自粛を強いられました。しかしこのような状況でも、YouTubeによる新入生へのPR活動やLINE・TEAMS等のネットワークツールの活用で部員間の情報共有を行いました。厳しい練習環境の中でもコーチングスタッフと部



2021年(令和3年)、全日本大学選手権大会女子ペア決勝で3位の快挙(藤田選手/長谷川選手)。

員が一体になり、今できる練習を地道に進めたのです。

コロナ明けと共に、地道な練習の成果が花開きます。2021年（令和3年）には、全日本大学選手権大会にて、女子ペア（藤田選手／長谷川選手）が決勝3位に入賞します。滋賀大学女子クルーとしては初の、また滋賀大学としては実に16年ぶりとなるメダル獲得という快挙を成し遂げました。いずれのレースも後半追い上げの心躍る展開です。コロナ禍で無観客での大会となりましたが、オンラインで実況され、多くのOBを魅了しました。後日兩名には、滋賀大学の位田隆一学長より学長賞が授与されました。

女子の活躍に続けと2022年（令和4年）には男子部員も躍進します。朝日レガッタでは成年男子舵手付きフォアで決勝3位、関西選手権では男子舵手付きフォアで優勝を勝ち取りました。また女子も関西選手権の女子ペア決勝で3位と好成績をおさめました。

近年、女子選手の活躍が際立っています。その象徴が2023年（令和5年）朝日レガッタでの成年女子シングルスカルでの西村選手の優勝です。朝日レガッタでの優勝は滋賀大学史上初の快挙です。在学生はもとより、多くのOB・OGにとって心躍るニュースでした。

西村選手には、2023年（令和5年）11月に滋賀大学の竹村学長より、学長賞が授与されました。西村選手が大学に入学した2021年4月はコロナ禍で3回目の非常事態宣言が発出された時期。思うように活動できない状況の中でも、前を向いて練習に打ち込んできた成果が結実したのです。



2022年（令和4年）、関西選手権にて男子舵手付きフォア優勝。



2022年（令和4年）、関西選手権にて女子ペア決勝3位（荒木選手／西村選手）。

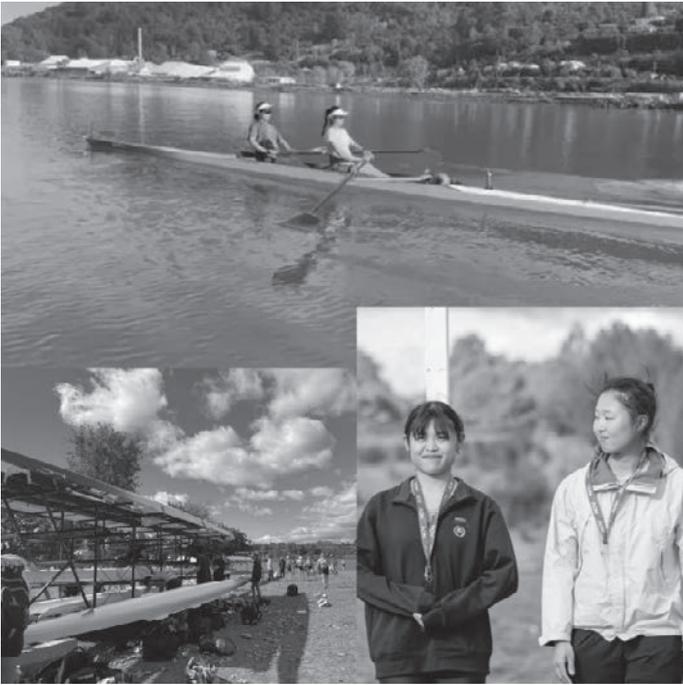
(8) 【インカレ初優勝】2024年（令和6年）

2024年（令和6年）はまさに滋賀大学漕艇部にとってエポックメイキングな年となりました。ついに念願のインカレ優勝を成し遂げたのです。

この年は部員（西村選手／銚藤選手）のニュージーランドへの短期留学から始まります。この留学は、「Game on English Rowing」というニュージーランド政府により発足された「英語×スポーツ短期留学プログラム」によるものです。受け入れ先は名門オタゴ大学で、4週間英語とローイングを学びます。留学実



2023（令和5）11月、西村選手（左端）は竹村学長（中央）から滋賀大学学長賞を授与されました。朝日レガッタ成年女子シングルスカルの優勝を評価されたものです。



今回の短期留学のプログラムに現地大学でのレース参加がありました。西村選手/銖藤選手はダブルスカル・ペアの二種目で見事に優勝しました。



2024年（令和6年）6月、全日本ローイング選手権で女子ペア決勝2位（銖藤選手/西村選手）。社会人のNTT 東日本に次ぎ、学生では1位の力漕。



2024年（令和6年）7月、関西選手権にて男子クルーム3位入賞を果たしました。

現にはOB有志の支援で短期間に留学資金を集めることができました。

このプログラムで同世代の海外選手と切磋琢磨することで、競技技術に留まらず、睡眠・食事の重要性を認識し、集中して練習に取り組めたようです。彼女たちは留学から帰国後、ニュージーランドで学んだことをレポートや報告会で部内に横展開しました。

これらの取り組みはシーズンでの結果に繋がります。6月の全日本ローイング選手権では女子ペアで決勝2位、7月の関西選手権では女子ペアが優勝・男子舵手付きフォアで3位の好成績を残します。

そして臨んだ全日本大学選手権では、女子ペア（西村選手/銖藤選手）が優勝を掴み取りました。創部100年にして、インカレ初優勝の快挙です。また女子エイト（同志社大学・滋賀大学混成）は準優勝、男子対校の男子舵手付きフォアはB決勝3位（全体9位）に入りました。惜しくも入賞は逃しましたが、男子としては19年振りにインカレ最終日まで残ったのです。

2024年（令和6年）の活躍は現役選手のたゆまない練習の成果であることは勿論ですが、監督・コーチ・現役スタッフ・OB・OGの支援など、滋賀大学漕艇部全体の総合力の勝利とも言えるでしょう。インカレでの躍進は陵水艇友会100周年に向けて大きな弾みとなりました。



2024年（令和6年）9月、全日本大学ローイング選手権大会にて、女子ペア優勝（銖藤選手/西村選手）。念願のインカレ優勝トロフィー授与の瞬間です。



2024年（令和6年）9月、全日本大学ローイング選手権大会にて、男子付きフォアはB決勝3位（全体で9位）。近年はフォアのレベルが高くなっており、B決勝進出は今後の飛躍への橋頭堡になることでしょう。

3. 陵水艇友会の活動と生涯スポーツ「ローイング」

(1) 陵水艇友会の活動

陵水艇友会の活動の柱は、現役支援とOB間の親睦です。漕艇部の活動は現役の自主性を重んじつつ、OBの学生時代や社会人としての経験を踏まえて、中長期の視野でサポートしています。

陵水艇友会では毎年5月の朝日レガッタ最終日に定例総会、また5年毎に記念式典を開催しています。2019年（令和元年）には95周年記念式典を実施、来たる100周年記念式典に向けて思いを新たにしました。

現場でのOB同士の交流は、関西・中部・関東の3支部で、親睦会や地域のマスターズレース参加など、それぞれの地域に密着した活動を行っています。

(2) 生涯スポーツ「ローイング」を楽しむ

陵水艇友会の近年の活動を語るとき、故北居和夫元会長のことを思い出します。北居さんは滋賀大学漕艇部監督、陵水艇友会会長として獅子奮迅の活躍をされ、廃部の危機に瀕した漕艇部の復活に力を注がれました。

一方で、北居さんは自らローイングを楽しみむと共に、生涯スポーツとしてのローイングの喜びを仲間を広める伝道者でもありました。陵水艇友会の会員の中でも、北居さんに誘われて数十年振りにローイングを再開した方が多数おられます。

大学4年間の厳しい合宿生活を体験して、「ボートは二度と御免だ」という人が多いのに、なぜリタイア前後のOBがローイングに戻ってきたのでしょうか？

その問いに北居さんはこう答えます。

“それはローイングの魅力だと思います。キーワードは「自然・交流・健康」です。

- ①【自然】：美しい自然と四季折々の風景を楽しみながらボートを漕ぐ素晴らしさの再発見。
- ②【交流】：世代を超えたボート仲間との交流。練習後の仲間との屈託のない会話の楽しみ。
- ③【健康】：ボートを継続して楽しむことで、健康と体力を維持。”

何歳になっても年齢相応のローイングの楽しみ方があることを広めて頂いた北居さんの功績は計り知れません。かく言う筆者も北居さんに触発されてローイングの世界に戻ってきた一人です。11年前の56歳からローイングを再開し、現在も全国各地で練習やレースと漫漕を楽しんでいます。

(3) マスターズレガッタでの活躍

近年、各地のマスターズレガッタへの出漕など、陵水艇友会会員のボートを楽しむ機会や活動が活発化しています。世界マスターズや全国レベルの主要大会から各地域の大会まで、20歳台から80歳台まで幅広い層で、それぞれのレベルでレースを楽しんでいます。

卒業後何十年もボートを漕ぐことの無かった方々が、様々なきっかけでオールを握り、生涯スポーツとしてのローイングの魅力を再発見しています。陵水艇友会では全日本マスターズには第1回の愛知池大会から



2017年（平成29年）6月、第10回全日本マスターズ大会のレセプションにて。左から、高田会長（当時/陵水）、大久保会長（当時/日本ボート協会）、故北居元会長（陵水）。



浜寺で開催された全日本マスターズレガッタには東京・名古屋・大阪の陵水艇友会メンバーが集結し、大学OBでは一橋大学に次ぐ2番目の28人の大所帯になりました。



2017年（平成27年）、第10回全日本マスターズでの陵水艇友会の力漕。男子エイトFカテゴリ（60～64歳）で優勝。整調は故北居元会長、6番は筆者。

出場しています。

第12回全日本マスターズレガッタ（2019年（令和元年）/浜寺）では、参加125団体：1,300名の参加人数の中で大学OB会組織としては四神会（一橋大学）に次いで2番目の28人の参加でした。地方の1学部の大学OBとしては稀有の存在と言えるでしょう。

特筆すべきは、第10回記念大会（2017年（平成29年）/戸田）男子エイトFカテゴリ（60～64歳）で、当時最強と言われた団塊号玄武を激戦の末、0.6秒差で制し優勝したことです。陵水艇友会クルーには突出した選手はいませんでした。しかし同じ漕艇部の釜の飯を食べた絆がもたらしたものが、全員が同じリズム感を共有してゴールまで漕ぎ通せた、これが勝因のように思います。

(4) 陵水艇友会100周年に向けて

2014年（平成26年）の陵水艇友会90周年にて、『100周年までに全日本選手権男子エイト優勝を果たし、男女ともに決勝常連校になる』という目標を掲げ、取り組みを開始しました。それから既に10年経過していますが、現状の戦績を見る限り、道のりは決して簡単ではありません。

私たちOBの時代から滋賀大学を取り巻く環境は大きく変わり、学生の気質も変化しています。2019年（令和元年）の95周年では、『現役の意思を尊重する良き伝統を守りつつ、大学・地域とともに永続的に発展するという現役・OB共通の理念とビジョン構築を進めよう』との提言がありました。

現在、滋賀大学漕艇部100周年事業として、「新艇庫建設プロジェクト」が推進されています。現在の彦根艇庫は私が現役の時に建てられたので、既に45年以上経過しています。敷地の地盤沈下と老朽化による建て替えが急務となり、新艇庫建設は陵水艇友会100周年の記念事業と位置付けられました。

新艇庫建設の資金については、大学からの資金援助は困難なこともあり、陵水艇友会会員からの寄付金募集が計画されました。陵水艇友会600人の総力を結集することが狙いでもあります。幸い2024年（令和6年）12月時点で目標の寄付金1.3億円も達成しました。計画では2025年（令和7年）9月に新艇庫が竣工、11月に滋賀大学漕艇部100周年記念式典並びに新艇庫お披露目会開催の予定です。2025年（令和7年）9月開催の



彦根新艇庫の外観イメージ図です。艇庫全体の色調は彦根景観条例の制約カラーの中で、陵水艇友会会員の希望も踏まえて決めていきます。

滋賀国体（国民スポーツ大会）に合わせて、彦根総合スポーツ公園（平和堂 HATO スタジアム）周辺が整備中です。艇庫竣工の暁には、国宝彦根城をバックに滋賀大漕艇部の新艇庫が映えることでしょう。

夢の実現に向かって、陵水艇友会の「力漕」は今日も続きます。

おわりに

駆け足ではありますが、滋賀大学漕艇部の100年の歩みを振り返りました。部員減少による廃部危機やコロナ禍の苦しい時期も、現役とOBが一体となり乗り切ってきました。むしろ危機を乗り越えて以前にもまして部員が逞しくなったように思います。

『全日本選手権男子エイト優勝を果たし、男女ともに決勝常連校になる』という目標には未だ道遠ですが、確実に一歩ずつ前へ進んでいます。この歩みを止めることなく、これからも現役とOBが手を繋いで目標に向かって進みましょう。(完)

彥根新艇庫建設



100周年と新艇庫建設

加藤 英 隆 (大26回)

新艇庫建設プロジェクトメンバーの一人として、少しお話させていただきます。2023年5月のOB総会にて、新艇庫建設が正式に決議・承認されました。旧港湾沿いにあった艇庫が1979年に現在の場所へ移設されてから、実に半世紀ぶりに滋賀大学ボート部の艇庫が建て替えられることとなりました。プロジェクトチームが早々に発足し、建設までのプランが練られました。当初は、2階建てで合宿施設を兼ね備えた艇庫を計画していましたが、さまざまな法的制約に直面しました。まず、建築基準法により、現艇庫が公園道路に接していないため建築許可が下りないのではないかと懸念がありました。さらに都市計画法や景観条例の制約により、トイレやシャワー室の設置が認められなかったり、建物の高さが制限されたりしました。床面積の増加についても、市役所からは「現状維持が大原則」として、かなり厳しい反対を受けました。

そのような厳しい条件の中、粘り強く市役所と交渉を重ねた結果、2階の床面積を1階床面積の20%まで拡張すること、更に天井高140cmのロフトを1階床面積の50%まで2階に追加することが認められました。これらは、何度も交渉を重ねた末に勝ち取った成果です。建替え候補地についても、宇曾川河口（大学から西7km、荒神山南の位置）、大学グラウンド、ヨット部艇庫隣接地などが検討されましたが、最終的には現在の場所で建替えることとなりました。水道の設置についても強い希望がありましたが、給水・排水の経路に課題があり、かなりの費用がかかることが判明しました。また、艇庫沿いにあった電柱の撤去にも予想外の費用が発生し、電力会社が移設工事費用を負担してくれるわけではなく、さらに隣接する彦根東高校への電線配管費用も負担せざるを得ませんでした。男女別の更衣スペースがなく、トイレも水道もない状態が長く続いていたことに、今更ながら驚きとともにため息が出る思いでした。建設資金の調達は最大の課題でしたが、600余名の会員のほぼ半数の方々から寄付金という形でご支援をいただくことができました。大学の法人化により、建設資金を大学から拠出してもらうことはほぼ不可能な状況でしたが、1億3千万円の目標額を超え、最終的には1億5千5百万円余りの寄付金が集まりました。

これは、まさに奇跡に近い出来事だったと思います。思い起こせば、今から60余年前にも艇友会が必死に募金活動を行い、当時の現役部員が個別に先輩方を訪問して多額の資金を調達し、晴れて大津御殿ヶ浜に合宿所が建てられたことは「ボート部の底力」として語り草となっています。創部100年を迎える今、その長く続いてきた伝統の力が、再びここに結実したのだと感じています。2023年6月から2025年8月までの2年以上にわたり、何度もご寄付のお願いをし、それに応えてくださった多くのOB・OG、そしてご友人の皆様に、改めて心より感謝申し上げます。

〔新艇庫概要〕 着工2025/06 竣工2025/11 延床面積249m² 高さ8.6m

1階＝保管庫、筋トレスペース、2階＝男女更衣室、収納用ロフト

設備＝電動シャッター、エルゴ、筋トレ器具、昇降用電動チェーン、ミストシャワー、手洗い器、製氷機、映像モニター。

彦根新艇庫の勇姿



部史に残る記録によれば彦根高商開学と同時に端艇部が創設されたが、艇庫も無く艇はお堀の一部に係留。開学わずか5年後の1928年（昭和3年）には初代彦根艇庫が学友会からの寄付により立ち上がった。

戦後間もない1951年（昭和26年）には尾末町の港湾に隣接して新たな艇庫が竣工。1979年（昭和54年）、琵琶湖総合開発の一環として旧港湾の工事が行われ、艇庫は現場所に移設。

そして2023年5月開催の陵水艇友会総会において新艇庫の建設が提起、承認され、新艇庫プロジェクトがスタート。艇友会会員及びその知人・友人から多額の寄付を受け2025年6月着工、2025年11月に竣工した。このご支援に対する感謝の意を後の世代まで伝えるため、この時の寄付者の名を銘板に記し新艇庫内に掲示している。

彦根新艇庫建設の記録



2023年5月 艇友会総会で新艇庫建設を決議



2024年11月 旧艇庫前に参集



旧艇庫の取壊しのため艇は隣接の公園で保管



2025年4月 旧艇庫取壊し開始



2025年6月 基礎工事開始



2025年7月 躯体立ち上げ



2025年9月 内装・アーム工事完了



2025年9月 建物完成

追悼寄稿



追悼 北居和夫さん

水 島 孝 之 (大18回)

2020年4月2日、北居和夫君が3月27日に逝去したとの報が入った。陵水艇友会関東支部の緒方さんからの連絡であったと記憶している。

同期として彼との思い出を綴ってみます。

彼との出会いは、昭和41年（1966年）の新入部員の顔合わせの時に、同期は北居、山本、田中、中島、大西、三田村、臼杵、水島の8人であった（臼杵君はのち、家庭の事情で退部）。7人は卒業まで共に過ごした。

当時のボート部は4回生の弓削、海老、別役、長尾先輩、3回生の館山、藤森、進先輩、2回生の岡本、大原、前田、石井、松下先輩と、全員で20名足らずの構成であった。今では許されないと思うが、15時からの練習故に5時限目の授業は受講できぬまま、サーキットトレーニング、佐和山までのランニング、彦根城のダッシュ登り、そして新入生歓迎合宿、朝日レガッタ合宿、関選合宿、秋の合宿と江国寺と石山の合宿所での思い出は尽きない。

北居君は長浜北高校の出身、高校時代にバトミントンで活躍し、ボート部入部当初からランニングにも様々なトレーニングにも長けていた。先輩たちとクルーを組み全日本選手権に出場したのは同期で彼だけであった。彼は真面目かつ明朗な性格で長い付き合いの中でも全く嫌みを感じない男で、のちにキャプテンとしてリーダーシップを大いに発揮してくれた。

卒業後は、松下電器産業（現パナソニック）に入社、新婚家庭に同期で押しかけごちそうになったこと、またのちに私の結婚式の司会を引き受けてくれたことも懐かしい思い出です。会社生活では、FA（ファクトリーオートメーション）部門の長を務め活躍されました。

彼と東京で面会した際、定年まで1年以上残す中で、ボート部の監督を引き受けるべく早期で退職する旨、打ち明けられ驚きました。それから後の北居君のボート部への熱心な情熱溢れる指導力の発揮や貢献は皆さんのよくご存知の所であります。監督業の後には、陵水艇友会の会長も引き受けて全国の支部の会合や各地の試合応援にも駆けつけ、部の盛り上げにも注力してくれました。私が彼に対しうらやましくも尊敬し真似できないのは、ボートに対する情熱です。彼自身が卒業後もボートを楽しみとしマスターズ大会への出場、世界マスターズ大会へ出漕！ 会う度に私は彼に、「よー頑張るなあ！君はスーパーマンだな、すごい！」と言っておりました。その彼から癌のことを聞いた時は、本当に驚きました。

2019年の12月東京での会合の帰路に、見舞いをお願い彼に連絡、久々に面会でき同期の三田村君も呼んでくれ、「今日は、体調が良いので一緒に食事に行こう」ということとなり、奥様と4人で鰻を食し、楽しい会話で過ごしました。駅までご夫妻で送ってくれ、互いに手を振って別れて3か月半後の訃報でした。健在ならこの度の艇庫完成、全日本優勝、100周年をどんなに喜んでくれたでしょう！

部の恩顧者、北居さんありがとう！！

県勢7種目を制す

最終日4日間の熱戦閉幕

大津市の県立琵琶湖漕艇場で開かれた第65回朝日レガッタは最終日の6日、19種目で決勝があり、湖岸には朝から応援団や地元住民らが駆けつけ、声援を送っていた。県勢は7種目で優勝を決め、4日間の熱戦は幕を閉じた。

第65回 朝日レガッタ

主催 関西ポト運盟 県教委
大津市 大津市教委 朝日新聞社

県勢はベテラン選手たちが活躍。マスターズ50歳以上男子シングルスカルで田中隆雄選手が大会8連覇を果したほか、新設種目の特別平均50歳以上男子エイトで、滋賀大陵水艇友会が息のあったオールさばきで快勝した。

準決勝で他のクルーを圧倒した男子エイトの東滋賀は、決勝で中部電力(愛知)との接戦を繰り広げたが、わずか0・01秒及ばず惜敗。白熱したレースに観客からは温かい拍手が送られた。

- ◆優勝クルー
- 【マスターズ50歳以上男子シングルスカル】田中隆雄(マザールイクル) 11分43秒37
 - 【マスターズ60歳以上男子シングルスカル】安達温二(瀬田RC) 11分43秒37
 - 【特別70歳以上男子シングルスカル】三宅一雄(瀬田漕艇クラブ) 11分24秒66
 - 【一般女子ダブルスカル】関西アーバン瀬田RC(黄瀬春奈、青山恭子) 11分43秒43
 - 【一般男子ダブルスカル】瀬田

男子エイト 滋賀大陵水艇友会

滋賀大経済学部OBでつくる水艇友会が、平均50歳以上の男子エイトで優勝を飾った。朝日レガッタでは現役も含めて初の栄冠で、「おじさんエイト」が85年以上続く同大学のポト部の歴史を塗り替えた。

「琵琶湖が呼んでいる。エイトに乗らないか」。会長の北居和夫さん(64)の呼びかけに平均55・1歳の仲間が集った。卒業から四半世紀が過ぎ、再び母校の名前を背負ったレースに、北居さんは「忘れ物を取りに来た、つてやつです」と武者震いした。彦根城の石段をウサギ跳びで往復、パーペルの重りを体に巻き付けて懸垂も、不思議と地元の大会で頂点に

漕艇クラブA(清水俊介、矢地謙太郎) 11分3分58秒34

- 【一般女子かじ付きオドルブル】立命館大(松岡、橋本、坂本、三沢、菅永) 11分3分44秒83
- 【特別平均50歳以上男子エイト】滋賀大陵水艇友会(前田、北居、吉川、鷹野、桑島、長江、小杉、堀江、松下) 11分3分50秒52
- ◆決勝の結果
- 【高校女子シングルスカル】北中玲加(膳所)
 - 【一般女子シングルスカル】岡沙友里(龍谷大A)、高木まどか(龍谷大B)

- 【高校男子シングルスカル】野間聖也(八幡商A)
- 【高校男子ダブルスカル】瀬田田一A、大津
- 【一般女子かじ付きオドルブル】立命館大B、立命館大A
- 【一般男子ダブルスカル】立命館大、龍谷大A
- 【マスターズ50歳以上男子ダブルスカル】滋賀大陵水艇友会B、東レOB艇友会
- 【高校女子ダブルスカル】高島B

- 【高校女子かじ付きオドルブル】立命館大A、大津B
- 【高校男子かじ付きオドルブル】立命館大A、高島
- 【一般女子かじ付きオドルブル】立命館大、滋賀大「華敷」、滋賀大教育「快」
- 【特別平均50歳以上男子エイト】瀬田TOB夕照会、瀬田漕艇クラブ
- 【一般男子エイト】東滋賀、立命館大、龍谷大

「おじさんエイト」歴史刻む



平均50歳以上の男子エイトで優勝した滋賀大陵水艇友会。大津市御殿浜

立ったことはなかった。大津市の鷹野大郎さん(51)は「母校の緑のオールを漕いで優勝したいと、ずっと思っていた」と振り返る。

クルーがそろったのは前日だったが、レースでは息の合ったところを見せた。序盤からトップ争いを展開し、500メートル過ぎて2位と半艇身差をつけた。「あと100メートル!」。舵手の声に、8人の漕手が力を振り絞る。ゴールすると、くたくたになった腕を上げ、ガッツポーズを決めた。

「同じ釜の飯を食って、苦勞を共にした仲間ですから、絶対に勝てる」とレース前から言っていた。北居さんは金メダルを首から下げ、得意げに語った。「まだまだ現役だな。俺たちが部の歴史を変えたんだ。そう言い合いながら、近くの居酒屋で「祝杯」のビールをぐいっと飲み干した。(伊藤舞虹)



ボートは食べることから始まった

前 田 豊 (大17回)

ボートは食べることから始まる、そのきっかけは当時のマネージャーからでした。

その方は進 従道さん。2024年12月に逝去され、本当に残念でなりません。一つ上の先輩でマネージャーとして、いつも穏やかな笑顔で「兎に角 食べる」と話しかけられ、食事の準備には色々、気を遣って下さいました。私が週に4回食事の準備を今もしているのはこのお陰かもしれません。(否、自分の好物の為?)

また、部内は勿論、学内外の種々雑多な交渉等テキパキと進められていたことが印象に残っております。やはり物腰の柔らかさが多くの人達に受け入れられたからでしょう。退職後も時々、陵水艇友会関東支部の例会にも出席され、少し体調不良の時は、奥様と一緒に来られていました。とりわけ、お嬢様もご一緒だったこともあり、プロの歌手であるお嬢様の素晴らしい歌声が我々の懇親会を大いに盛り上げてくださいました。そして、時期は定かではありませんが、進さんと同じ会社だった方(漕手)とボート練習中に知り合い、進さんの仕事ぶりを含め、そのご活躍ぶりをお聞きし大変懐かしく嬉しく思いました。このように思い起こすと、学生時代と退職後を含め、その時々に進さんとは共に喜び、残念がり、懐かしみ、今思うと貴重な時を過ごさせていただきました。

あらためまして、進さんのご冥福をお祈り申し上げます。

私は現在もボートを楽しんでおります。退職後直ぐに横浜市の鶴見川を拠点とする「ボート団塊号」の仲間に入れていただき、約40年ぶりにオールを手にすることができ、現在に至っております。恵まれた環境の中で、時にはエイト、時にはスカルを漕ぎ、多くの人達と出会い、ワイワイガヤガヤとボートを楽しんでおります。

マスターズのレースは中規模、小規模含めて年間数多くあり、全国のおアズマンが切磋琢磨しております。私も「ボートは生涯スポーツ」として細く長く楽しんでいきたいと思っております。

進さんからの言い付け通り、「いっぱい ご飯を食べて」。

水野久仁昭先輩を偲んで

若園清和(大22回)

水野久仁昭先輩との出会いは、1970年4月。入学して何日か経った頃、漕艇部の入部内定者が集められ入部の懇談会が開催された時でした。当時3回生の水野先輩が席を立つ際に足が引っ掛かり、茶菓子等が乗った座敷机がひっくり返りました。その際、主将だった4回生の佐竹先輩や、同じ3回生の岩崎、片岡、福岡、森脇先輩をはじめその場の上級生の反応が水野先輩に対する温かい感情にあふれたものであったことが強く印象に残っています。

その後、自分自身が感じた水野先輩は、まさしく敬愛すべき先輩でした。体も心も健康優良児そのもので、誰にでも心を開いた態度、ボートに対する溢れるばかりの情熱は、隠すべきもなく、合宿中も暇があれば本を読む読書家で、ロマンティストで、「一艇ありて一人無し」「オアズマンは素朴であれ、ロマンティストであれ」は、水野先輩の口癖でした。たまにある小さな失敗は水野先輩の大きな魅力となっていました。

対抗フォアに乗られていた水野先輩とは、一緒に艇で試合に出たことはありませんが、我々のエイトのその日の練習に欠員が出たので、水野先輩が代わりに乗艇され一緒に漕いだことがあります。その際、練習終盤にオールがそろい滑るように艇の進みを感じたことがありました。水野先輩は、その時のことを偲湖への寄稿文「艇友会95周年を迎えての感慨」に、「たった一度だが、晩秋のある日エイトで練習中に長曾根沖で突然艇が浮き上がって艇が軽くなり、未経験のスピードを実感したことがあった。錯覚かもしれぬが、これだけでボートをした甲斐があった。遥かに比良連峰から夕日を浴びつつ漕げたこの一瞬の恍惚感、嬉しさ、喜びが、その後もずうっとボートにかかわった原点だった。」と記されています。

現役時代は、主将として我々を引っ張り、卒業後富士貿易に入社され、国内（神戸）に在勤中は、2度監督（2004～2006年、2012～2015年）を引き受けられ、現役指導にその情熱を注いで来られました。海外赴任中も、試合の際等には駆けつけ、熱心に応援されていました。ある年の関東の瀬田川に、ドバイから駆け付けた水野先輩の姿がありました。その際、確か岩崎先輩の携帯に水野先輩の奥様から帰国したらしい水野先輩の消息を尋ねる電話が入ったそうです。このエピソードは、水野先輩の愛すべき一面を表しています。そんな水野先輩が、退職後郷里の浜松に戻られた後、病氣療養中と聞き、近くに行く機会があったので、その時一緒だった辻岡君、岡本君、鷺尾君を誘いお見舞いに行こうと連絡を取ったところ、思いのほかお元気そうで、水野先輩ご指定の鰻屋で落ち合い昼食をご一緒し、近くの龍潭寺を案内してもらいました。お見舞いに言ったつもりが逆に元気づけられました。

その翌年の3月に心臓の心室細動を発症され、一時は生死をさまよう状況に陥られたそうですが奇跡的に回復され、1ヶ月後にはメールで連絡がありました。

「退院して一週間、おかげさまで食欲もあり歩行器を押しての散歩も始め、少しずつ回復していますのでご

安心ください。やっとメールや電話ができるようになりました。

もはや、嫁はんには全く頭が上がりません。亭主関白などと、彼女への対応が粗雑だったのに今更ながら大反省しています。家族のみならず日頃からの友人皆さんからの励ましにはいくら感謝してもしきれません。心より感謝申し上げます。

死にかけて自分が生き返った、これはもう少し生きよとの神の思し召しと勝手に思っています。余命などと考えると暗くなっていけませんが、病気とは楽天的に付き合うしかないと実感しています。」

どんな時も前向きに生きる水野先輩らしい、こちらが元気づけられるメールでした。

最後にお会いできたのが95周年の記念式典でしたが、体調がすぐれない中出席された事もあり、十分に話が出来ず心残りとなっています。その後、1度電話をいただいたのですが、こちらを元気づける電話でした。

水野先輩ありがとうございました。100周年記念式典でお会いできないのが寂しいです。改めて心から追悼の意を表します。



2017年5月13日。水野先輩と「うな吉」にて

編集部注

ご自身の大学時代のことを振り返った「自分史」の寄稿をお預かりしています。サークルスクエアに全文を公開しております。ぜひ寄稿を通じ、水野さんを偲んでいただければ幸いです。

サークルスクエア ➡ <https://www.c-sqr.net/login>

サークルスクエアでの格納先

フォルダ ➡ 偲湖バックナンバー

※サークルスクエアについては、p89を参照ください。

熱い男、井上圭一郎君を偲んで

緒方俊輔(大29回)

「井上！ついに滋賀大はインカレで優勝したぞ！新艇庫も出来るぞ！」

最近、彼のことを思い出すたびに、そう呼び掛ける。彼に見せてやりたかった。どんなに喜んだらうか。でもきっと天国で多くの先輩方に笑顔と大きな声で報告してくれていることだろう。

井上圭一郎君が亡くなった時、彼が監督時代の教え子の皆さんから、多くのメッセージが寄せられました。「井上さんには部活動の面のみならず、人としての成長を促す指導をいただき」「集まるたびに、井上さんと飲みたい、社会人としての在り方を聞きたいと話していたものです。」「今になったからこそ言葉の意味を噛み砕き理解できるようになりました。」「人生の先輩としてまだまだご指導を仰ぎたいことがたくさんあったのにと痛惜の念で一杯です。」当初、井上君の熱意に戸惑っていたように見えた当時の学生たちも社会に出て、彼が伝えたかったことやその活動がどれほど貴重で大変だったのかが分かり、あらためて感謝しています。

井上君は、現役時代は、我々同期の中で、最も体格にも恵まれ、新人の時から大いに期待され、1回生の秋の全日本新人選手権エイトで、一つ上の先輩方とともに、東大に次ぐ準優勝に輝きました。その時、このクルーから3年後のモスクワ五輪の候補選手に先輩お二人とともに選ばれました。結局候補選手としての道には進まず、大学クルーに残ってくれました。その後は、故障を抱えての現役後半となったことは、本人も我々もとても残念でした。終始、明るくムードメーカーとしてもチームに貢献してくれました。故障がなければもっとやれたという悔しさと滋賀大も本気になればできるという思いから、OBになって艇友会にあればと献身的に活動し、現役に叱咤激励した姿につながっていったのかもしれない。

艇友会85周年では、記念事業実行委員長として、ボート部の歴史を整理した偲湖編纂や式典総合司会を務め、明るい、キレの良い進行でボート部の創部からの歴代の活躍をスライドにまとめて報告してくれました。その後幹事長となり、課題であった会費収入の増加、安定のための年会費増額、外部コーチ招聘のためのグリーンブレード基金など、当時の故北居会長を支え、難題にいくつも挑戦して、やり遂げてくれました。そして、監



2016年11月彦根での合同同期会



95周年記念式典：前監督として

督時代には、廃部の危機から伝統が途絶えたボート部を何とか立て直したいという思いを胸に、親子以上に歳が離れた現役に滋賀大の伝統とやればできるということや「考える」ことの大切さなどを説いて、部員を叱咤激励する一方、石山から彦根へボート部の活動拠点を移すということについて、熱心に艇友会にその必要性を訴えました。今やその時の判断が正しかったことが証明されたと思います。

熱い想い、人への厳しさと優しさ、行動力、そしてユーモア。その姿は実に頼もしかった。本当に有難う。天国でも人を笑わせていることだろう。天国で会った時の土産話がもっと盛り上がるように皆で頑張ります。見守っててください。

現役活動報告



74期活動報告「琵琶湖から世界へ」

銖 藤 蓮 (大74回)

2022年、私はスカムもスイープも知らずに唯一参加した新歓で、「日本一になれる」というシンプルながら真っ直ぐな先輩の言葉に絆され滋賀大学漕艇部に入部しました。

以来この4年間、さまざまな経験をさせていただきました。特に、2024年は一年経った今思い返しても現実だったのかと思うほど濃く、充実した一年でした。

春にはペアを組んだ西村とニュージーランドでの短期留学の機会をいただきました。海外の環境で練習するという事は初めてで緊張もありましたが、現地のローイングにふれ、技術や体力面での成長はもちろん、競技への向き合い方を学び視野が広がったように感じています。

5月には全日本選手権で準優勝、9月大学選手権では優勝という結果を得ることができました。光栄なことに、こうした結果を「創部初」として残すことができましたが、部として「初めて」尽くしの道は障壁も多く一筋縄ではいかないものでした。それでもその障壁を一つ一つ乗り越え、進んでいったのは、日々支えてくださった監督やコーチ、OB・OGの皆様、そして日々の練習を重ね、ともに戦ってきたチームメンバーの存在があってこそのものでした。

そして、今春はOB・OGの皆様のご支援やチームからの応援があり、代表選考にも挑戦することができました。そこに向けて努力を重ねた過程は、自分にとってかけがえのない経験となりました。「日本一」を目指すだけでなく、琵琶湖から「世界」へとつながる道があることを、今後も挑戦する意志を持ち漕ぎ続けることで少しでも後輩たちに示せたら嬉しいのです。

コロナ禍で女子漕手が少ない中必然的に女子主将という役を受け、初めは戸惑うことが多かったのですが、周囲に支えられ、まだまだ足りないながらも私が競技に打ち込む姿勢を示すことで役割を果たせるようになったのではないかと思います。

これまで部活動を通して経験させてもらったことは、私にとって大きな財産です。その学びや気づきを、できる限り後輩たちに伝え、少しでも役立ててもらえたらと願っています。卒業後もOGとして漕艇部にに関わり、恩返しができるような存在でありたいと思います。受け取ったものを次につなげていくことが、私にできる小さな恩返しの一歩だと信じています。

そして2025年、艇庫が新しく建て替えられることになりました。この大きな変化は、多くのOB・OGの方々の温かいご支援とご協力があったからこそ実現したものです。現役部員として心より感謝申し上げます。

改めて、100周年という節目の年に部の一員として漕げたことを大切な記憶として心に残していきたいです。そして、新しい艇庫とともに、漕艇部がさらに多くの人にとって挑戦し、成長することができ、思い出に残る場所であり続けるよう、これからの滋賀大学漕艇部の歴史に新たなページが刻まれることを、ささやかながら願っています。

次の百年へ

滋賀大学漕艇部 アドバイザーコーチ 杉 藤 洋 志

こんにちは。2020年シーズンより、アドバイザーコーチの役割を仰せつかっている杉藤洋志と申します。静岡県で生まれ、愛知県で育ち、漕艇競技者としてのキャリアは高校でスタートさせましたが、目ぼしい成績はほとんど北海道民として挙げました。コーチとしてのキャリアはカナダでスタートし、現在は競技を通じて出会った妻の地元である琵琶湖畔に居ついてコーチ業を営んでおります。要するに、傍から見ると何者かよくわからない人間です。そんな私を、学生たちの指導に当たらせてくださっている滋賀大ボート部の鷹揚さに、いや、ここは自分を卑下しすぎず、「先見性」と申し上げておきます……少々僭越が過ぎますが、とにかく、クラブとそれを支える陵水会のそんな姿勢には最敬礼するところです。

滋賀大からのコーチングのオファーを正式に頂いた際には、「待ってました」と思わず口に出してしまいそうになりました。学生時代、北海道というまさに辺境にありながら、当時ナショナルチームを指導されていた古川宗寿さんに「面白いやつだ、オマエも代表クルーにチャレンジしろ」と声をかけていただいたときから、自分の競技人生が激変するという体験をしてまいりました。それまで、ほんとうに自分はこの競技が好きなのかどうかすらわからずに（高校生の時は、いつやめるかを毎日考えていました）取り組んできた中で、スポーツを通じて世界とつながることを教えてくださった、まさに自分の住む世界を広げていただいたのが古川さんでした。古川さんの許で過ごした選手生活を引退後、ナショナルコーチとして臨んだ2006年のアジア大会（カタール・ドーハ）では、たまたま現地に駐在されていた元監督である水野久仁昭さんにたいへんお世話になりました。「お世話になった」、だけでは語れない、ほんとうに単なるサポートにとどまらない、まさにチームの一員以上の存在でした。私は、世間一般には「アカデミックな学校」と捉えられている教育機関で、しかしながらそこに背を向けるように競技に邁進した、まさに脳味噌筋肉男でした。そこに、単なるエコノミックアニマルではない、アスリート脳を持ったビジネスマンとして颯爽と登場した水野さんの存在は自分にとって大きな衝撃でした。フットワークの軽さ、自分の貧乏根性を高らかに笑い飛ばすかのような、経済を通して世界を見つめるその世界観、まさに圧倒されました。滋賀大はこんな人が輩出するチームなのだ、と私はしんそこ惚れてしまっておりました。

ナショナルコーチキャリアの後、2回目のカナダ暮らしを経て帰国してのち数年を経過した時にいただいた滋賀大からのオファーでした。それ以来、自分にとって人生の道しるべにもなってくくださったお二人の滋賀大ボート部に寄せる想いに報いるためにも、「いいチーム」にするための手伝いがしたい、と考えて、以来彦根の湖上で声を張り上げております。叶わぬことではありながら、お二人がいまのチームの姿を見たらどう仰るのか、少なくともお二人の注がれた情熱に対して、恥じることのない指導者でありたいと考えております。

「いいチーム」と書きました。「強いチーム」にしたい、プロコーチを標榜する以上は、当然そうしたいと願っています。しかしながら、「強さ」は「良さ」、より正確に書けば滋賀大ならではの「美意識」の延長上にある、という考えは今後も自分の指導の軸であり続けるようにしたい、究極的には「日本一のいいチーム」にしたい、と考えております。大それた目標のようにも思えるのですが、「日本一」は譲れないところです。「きっと自分はいま日本一の努力をしている」「日本一の工夫をしてやろう」「日本一、クルーに魂を込めたサポートをしよう」というのは、簡単ではないものの、非常にシンプルな課題です。「今オレは、日本で1番ではないが、3番くらいではがんばってる、5番以下ではない」という評価は大変難しく、複雑なものになります。根拠なんて要らない、でも、日本一、ひいては世界一を目指す心意気は捨ててはいけない、と考えております。

私がコーチ人生において大きな影響を受けたお二人だけではなく、たくさんの志尊き先人たちが築き、受け継いできたこのチームを、「日本一のいいチームにしたい」という思いを持って指導に当たったコーチが居た、ということが、次の100年に向かう滋賀大ボート部のDNAのなかに少しは刻まれて行ってくれたら、どんなにコーチ冥利に尽きることでしょうか。こんな「強い」クルーがそのとき漕いでいたという記録が、200周年記念誌に掲載されるように、もうしばらく、濃緑のブレードを駆る選手諸君とお付き合いさせていただければ、と考えております。どうぞよろしく願いいたします。

陵水艇友会活動報告



陵水艇友会活動報告

■関西支部

支部長 岡本 勝彦 (大28回)

【近年の活動状況と今後】

コロナ禍の世の中が停滞した時期を経て、昨年から関西地区 OB 会の再構築を図るべく親睦会の定例化やボート大会への参加呼びかけなどを行ってきていますが、会員特に若手の参加促進による世代間交流の活性化を促すことで陵水艇友会のこれからの100年に繋げていきたいと思えます。

【陵水艇友会の活性化】

昨年来四半期ごとを目途に支部懇親会開催を通じて会員各位の親睦の機会を作っています。

開催に当たっては場所を大阪に限定することなく滋賀地区や阪神地区での開催といった分散開催を試行的に実施しましたが参加人数については10人前後とまだまだ課題を抱えています。ただ、毎回違った OB の参加もできていますので、継続的に開催すると共に今後は現役との交流や各地区ボート大会への参加、懇親会以外のイベント企画など広範な支部の活動を行い、ボートの話題はもちろん同期会のきっかけづくりや異業種交流の場としてアピールしていきたいと考えています。



2025年4月開催関西支部総会

【ボートとのふれあい】

過去には朝日レガッタや大阪桜ノ宮のお花見レガッタ、神崎川レガッタなどへ関西支部単独クルーでの参加もありましたが、最近では会員各位が各地域でのボートクラブに参加する形や他支部と合同する形で全日本マスターズレガッタや西日本レガッタ、神崎川レガッタ、大阪シティレガッタ、Head of Seta や各地域の大会などへ参加しています。

今後とも地方大会も含めボート大会の開催についてのアピールをしていながら関西支部単独だけでなく他の地域の OB との連合クルーも視野にボートに触れる機会の創出に努めていきたいと考えています。

個人的な将来の夢としては、毎年陵水艇友会の会員からも毎年2～3名程度参加している世界マスターズ（2025年はバルセロナ）に滋賀大として単独クルーで挑めたら、という妄想を描いています。



2025年6月全日本マスターズ
(魚崎 RC：陵水艇友会会員2名参加)

【他大学との交流】

関西ボートマン倶楽部は、関西一円の大学ボート部のOBの集いとして毎年開催されているもので、陵水艇友会からも会長他数名参加し親睦を深めています。

懇親会では各クラブの現状報告などが行われるとともにOB会組織の課題や活動への取り組みが話題となり、陵水艇友会活動にも参考になることが多い集いとなっています。



2025年4月開催関西ボートマン倶楽部総会

■中部支部

支部長 加藤 英隆 (大26回)

幹事長 長谷川裕一 (大33回)

前半は最近の支部活動報告を、後半は中部支部の先輩諸兄の思い出等を記したいと思います。

支部活動の主なものは①支部総会②マスターズレガッタ参加③有志による忘年会です。

支部総会は毎年春先に開催しています。中部地区には100名程の会員がいますが、今年の支部総会には辻岡会長にも参加を頂き14名の参加がありました。100周年記念式典と新艇庫建設の話題で盛り上がりました。お昼に始まり、2次会3次会と続く事が多いです。

ナックルフォアでマスターズの500メートルレースに参加しています。秋に開催される東郷町民レガッタ、名古屋市民レガッタと愛知県ボート協会主催のマスターズレガッタの3大会に、2012年頃以降ほぼ毎年出場しています。時に若手OG、早稲田OGや引退した現役部員の参加もありました。浜松や大垣など遠方から来てくれるOBもいました。大会の前には愛知池や名古屋中川運河で何回か練習を重ねます。練習後に行く喫茶店では現役時代の回顧談に花が咲きます。年末にはマスターズレガッタの反省会も兼ね名古屋駅前辺りで忘年会を開催しています。

中部支部が何時からスタートしたか詳しくは知りませんが、初代支部長は大学2期の木村善雄さんです。津高の出身で卒業後は東海銀行に勤務されました。2000年から4年ほど現役の監督もしていただきました。中日本レガッタには息子さんを連れよく観戦に来ていただきました。2023年に亡くなりましたが、戒名に「艇」の一字が使われたとご家族から聞いたことがあります。片腕の幹事長として長く活動して下さったのが9期の杉田嘉皚さんです。同じ高校で同じ銀行という



2022年 マスターズレガッタ

経歴で、お二人は長いお付き合いをされました。2代目は6期の北井美雄さんです。岐阜長良高の出身で地元名古屋が本社の名鉄百貨店に勤務され、物静かで優しい方でした。3代目は19期の松林茂晴さんです。虎姫高出身で東海銀行に勤務されました。松林さんの声掛があって、中部支部メンバーのマスターズレガッタ



2023年 名古屋レガッタ



2025年 支部総会

参加がスタートしました。今も長くマスターズ大会に参加出来ているのは松林さんの功績だと思います。日々トレーニングに励まれマスターズに精力的に参加されていました。2018年に亡くなる直前まで陵水会名古屋支部長も歴任され多方面で活躍されていました。

■関東支部

幹事長 藤坂 祐宏 (大30回)

陵水艇友会関東支部の活動状況等について、報告させていただきます。

(1) 月例会

関東支部の1つの特徴として挙げられますのは、月例会の開催です。

以前は、関東支部のOBの皆さんが集まる機会としては、年1回の支部総会と現役メンバーの試合応援程度に限られていました。

まずは、OBの皆さんが気楽に集い、いま一度陵水艇友会の基盤を強化し、現役の皆さんの支援の一助になればと、10数年前に月例会をスタートさせました。

現在、原則毎月第二水曜日の夜、ワイワイガヤガヤと楽しい時間を過ごしています。

今年6月の月例会においては、73期メンバーのなかで関東地区に配属が決まった2名を招き、歓迎会も兼ねる形で開催しました。

これからも、関東支部の月例会を続け、OB同士の繋がりを強め、現役の皆さんの応援、支援を行ってきたいと考えています。



【写真1】2025年6月11日、月例会兼歓迎会

(2) 会員親睦

2025年6月末現在の関東支部の会員数は、131名に上っています。

関東支部の会員親睦の場としては、月例会と支部総会が中心となっています。

ただ、各種支部活動への参加者は、一部のコア会員の方が中心となっている傾向があります。

特に、コロナウイルスが蔓延し、直接会う形での種々の会合の開催を休止せざるを得なくなった2020年以降は、全体の参加者数も限定的となってきています。

また、仕事面や家庭の事情等もあろうかと思いますが、大学40期以降の皆さんの参加が減少してきていることも1つの懸念事項となっています。

今後とも、様々な形での活動を続けていくことで、参加し易い場を提供し、コアな参加者の輪を広げていくことが、強い組織を形成していくことに繋がるものと考えています。



【写真2】2025年1月25日、関東支部総会

(3) 今、想うこと

今年5月より、関東支部幹事長を務めております。

一昨年、約41年間の社会人生活にピリオドを打ち、少し時間的な余裕が出来たこともあり、学生時代を含めこれまでの歩みを自分なりに振り返り始めています。

世間知らずの18歳の一学生が、彦根の街で滋賀大学漕艇部と出会ってから、もう少しで半世紀が経とうとしています。

月日が経つのは早いですが、漕艇部での合宿や練習等を通じて得ることが出来た様々な経験や教訓について、今でも鮮明に覚えています。

今振り返りますと、その出会いが私にとって大きなターニングポイントとなり、私自身のその後の精神的な下支え（礎）となっていたとの想いが一層強くなってきています。

大学時代の4年間は、大半の時間を「ボート」に費やしていた訳ですが、それにより何事にも代え難い“何か”が知らず知らずのうちに私自身のなかに宿っていったのではないかと考えています。

大学を卒業し、社会人としてスタートを切った後において、様々な苦難や壁にぶち当たりましたが、それらのプレッシャーを寧ろ活力に転嫁し、何とか乗り越えてこられましたのも、前述の“何か”があっただけではなかったかと、今改めて実感しています。

そうしたことから、今後はこれまでの「恩返し」の意も込めて、種々の活動に取り組んでいきたいと思っています。

会員からの寄稿





漕艇部 100年の存続と発展

北 村 勝 則 (大12回)

今日、ボート部創部100周年を迎えられ、本当に嬉しく思っています。

ボートという地味で厳しいスポーツを、小さな地方大学である滋賀大学が、競技会に出場を続け、それなりの戦績を残してこられたという事は、会員皆さんの現役時代の奮闘と努力の積み重ねであり、そして、先輩諸氏の熱烈な支援、応援によるところでしょう。

また、時には、外部の専門コーチによる指導を受けていることが、レベルアップになっていることでしょう。このことが、100年も活動が続けられ、クラブが存続しました。

ローイングスポーツは、小さな地方大学でも、そして大学入学から始めても、目標を持った計画的な練習と「勝つ」という強い意識があれば、大学のトップクルーの仲間入りが出来るという強い信念を、私は持っています。

ここ最近、現役選手はコーチ陣等の指導を受け、強い勝利への意欲を持って、大学トップクルーの仲間入りを果たしつつあり、更に次のステップを狙って、頑張ってくれています。

大学スポーツでは、年々人が入れ替わっていく状況の中で、大学トップクルーを維持していくためには、クラブ内で部員が切磋琢磨して成長できる伝統を、しっかりと築いていただきたいと思っています。

そして、このタイミングに陵水艇友会の執行部の皆さんのご提案と絶大な努力に、会員の皆様や学校関係者の方々からのご協力で、素晴らしい新艇庫が完成する運びとなりました。

現役の皆さん、恵まれた新しい環境で、更なる活躍と、ボート生活を楽しんでください。

大学3年半の厳しく、規律あるボート部生活で、時には漕ぐ喜びを感じながら試合の戦歴を経験し、そしてクラブ運営の分担を担い、最後までクラブ生活を充実して過ごすこと。そうすることで、卒業後は自分なりに誇りと自信を持って、社会人として活躍され、人生を楽しんでもらいたいと願っています。

ボート部の思い出

射 場 茂 喜 (大21回)

大学を卒業して50年以上になりますが、ボートは社会人になっても会社のボート部に属し、隅田川、戸田のボートコース、大阪の浜寺のボートコースや堂島川で30歳くらいまで漕ぎ続けるなど、私の人生の一部とも言えるスポーツになっています。

とりわけ、大学時代に在籍した滋賀大ボート部の4年間で培った体力、精神力、人脈は、その後の私の人生にとり、とても大きなバックボーンとなりました。

以下、今ではコンプライアンス意識や社会常識が変わったのでなかなかあり得ない、しかし当時としては当たり前だった話も含めて、私の思い出を書き連ねてみました。

(1) 1969年(昭和44年)の入学当時

4月の入学に向けて彦根に行くと、色々なクラブから入部の勧誘を受けました。

ボート部のお誘いを受けてナックルフォアでの試乗会に参加すると、エイトが夕日を浴びて湖面を滑っていく姿が目に入り、とてもロマンチックな気分になり、ボートに興味を持ちました。

また、北居先輩(大学18回)にレストラン・ワゴンでハンバーグをご馳走になり、田舎から出てきた私にはとてもおいしく感じられ、『ボート部の方は良い人が多いなあ』という好印象が残りました。

その後、入学についての説明会が終わると階段の所に各部の先輩方が大勢陣取っていて、半ば強制的にどこのクラブに入るかを言われ、一瞬迷ってからボート部と答えると、他のクラブからの勧誘を受けないように、ボート部の先輩に腕でガードをされながら他の場所に連れて行かれました。

1969年当時は、まだ全国的に大学紛争が激しく、滋賀大学も封鎖されて授業が出来ないため、江国寺など彦根市内のお寺で授業を受けました。まさに江戸時代の寺子屋授業の再現でした。

一方、クラブの練習は大学紛争とは関係なく通常通りに、港湾と琵琶湖で日曜日以外毎日のお行われ、夏の関選前には江国寺で合宿してから、試合直前に大津の合宿所に移動しました。ボート部は、男性ばかりの集団で、彦根の大学構内も殆ど女子学生がいなかったのも、県短の女子バトミントン部との合同ハイキングで賤ヶ岳・余呉湖へ行ったのも楽しい思い出です。



瀬田での合宿(1969年夏)

(2) 2～4回生当時

入部当時は筋肉がなくて64kgだった体重が、筋トレで筋肉も付いて68kgまで増え、体力も付き、段々とやる気も出てきました。艇やオールの力学などボート理論も関連資料を読んで勉強しました。朝日レガッタ、関選以外の対外レースにも出ようという事で6月には愛知池での中日本レガッタにエイトで出漕しました。

荒神山までの長距離走や竹島までの遠漕は、なかなか辛いものがあったものの、今では『よくやったなあ』という感慨を覚えます。また、彦根城の石段をダッシュで10回登る練習もなかなかハードなものでした。

そういった中で1971年に関選の瀬田川杯エイトで準優勝した時は感動しました。また、朝日レガッタや全日本レガッタの常勝チームだった東レ滋賀の武良監督や古川さんをお願いして、合同練習をしました。東レ滋賀と同じ練習メニューと一緒にこなしましたが、厳しい練習を簡単にこなす大柄の東レ滋賀の選手達に接して、『さすが、強いはずだ』と感銘を受けました。

一方、ボート部の資金集めのために、様々なクラブバイトもしました。例えば、米原駅での真夜中の郵便バックの積み込み作業、岐阜羽島の繊維工場でのミシン掛けの補助作業、彦根の城山祭での時代衣装を纏った行列参加など。

また、秋の紅葉を愛でるために、ボート部の仲間と湖東三山（百済寺、西明寺、金剛輪寺）を自転車で回ったり、関選が終わった後、カッターを漕いで大津から竹生島、長浜、彦根、長命寺、沖ノ島と時計回りに琵琶湖周航歌を歌いながら琵琶湖を一周したのも楽しい思い出です。余談ですが、会社に入ってからでも会社のボート部仲間と琵琶湖一周をしました。



1971年瀬田杯エイト 準優勝クルー

(3) 4回生から卒業まで

3回生で腰を痛め、漕ぎ屋を降りてから卒業するまでは、体育会の委員長としてボート部のみならず、体育会クラブ全体の活動資金確保や競技レベルの底上げに邁進しました。当時の経済学部長の小倉栄一郎先生や体育教官の山内隆先生のご自宅へ連日のように夜お邪魔して、運動部の活動資金確保や大藪へのグラウンド移転構想について打ち合わせをしました。

小倉経済学部長とは、ボート部や体育会の事だけでなく、陵水会の予算や大学の予算など、かなり詳細な滋賀大全体の資金状況も教えていただき、大学全体の経営について理解することが出来ました。余談ながら、私の結婚式に小倉先生を主賓でお招きし、お祝いのスピーチで、20～30分ほど近江商人の話をしていただいたのも懐かしい思い出です。

以上、大学時代の思い出を書き連ねましたが、滋賀大の先生、職員、ボート部の先輩、同輩、後輩の皆さん、名前を挙げ出したらキリがないほど、多数の方にお世話になりました。大学時代のみならず卒業してからも大変、お世話になり感謝に絶えません。この場を借りて御礼申し上げたいと思います。

彦根でのボート部生活を振り返って

西 口 尚 吾 (大26回)

昭和49年3月下旬、入学手続きのため門をくぐると、ボート部の先輩である堀江さんに勧誘された。痩せて体力の乏しい私にできるかと思ったが、旧港湾でボートに乗せてもらって、青春を託そうと思った。

練習は長く、つらく、厳しかったが、徐々に体力がつき、身体ができていった。水遊びの漕ぎからだんだんと競技者の漕ぎになっていった。

入部してすぐの朝日レガッタで先輩たちのエイトが準優勝したのを見て、自分たちもやれるのではと思っていたが現実には厳しかった。部員も少なかった。

ボート競技は1000メートルなり2000メートルなりを漕ぎ切らないとゴールに到達しない。そこにはクルーメンのどの1ストロークが欠けていても届かない。

漕艇部100周年についても、どの代の、どの部員が欠けていても達成できなかった。

私たちの代は、コックス1名、途中からマネージャーになった1名、漕ぎ屋4名だった。

全日本、関西学生秋期リーグ戦で私たちの代だけで4+を組み、漕法を研究した。

初めて12月にウエイト・陸トレ中心の合宿をした。最後の1年の合宿生活は200日を超えた。

4回生になった時にたくさんの1回生部員が入ってくれて活気づいた。最後の夏は関西選手権で対校8+が3位入賞、同瀬田川杯でJr 8+が3位入賞などで終えることができた。

腰痛者が発生し、私自身燃え尽きた感じもあって、インカレには行かなかった。

悔やまれるのは、いったん休憩して、クルーメンを組み代えてエイトでインカレを目指すべきであったことだ。

私たちが引退したあとの11月の全日本新人戦8+の部で後輩たちが準優勝したのを見て、自分たちのやってきたことが間違っていなかったと思え嬉しかった。

8年後、私は後輩たちが当時絶対的王者だった東レ滋賀を押さえ関西選手権8+で優勝するのを眼前で見た。当時のクルーメンやスタッフの努力の賜物だが、連綿と続いたボート部の歴史があつての姿だったと思う。

私は琵琶湖の風景が好きだった。特に6月の早朝の朝靄を突いて進む琵琶湖は白銀の中で神秘的だった。

彦根では時間がゆっくりと流れていた。

琵琶湖に浮かぶボートから水満々とした湖面を眺め、ゆったりと動く雲と俱に時間は悠々と刻んでいた。

陵水艇友会の「陵水」の意味について、大先輩の前田偉量さん(故人)に聞いたことがあった。「湖面から眺めた陸(彦根城)と水だ」と言われた。「絵画の世界や」とのお言葉に「水墨画の世界ですね」と返したら、「言い直しよったなあ」と笑い飛ばされた。

その当時の前田さんの歳になってしまった。懐かしい思い出である。

生涯の友ローイング

西川元啓 (大28回)

関東地域で大学卒業後エイトなどを今でも漕いでいるメンバーは20名ならず。主にボート団塊号と言う32大学の卒業生約100人が所属する日本有数のマスターズローイングクラブには、40歳代から84歳まで幅広い年齢層12名の滋賀大OBが在籍していて一大勢力となっている。1970年～1980年代、滋賀大学経済学部の卒業生は毎年200人から300人、そんな小さな大学が関東、関西の総合大学に肩を並べる存在感を関東地域で発揮していることは、他大学のOBからも驚かれるし、先輩方から脈々と受け継がれる伝統を誇らしく思う。

団塊号では毎年エイトを各年代のカテゴリーに分けて7-8クルー編成している。この内全日本マスターズで優勝を目指す上位3クルーは1月に開催される横浜インドアローイング大会のエルゴ記録をベースに選抜される。陵水艇友会のメンバーも必ず数名これらのクルーに選ばれ勝利に貢献している。

年間を通して開催される各大会に向けクルーはコーチ（筏英信コーチ、残念ながら2025年6月ご逝去されたが、早稲田大学を卒業され、10数年にわたり団塊号の漕技、練習方法についての的確なアドバイスをいただいた。）の指導の下、クルーリーダーが練習メニューを作成し、勝利を目指して厳しい練習に取り組む。

ワークハイト、ストレッチャーの位置、高さ、ローロックの角度、オールの外径、内径などリギングに関する知識、キャッチからドライブ、フィニッシュまでストロングポイントを如何に合わせるかなど漕技に関して練習前後のミーティングは、昔の大学時代のミーティングよりはるかに高尚な技術論が飛び交い、今更ながら当時の自分たちの勉強不足を恥じ入るばかりである。昔と変わらないのは、苦しい時最後は気合いだという精神論で終わることであり、皆が学生時代を思い出し懐かしみながらローイングを楽しんでいる。

関東のそれぞれのクラブでローイングを勤んでいる滋賀大漕艇部OBであるが、鶴見川で開催される各種マスターズ大会には陵水艇友会として参加している。今年も横浜市民レガッタやボートマラソンに是非出場し勝利を目指したい。

私事で恐縮ながら大学を卒業した時、ローイングと言う素晴らしいスポーツに出会い、4年間非常に充実した大学生活を送れたことを心から感謝したが、「こんなにしんどいスポーツは二度としない（できない）だろうな」と思った。

ところが、69歳となった今、妻に猛反対されたが、娘が助け舟として作成してくれたパワーポイントのプレゼンテーション資料を駆使し、妻を説得して購入したローイングエルゴを独立した息子の部屋に設置し、週2-3回厳しいトレーニングに励んでいる。そして、還暦を過ぎた多くの仲間と一緒に各地で開催されるマスターズ大会での勝利を目指して、厳しい練習に真摯に取り組んでいる。

レースに勝つだけでなく、80歳代でエイトを元気に漕いでおられる先輩方を見て、ローイングはマイペースで楽しくやれる生涯スポーツの鑑であることも実感し、後輩の人たちにも全国どこかのローイングクラブで漕ぎ続けて、この楽しさを共有しお酒と一緒に飲めることを期待している。

漕艇部100周年に寄せて

牧野博和(大28回)

大学を卒業して、はや45年になる。

今100周年の式典に向けて、彦根新艇庫の完成に向けて、多くの先輩後輩が力を注いでくれている。

先日、滋賀大学某体育会クラブのOB会長とゴルフをして、いろいろと話した。

OB会組織の会費納入率、寄付金、周年事業への参加人数など、ボート部とは比べるべくもない状況とのことだった。

何が違うのだろうか？

間違いなく僕らの大学4年間の生活は、ボート中心だった。

懸垂10回3ラウンドを懸命にこなした思い出。

エルゴタイムをあと10秒、もう10秒縮めるために歯を食いしばって頑張った思い出。

そして、朝日レガッタ、関西選手権でメダルに届いた喜び、逃した悔しい思い。

こんなことがみんなの卒業後の人生に、大きく影響を与えたのかと思う。

長い部史の中で、大きな大会で優勝を勝ち取ったメンバーはわずかだ。

称えられるべきではあるが、そこにだけ価値があるわけではない。

予選落ちしたメンバーにも、必死で努力を積み重ねたことに対する価値は貴い。

私は漕ぎ屋としては2流だった。

それでも瀬田杯エイト3位のメンバーだったことは小さな誇りだ。

主務として臨んだ関西選手権3位も、一定の達成感はある。

1回生の秋に出た、全日本新人選手権フォア敗者復活戦は、自分の中で最もローアウトできたレースだ。0.2秒差で準決勝進出を逃した。もうひとかき、もうふたかき、何とかできなかつたらどうか？今も思い出ず悔しい思い出だ。

みんなそんな青春の忘れ物を取り返すべく、社会に出ても頑張っているのではないかと思う。

私は後輩たちの戦いで、たくさんの悔しい敗戦を見てきた。

先日の関西選手権でもそうだった。

過去には、負けるべくして負けた試合も多々あった。

「決勝進出できたらいいな」という、あいまいな願望には「やっぱり負けたか」という悔しくもない結果がついてくる。

こんな時代にボートを漕いだ後輩たちも、社会人になってから、忘れ物を取り返しに来てほしい。

100周年の式典、新艇庫披露会、同期会などで仲間に出会えるのを心待ちにしている。

創部101年目、頂点への軌跡

西村 菜々花 (大73回)

滋賀大学漕艇部大73期女子主将を務めました、西村菜々花と申します。

この度、滋賀大学漕艇部が創部100周年という大きな節目を迎えられたこと、心よりお祝い申し上げます。長きにわたり築かれてきた伝統と、多くの先輩方のご尽力に深く敬意を表します。

大学からローイングを始めた私にとって、滋賀大学漕艇部は競技者としての原点であり、成長の場そのものでした。私が入学・入部した2021年は、新型コロナウイルスの影響により大学生活も部活動も大きな制限を受けていました。新歓の会食は禁止、授業は完全オンライン、そして部活動も停止されるなど、思い描いていた大学生活とはかけ離れたものでした。そんな厳しい状況の中、当時4回生だった長谷川・藤田ペアがインカレで女子ペア3位となり、銅メダルを獲得された姿を見て、「私もこの舞台に立ちたい」と強く思ったことを今でも鮮明に覚えています。あの瞬間こそが、私の競技人生の原点でした。

大73期では女子漕手が各学年に1人ずつという少人数体制の中、2024年大会シーズン直前の3月、私は一学年下の後輩・銕藤とペアを組み、卒業生の皆さまのご支援のもと「Game on English - Rowing -」(ニュージーランド政府による英語×スポーツの留学プログラム)に参加する機会をいただきました。私たちはニュージーランドでの1か月間の留学で世界トップレベルに触れ、自身の未熟さを痛感するとともに競技に対する視野を大きく広げることができました。この経験が、第102回全日本選手権女子ペア準優勝、そして第51回インカレ女子ペア優勝という成果へとつながったと確信しています。

全日本選手権やインカレに向けての練習期間は、とにかく「最後までやりきる」ことを心に決めて日々練習に励みました。思うように艇を進められず不安な日々を過ごした期間もありましたが、それでも練習だけは淡々と続け、これまでより3~4枚高いコンスタントレートで「強く長く+リズム良く」漕ぎつづけるという自分たちの漕ぎのスタイルを少しずつ確立することができました。どれだけ苦しくても絶対に緩めず、諦めないメンタルと体力を維持できるようになったこと、そして慢心することなく常にチャレンジャー意識をもって一つ一つの練習やレースに向き合ったことが、私たちにとって全日本の舞台で戦うための強い武器となったと感じています。

そうした日々の積み重ねが実を結び、私たちは創部101年目にして全日本選手権準優勝、そして創部史上初のインカレ優勝を果たすことができました。滋賀大学としても1956年に剣道部がインカレを制して以来、実に68年ぶりとなる歴史的快挙です。こうして新たな歴史を塗り替え、日々応援してくださる皆さまへ結果と



第102回全日本選手権
女子ペア (西村・銕藤) 準優勝

いう形で恩返しができたことは、私たちにとって何よりの誇りです。しかし誇るべきは結果だけではありません。そこに至るまでの過程、そして支えてくださった多くの方々への感謝の気持ちが、今も私の心に深く刻まれています。

滋賀大学漕艇部で過ごした4年間は、私にとってかけがえのない財産です。

最後になりますが、これまで滋賀大学漕艇部を支えてこられたすべての皆さまに心より感謝申し上げます。そしてこれからは、私自身もその支え手の一員として現役部員の活躍をあたたく見守り、応援してまいります。

この100周年という節目が現役部員の皆さんにとっても新たな一歩となり、これからの歴史をさらに輝かしいものにしていくことを心から願っております。



第51回全日本大学選手権（インカレ）女子ペア（西村・銖藤）優勝
（左・右上：表彰式、右下：学内での横断幕）



大73期滋賀大漕艇部（当時4回生11名、3回生6名、2回生12名、1回生14名）

卷 末



滋賀大学漕艇部年表

漕艇部 創部：1923年（大正12年）

創部経緯

開校と同時に弁論部、文芸部、音楽部、剣道部、柔道部、弓道部、野球部、庭球部、陸上競技部、短艇部、山岳部、庶務部の十二部、つづいて蹴球部が加わり、それぞれの部長は教官が任命された。校舎や施設さえ文部省からの移管が済んでいない状態であったから、運動設備は皆無であった。短艇部は丸紅から寄附を受けたものを、濠を辿って裏門横、後に埋め立てて陵水会館を建てたあたりに繋留し、急場の間に合わせて練習を開始したが、新設学校が先進学校を追うすさまじい意気込が若人の血を湧き立たせ、瞬く間に水準を更新したのである。 陵水六十年史より抜粋

| 年 | 顧問 | 監督 | 幹部 (記載前年9月～8月) ◎：主将 ○：主務 | 主な戦績や出来事等 | 備考 |
|-----------------------|-------|----|--|--|---|
| 1922 大正11年 | | | | | 初代学校長に中村建一朗就任 |
| 1923 大正12年 | 清水 義雄 | | | 開校と同時に剣道部、柔道部他の11部とともに学友会短艇部創立 短艇部草創期部長 清水義雄先生 創立以来の艇、堅田・矢走・粟津 | 開校第1回の入学式挙行 |
| 1924 大正13年 | 清水 義雄 | | ◎小沢 捨三郎 石井 武一 今井 米蔵 加藤 光造 駒田 茂 | | |
| 1925 大正14年 | 清水 義雄 | | 高橋 好孝 西村 貞蔵 古川 文夫 丸井 義之助 船場 千代重 | | 本科第1回 (大正15年3月)卒業生 |
| 1926 大正15年 昭和元年 | 清水 義雄 | | ◎渡辺 吉蔵 宇治田 勝巳 亀井 忠平 草野 小平治 中村 豊次郎 松村 勇治郎 柚木 芳雄 山梶 誠一郎 | | 本科第2回 (昭和2年3月)卒業生 |
| 1927 昭和2年 | 清水 義雄 | | ◎宮沢 柏夫 ○大林 宗治 荒木 衛 寛 勝家 島田 健吉 頓田 耕 藤林 泰造 山田 種彦 | 5.14 関西高専漕艇大会優勝(S 寛、5 山田、4 藤村、3 島田、2 宮沢、B 邨田、C 川口) 縮戦で前年度優勝校の高知高校を破り、準決勝で関西大学、決勝で神戸高商を破る 淀川上流桜之宮2000M フィックス艇 学内ボートレースは町の行事でもあり、その時の優勝クルーが大半ボート部選手になった | 矢野貫城教授、第2代学校長就任 本科第3回、別科第1回 (昭和3年3月)卒業生 |
| 1928 昭和3年 | 清水 義雄 | | ◎田口 敏三 梅本 英太郎 柏木 瀬二郎 木村 清一 富久 和太郎 富田 武一郎 三田(岡本)良三 宮崎 秀夫 | 5.4 学友会より初代彦根艇庫(現在の滋賀大学職員寮)の寄付 大阪高商主催ボートレース(大阪堂島川)優勝(関西大を破る) | 本科第4回、別科第2回 (昭和4年3月)卒業生 |
| 1929 昭和4年 | 清水 義雄 | | ◎高安 規玖次 妹背 保蔵 大谷 末雄 萩田 義治 加藤 英朗 川勝 義雄 肥後 昌平 柳田 淳一 | | 本科第5回、別科第3回 (昭和5年3月)卒業生 |

| 年 | 顧問 | 監督 | 幹部 (記載前年9月~8月) ◎:主将 ○:主務 | 主な戦績や出来事等 | 備考 |
|---------------|-------|------------------------|--|---|--|
| 1930 昭和5年 | 清水 義雄 | | 大矢 正巳 田中 松造 林 重雄 山口 清一 若杉 高 | | プール完成 本科第6回、別科第4回 (昭和6年3月)卒業生 |
| 1931 昭和6年 | 清水 義雄 | | 成宮 文二 森田 勝造 矢田 簾 由良 為禎 吉田 俊 | | 本科第7回、別科第5回 (昭和7年3月)卒業生 |
| 1932 昭和7年 | 清水 義雄 | | 織井 斉 徳永 正次 古林 丑三 山田 敬三 | 半日授業放棄事件(ボート部合宿練習のため、無届欠席処分に抗議) | 本科第8回、別科第6回 (昭和8年3月)卒業生 |
| 1933 昭和8年 | 清水 義雄 | | 今高 栄一 木下 寿 日下部 三郎 志垣 利治 中根 正夫 平山 元康 | | 開校10周年記念式挙行 本科第9回、別科第7回 (昭和9年3月)卒業生 |
| 1934 昭和9年 | 清水 義雄 | | 岡島 保三 吉房 一雄 芳沢 勝一 脇野 喜次 和田 利治 | | 同窓会誌「陵水」第1号 発刊 本科第10回、別科第8回 (昭和10年3月)卒業生 |
| 1935 昭和10年 | 清水 義雄 | コーチ 徳永 正次 (高商8回) | 池田 潔 石村 純夫 伊東 潔 金光 文夫 榊原 永興 西村 正典 | 5.26 フィックス新艇進水式「多景島」「白石」 6.23 三高商対抗リーグ戦優勝(於 瀬田川) 対 大商大戦 2艇身差で勝利 time 6'24 対 同志社戦 1シート差で勝利 time 6'19 10.9 全関西選手権シェルフォア 優勝 (於 瀬田川) 1回戦 対 神戸商大戦 6艇身差で勝利 time 6'8"08 2回戦 対 京都帝大戦 3艇身半差で勝利 time 6'22 11. ベルリン五輪派遣選抜レース出漕 (関西代表) | 本科第11回、別科第9回 (昭和11年3月)卒業生 |
| 1936 昭和11年 | 清水 義雄 | | 大浦 治一 小川 正三 坂部 収 浜田 昌三 山田 隆造 | | 本科第12回、別科第10回 (昭和12年3月)卒業生 |
| 1937 昭和12年 | 清水 義雄 | | 片岡 婦一 栗津 信夫 北城 信夫 斎藤 恒次郎 永田 鴻爾 三矢 朗 | 6.27 三高商対抗リーグ戦優勝(於 瀬田川) 対 同志社大戦 1回戦 1艇身差で勝利 2回戦 2艇身差で勝利 9.4 インカレ(於 瀬田川) 1回戦 対 名古屋医大戦 5秒差で勝利 3回戦 対 大阪商大戦 敗退 | 彦根市に市政が施行される アメリカン ヘレンケ ラー女史本校講堂にて 講演会 本科第13回、別科第11回 (昭和13年3月)卒業生 |
| 1938 昭和13年 | 清水 義雄 | | 石井 睦 稲富 忠 岸本 忠久 北野 斉 黒木 高則 矢追 淳市 | | 陵水会館落成式挙行 本科第14回、別科第12回 (昭和14年3月)卒業生 |
| 1939 昭和14年 | 清水 義雄 | | 渡辺 治三郎 小堀 佳夫 杉浦 甫 田崎 幸二 布施 周一郎 山手 友次郎 | | 田中保平氏、学校長就任 本科第15回、別科第13回 (昭和15年3月)卒業生 |

| 年 | 顧問 | 監督 | 幹部 (記載前年9月~8月) ◎：主将 ○：主務 | 主な戦績や出来事等 | 備考 |
|---------------|-------|----|--|--|--|
| 1940 昭和15年 | 清水 義雄 | | 井原 寿 岡本 信男 北山 敏彰 島津 福一 高田 久成 中島 晋 早川 敏郎 | 5. 関西高専フォア大会 龍谷大、関大を破り優勝 9.15 関西選手権競漕大会 シエルフォアの部 優勝 1回戦 対 神戸商大戦 5艇身差 time 6"46 優勝戦 対 大阪大丸戦 艇差なし time 6"31 | 本科第16回、別科第14回 卒業生(昭和16年3月) |
| 1941 昭和16年 | 清水 義雄 | | 中川 函 能勢 久雄 平岡 勉 前田 次郎 松尾 卓 油谷 穰 遠藤 仁一郎 佐田 長雄 杉田 正治 | インカレを目指すも政府より中止命令発令 | 本科第17回卒業生(昭和 16年12月)、別科第15回 卒業生(昭和17年3月) |
| 1942 昭和17年 | 清水 義雄 | | 富田 信夫 長尾 清太郎 中川 永太郎 中村 萬壽夫 長谷川 榮一 | 7.25 インカレ準決勝進出 1回戦 対 関西大戦 2艇身差で勝利 準決勝 対 京大戦 1艇身差で敗退 | 田岡喜寿教授、学校長 就任 本科第18回(昭和17年9 月)、別科第16回(昭和 18年3月)卒業生 |
| 1943 昭和18年 | 清水 義雄 | | 青木 隆造 上田 孝次郎 河崎 健三 河崎 直明 木村 信一 日下部 一男 長谷川 一雄 山内 一 | 5.6 漕艇部は海洋班となる 7. 伝馬船第1号、天心丸第1、2号、乾岬丸 を購入 | 本科第19回(昭和18年9 月)、別科第17回(昭和 19年3月)卒業生 |
| 1944 昭和19年 | 清水 義雄 | | 茨木 保 景山 誠三 小森 久之 田波 隆興 山岡 順一 山崎 達夫 吉崎 文雄 | 5.6 エイトを名古屋大学に売却 戦争のため試合なし | 別科制度廃止 彦根工業専門学校第1 回入学式 本科第20回(昭和19年9 月)卒業生 |
| 1945 昭和20年 | | | 井上 弘 大喜多 一郎 多々納 靖 藤川 孝二郎 増沢 敏雄 | 戦争のため試合なし | 永沢毅一教授、彦根工 業専門学校長に就任 本科第21回(昭和20年9 月)卒業生 |
| 1946 昭和21年 | | | | 戦後混乱のため試合なし | |
| 1947 昭和22年 | | | | | 彦根工業専門学校廃止 |
| 1948 昭和23年 | | | 岩崎 博幸 小柳 正作 紫崎 弥太郎 西堀 寛 藤宮 亮 村上 芳彦 | 10 第3回福岡国体 フィックス大学の部 第3位 1回戦 清水商戦 カンバス差で勝利 2回戦 愛媛農専 半艇身差で勝利 決勝 小樽経専 1位 福岡経専 2位 彦根経専 3位 | 本科第22回(昭和24年3 月)卒業生 |
| 1949 昭和24年 | | | 井関 正範 大澤 捨一 草野 弘 山岡 亨 | 学生と実業団が同一レース開始 全日本大学選手権初開催 | 5.31 滋賀大学が設置さ れる 秋山範二教授、経済学 部長に就任 大畑文七教授が学長に 就任 7.6 経済学部第1回入 学式挙行 本科第23回(昭和25年3 月)卒業生 |

| 年 | 顧問 | 監督 | 幹部 (記載前年9月~8月) ◎:主将 ○:主務 | 主な戦績や出来事等 | 備考 |
|---------------|---------------|----|---|--|---|
| 1950 昭和25年 | | | 加藤 利朗 西藤 康明 土方 俊雄 田中 祥三 夏原 昭 渡辺 正治 | 10.31 第5回名古屋国体 一般フィックスの部 第2位 札幌文化専門に敗れる | 4.22 経済学部第2回入学式挙行 本科第24回(昭和26年3月)卒業生 |
| 1951 昭和26年 | | | | 初夏 秋山、芳谷先生のご尽力、先輩諸兄の応援により、旧制八高より中古エイトの譲渡を受け、ボート部再興のスタートを切った 11.12 経済学部艇庫(尾末町港湾サイド)が竣工 11.18 艇庫竣工式挙行 | 江頭恒治教授が経済学部長就任 |
| 1952 昭和27年 | 芳谷 有道 (教授) | | ◎前田 偉量 ○伊藤 彰二 ○荻田 隆 黒田 時夫 小池 英夫 橋谷 文雄 布施 勇 | 7.27 関西漕艇選手権大会 シエルフォアの部 優勝 | 大学第1回(昭和28年3月)卒業生 |
| 1953 昭和28年 | | | ◎横尾 隆明 ○乾 哲彦 井上 隆吉 上野 敬宣 川辺 正郎 木村 善雄 松原 満 | 7.25 大阪レガッタ シエルエイトの部 第2位 京滋学生リーグ戦 優勝 (京大、立命大、同志社大、龍谷大) | 3.20 経済学部第1回卒業式挙行 |
| 1954 昭和29年 | | | ◎長谷川 隆 ○石川 茂行 藤森 敏夫 | 6. 第1回近畿地区大学体育大会 シエルフォアの部 優勝 9.23 ケンブリッジ大学歓迎関西選抜レガッタ (瀬田川1000M) シエルフォアの部 優勝 (大阪大丸と同着) | |
| 1955 昭和30年 | | | ◎佐々 次郎 ○荻田 修 白岩 登志男 森田 大蔵 | 8.6 関西選手権(瀬田川2000M) シエルフォア 優勝 9. 全日本選手権(戸田) シエルフォア初出場 準決勝進出 | 大谷孝太郎教授が経済学部長就任 |
| 1956 昭和31年 | | | ◎高島 皓二 ○井上 明郎 天田 志郎 高橋 亮三 平岩 勇 藤原 成美 三井 正勝 | 全日本選手権出漕 (戸田オリンピックコース2000M) シエルエイトの部 4.29 朝日レガッタ(尾花川100M) シエルフォアの部 準決勝進出 6. 第3回近畿地区大学体育大会 (桜之宮1500M) シエルエイトの部 準決勝進出 | |
| 1957 昭和32年 | | | ◎中田 裕雄 ○川端 忠信 井上 富夫 伊場 大三郎 内田 嘉一 北井 美雄 斎藤 高康 中山 珍彦 | 4.29 朝日レガッタ(尾花川1000M) シエルフォアの部 予選敗退(浸水) 8. 関西選手権(瀬田川2000M) シエルエイトの部 準決勝進出 | 石田興平教授が経済学部長就任 |
| 1958 昭和33年 | | | ◎小笠原 哲朗 ○松島 利一 木村 卓治 丸岡 啓 吉田 紀幸 | 4. 朝日レガッタ シエルフォアの部 第2位 6.29 第5回近畿地区大学体育大会 シエルエイトの部 優勝 11.16 第9回関西学生漕艇リーグ シエルフォアの部 優勝 | 体育館竣工 |
| 1959 昭和34年 | | | ◎松野 能夫 ○羽原 秀俊 中島 孝宜 武藤 利之 | 6.28 第6回近畿地区大学体育大会 シエルフォアの部 第2位 中日本レガッタ シエルフォア 準決勝進出 | 小牧実繁教授が学長就任 |

| 年 | 顧問 | 監督 | 幹部 (記載前年9月~8月) ◎:主将 ○:主務 | 主な戦績や出来事等 | 備考 |
|---------------|----|------------------|--|--|--|
| 1960 昭和35年 | | | ◎中川 和己 ○藤原 浩史 池田 定郎 大谷 英夫 北澤 勝太郎 小篠 宏 杉田 嘉あき 渡部 浩之 | 4.30 第13回朝日レガッタ シエルフォアの部 第3位 ローマ五輪代表決定選 敗退 6. 第7回近畿地区大学体育大会 シエルエイトの部 第2位 7.31 関西選手権(瀬田川2000M コース) シエルフォアの部 優勝 11.13 第11回関西学生漕艇リーグ戦 シエルフォアの部 優勝 | |
| 1961 昭和36年 | | | ◎宇野 宏記 ○津守 秀彰 井上 斐雄 井原 利夫 片岡 弘光 桑原 誠 清水 吉蔵 田中 俊男 | 4. 第14回朝日レガッタ シエルエイトの部 第2位 6. 第8回近畿地区大学体育大会 シエルエイトの部 優勝 | |
| 1962 昭和37年 | | | ◎丸山 一彦 ○黒木 光雄 各務 健 佐野 弘二 前田 小弥太 松尾 守良 | 6. 第9回近畿地区大学体育大会(瀬田川) 優勝 8. 関西選手権(瀬田川) 準決勝進出 9.29 シエルフォア新艇「彦根」購入 11. 第12回関西学生漕艇リーグ戦(瀬田川) シエルフォアの部 優勝 | 生活協同組合を設立 芳谷有道教授が経済学 部長就任 |
| 1963 昭和38年 | | 片岡 帰一 (高商13回) | ◎北村 勝則 ○坂井 昌治 市村 和彦 田尻 隆康 平居 俊雄 古木 一彦 | 4. 第16回朝日レガッタ 準決勝進出 8. 合宿所建設決定具体化 用地、御殿ヶ浜 11.10 第13回関西学生漕艇リーグ戦 (桜ノ宮1400M) シエルフォアの部 第2位 | 大谷孝太郎教授が経済 学部長就任 合宿所建設資金集めの 為OB名簿整備(幹事大 学1回伊藤彰二):OB 会が陵水艇友会として 本格スタート 高安規玖次会長(高商5回) |
| 1964 昭和39年 | | | ◎上條 徳治 ○内本 圭一 合田 忠雄 梅本 輝夫 川久保 昌憲 中村 修一 西部 宏道 浜田 明 吉野 祐次郎 | 1. 陵水艇友会に資金集まり本格活動開始 4.19 第17回朝日レガッタ(瀬田川コース) 準決勝進出 5. 御殿ヶ浜合宿所落成 6. 陵水艇友会より滋賀大学に御殿ヶ浜合宿 所寄贈、滋賀大学漕艇部合宿所となる 7. 御殿ヶ浜合宿所処女合宿 8.30 関西選手権(瀬田川コース) シエルフォア 第2位 瀬田川杯 シエルフォア 優勝 11.23 第14回関西学生漕艇リーグ (琵琶湖埋立1400M) シエルフォア 第2位 ジュニアフォア 第3位 | 体育会結成 |
| 1965 昭和40年 | | | ◎小口 晃 ○西村 勝宏 越野 史朗 藤吉 貞佑 | 4 第18回朝日レガッタ 一般ナックルの部 第3位 | 高田彬教授が経済学部 長就任 三輪健司教授が学長に 就任 |
| 1966 昭和41年 | | | ◎弓削 雅信 ○長尾 昌明 岩下 清 馬島 惟安 海老 洋 真田 佳勲 別役 重孝 前田 哲顕 | 7 陵水艇友会、総理大臣より表彰 | 森順次教授が経済学部 長就任 |
| 1967 昭和42年 | | | ◎館山 武男 ○進 従道 藤森 強兵 | 3. 合宿所御殿が浜湖岸埋立てにより移転 4. 第20回朝日レガッタ シエルフォアの部 第3位 7.30 関西選手権(瀬田川コース) シエルフォアの部 第4位 瀬田川杯レガッタ シエルフォアの部 第2位 | |

| 年 | 顧問 | 監督 | 幹部 (記載前年9月~8月) ◎:主将 ○:主務 | 主な戦績や出来事等 | 備考 |
|---------------|---------------------------|------------------|--|--|--|
| 1967 昭和42年 | | | | 9. 全日本選手権 出漕 シェルフォアの部 シェルフォア「セリーネ」、 シェルエイト「伊吹」新艇進水式 | |
| 1968 昭和43年 | | | ◎岡本 和之 ○小林 賢也 石井 卓 大原 和夫 前田 豊 松下 悦雄 | 4 第21回朝日レガッタ(瀬田川コース) シェルフォアの部 準決勝進出 | 村橋時朗教授が経済学 部長に就任 徳聖寮完成 砂崎宏教授が学長に就任 岡本愛次教授が経済学 部長に就任 |
| 1969 昭和44年 | | | ◎北居 和夫 ○中嶋 俊彦 大西 正俊 田中 博 水島 孝之 三田村 龍平 山本 廣司 | 4.29 第22回朝日レガッタ(瀬田川コース) シェルフォアの部 第4位 8.3 関西選手権(瀬田川コース) シェルフォアの部 準決勝進出 瀬田川杯レガッタ シェルフォアの部 第4位 | |
| 1970 昭和45年 | | | ◎佐竹 勇 ○吉原 義隆 松林 茂晴 | 4. 第23回朝日レガッタ(琵琶湖) シェルフォアの部 準決勝進出 中日本レガッタ シェルフォア 予選敗退 7.26 関西選手権(瀬田川コース) シェルフォアの部 第3位 瀬田川杯レガッタ シェルフォアの部 準決勝進出 | 体育館前にトレーニング センター竣工 |
| 1971 昭和46年 | | | ◎水野 久仁昭 ○岩崎 和文 坂井 真修 福岡 守 宮本 又男 森脇 幸夫 | 4.29 第24回朝日レガッタ(琵琶湖漕艇場) シェルエイトの部 準決勝進出 シェルフォアの部 準決勝進出 6.13 中日本レガッタ シェルエイトの部 準決勝進出 シェルフォアの部 第5位 6. 全日本大学選手権大会出漕 シェルフォアの部 8.1 瀬田川杯レガッタ(琵琶湖漕艇場) シェルエイトの部 第2位 | |
| 1972 昭和47年 | | | ◎吉田 富美男 ○石川 公一 射場 茂喜 (体育会) 久保 和敬 斎藤 節史 高田 治 (主舵手) 柳瀬(後藤)常二 | 7.30 関西選手権 シェルエイトの部 準決勝進出 ナックルフォアの部 準決勝進出 11.5 全日本新人戦(戸田) シェルエイトの部 第4位 11. 関西秋季リーグ戦 シェルエイトの部 第2位 | 「管理科学科」新設認可 |
| 1973 昭和48年 | 富田 光彦 (講師・助教 教授・教授) | 片岡 帰一 (高商13回) | ◎阿部 吉博 ○佐藤 行伸 長野 邦夫 (主舵手) 若園 清和 (コーチ・体育会) | 4.29 朝日レガッタ シェルフォアの部 準決勝進出 11.25 第2回関西学生漕艇リーグ (浜寺漕艇センター) シェルエイトの部 優勝 | 「大学院経済学研究科」 設置 陵水50周年記念式典 祝賀会 |
| 1974 昭和49年 | 富田 光彦 (講師・助教 教授・教授) | 片岡 帰一 (高商13回) | ◎辻岡 榮一 ○棚橋 稔 太田 敦生 酒井 康行 田村 勝治 (主舵手) 堀江 慎一 松本 正 森 重道 | 3.15 エイト「バルクーザ」、シングルスカル 「葦牙」新艇進水式 5. 朝日レガッタ シェルエイトの部 第2位 6. 中日本レガッタ シェルエイトの部 第4位 8.4 関西選手権 シェルフォアの部 第2位 Sスカルの部(酒井) 第5位 11. 関西学生漕艇リーグ シェルフォアの部 第3位 シングルスカル「K&R」片岡帰一氏よ り寄贈 | 桑原正信教授、学長就任 井上洋一郎教授、経済 学部長就任 |

| 年 | 顧問 | 監督 | 幹部 (記載前年9月~8月) ◎:主将 ○:主務 | 主な戦績や出来事等 | 備考 |
|---------------|----------------------|------------------|---|--|---|
| 1975 昭和50年 | 富田 光彦 (講師・助教授・教授) | 片岡 帰一 (高商13回) | ◎川崎 重喜 ○後藤 啓昭 上ヶ市 俊之 原 太郎 森下 雅史 鷺尾 秀樹 | 4.27 朝日レガッタ シェルエイトの部 準決勝進出 8.3 関西選手権 シェルエイトの部 準決勝進出 瀬田川杯 シェルエイトの部 準決勝進出 | 陵水艇友会伊東潔会長 (高商1回) |
| 1976 昭和51年 | 富田 光彦 (講師・助教授・教授) | 片岡 帰一 (高商13回) | ◎辰己 馨 ○田村 弘昭 岡本 幸博 (主舵) | 5. 朝日レガッタ シェルエイトの部 準決勝進出 11.7 全日本新人選手権 シェルエイトの部 準決勝進出 シェルフォアの部 準決勝進出 11.21 関西学生漕艇秋季リーグ シェルフォアの部 A 優勝 B 第2位 Jr. エイトの部 優勝 | 和田俊二教授、経済学 部長就任 |
| 1977 昭和52年 | 富田 光彦 (講師・助教授・教授) | 片岡 帰一 (高商13回) | ◎山田 昌嗣 ○加藤 英隆 高田 義明 玉置 秀樹 西口 尚吾 林田 幸親 | 5.3 朝日レガッタ シェルエイトの部 準決勝進出 6.12 中日本レガッタ シェルエイトの部 準決勝進出 7.31 関西選手権 シェルエイトの部 第3位 瀬田川杯 シェルエイトの部 「伊吹」 第3位 11.6 第18回全日本新人選手権 シェルエイトの部 第2位 (3選手が3年後のモスクワ五輪代表 強化候補に選出) 11.20 関西学生漕艇リーグ シェルフォアの部 第2位 Jr. エイトの部 第3位 | 「会計学科」新設 |
| 1978 昭和53年 | 富田 光彦 (講師・助教授・教授) | 片岡 帰一 (高商13回) | ◎大村 義朗 ○野瀬 達 柏木 勝 森下 伊浩 森田 康史 | 6. 中日本レガッタ シェルエイトの部 第5位 7. 関西選手権 シェルエイトの部 準決勝進出 瀬田川杯 シェルエイトの部 第3位 シェルフォアの部 準決勝進出 8. 全日本大学選手権 シェルエイトの部 準決勝進出 11. 第6回関西学生秋季リーグ シェルフォアの部 優勝 第2位 | 越後和典教授、経済学 部長就任 |
| 1979 昭和54年 | 富田 光彦 (講師・助教授・教授) | 片岡 帰一 (高商13回) | ◎西川 元啓 ○牧野 博和 井田 茂 大野 光宏 岡本 勝彦 木村 秀樹 桑島 英彰 小杉 祐司 長江 高明 | 4.7 エイト「大湖」新艇進水式(彦根艇庫) 5. 朝日レガッタ シェルエイトの部 第5位 6.9 中日本レガッタ シェルエイトの部 準決勝進出 6.23 関西選手権 シェルエイトの部 第3位 7.28 瀬田川レガッタ 29 ナックルフォアの部 第3位 Jr. エイトの部 優勝 8.25 全日本大学選手権 シェルエイトの部 準決勝進出 11.18 第7回関西学生秋季リーグ シェルエイトの部 優勝 シェルフォアの部 第3位 琵琶湖総合開発の一環で旧港湾の工事が 行われ、彦根艇庫が移転 | 初の共通第一次学力試 験実施 有田正三教授、経済学 部長就任 |
| 1980 昭和55年 | 富田 光彦 (講師・助教授・教授) | 片岡 帰一 (高商13回) | ◎緒方 俊輔 ○田村 喜宏 井上 圭一郎 金森 俊樹 酒井 嘉登 酒向 良弘 佐々木 俊和 佐田 篤史 鈴木 教義 | 5.5 朝日レガッタ シェルエイトの部 第6位 シングルスカルの部 準決勝進出 7.27 関西選手権 シェルエイトの部「大湖」 第4位 ナックルフォアの部 準決勝進出 シングルスカルの部(澤) 第3位 | 進藤勝美教授、経済学 部長就任 川崎源教授、学長就任 |

| 年 | 顧問 | 監督 | 幹部 (記載前年9月~8月) ◎:主将 ○:主務 | 主な戦績や出来事等 | 備考 |
|---------------|--------------------------|------------------|--|---|--|
| 1980 昭和55年 | | | 谷川 佳裕 中村 邦男 林 直樹 藤田 雅明 牧野 武 森 秀司 山根 正美 横井 隆広 | 瀬田川杯 シェルフォアの部 優勝 シェルエイトの部 優勝 8.23 全日本大学選手権 シェルエイトの部 準決勝進出 11. 第8回関西学生秋季リーグ Jr. エイトの部 第3位 シェルフォアの部 第2位 | |
| 1981 昭和56年 | 富田 光彦 (講師・助教 授・教授) | 片岡 帰一 (高商13回) | ◎兵藤 佳照 ○池亀 徹 生駒 和代 五百森 幹雄 祝原 正人 岸 泰志 澤 一郎 白井 康雄 田中 章喜 寺岡 孝憲 藤坂 祐宏 六車 信義 | 5.5 朝日レガッタ シェルエイト (対校エイト) 準決勝進出 (陵水艇友会) 準決勝進出 6.6 エイト「八州」新艇進水式(彦根艇庫) 6.21 第3回全日本軽量級選手権 Sスカルの部(澤) 準決勝進出 関西選手権 シェルエイトの部 準決勝進出 シングルスカルの部(澤) 第3位 7.25 瀬田川杯レガッタ シェルエイトの部 「大湖」 第2位 シェルフォアの部 「セリーネ」 第3位 「彦根」 第4位 8. 全日本学生選手権 Sスカルの部(澤) 準決勝進出 オックスフォード盾レガッタ シェルエイトの部 準決勝進出 11.15 第9回関西学生秋季リーグ Jr. エイトの部 第2位 | 学生自治会解消し、学生会成立 |
| 1982 昭和57年 | 富田 光彦 (講師・助教 授・教授) | 片岡 帰一 (高商13回) | ◎河崎 泰行 ○要 英治 青木 明 安藤(市川)久 今井 新吾 梅垣 和敬 篠田 秀一 曾我部 和正 寺本 達 長尾 賢輝 橋本 衛 平山 宝 前川 佳嗣 吉田 和由 吉原(橋本)康弘 | 5.5 エイト「ワルラス」新艇進水式 6.13 朝日レガッタ シェルエイト 準決勝1位通過 (荒天のため決勝中止) 7.31 中日本レガッタ シェルエイトの部 第2位 8.29 関西選手権 シェルエイト 準決勝1位通過 (荒天のため決勝中断) 11. 全日本大学選手権 シェルエイトの部 準決勝進出 鳥根国体 ナックルフォア 優勝 (瀬田 RC と合同) 第10回関西学生秋季リーグ シェルエイトの部「ワルラス」 優勝 大阪市民レガッタ ナックルフォアの部 優勝 | 第1回推薦入学面接を実施 傳田功教授、経済学部長就任 桑野造船(株)前代表取締役 古川宗寿氏コーチ就任 |
| 1983 昭和58年 | 富田 光彦 (講師・助教 授・教授) | 片岡 帰一 (高商13回) | ◎奥城 哲郎 ○山本 克彦 岩田 雄一 太田 俊二 河合 隆広 木倉 尚紀 栗崎 恵蔵 近藤 薫 柴田 健 豊岡 実 中谷 辰雄 船坂 宏樹 松原 俊夫 吉野 泰博 | 4.18 フォア「陵水」「トランソニック」 新艇進水式 6.13 朝日レガッタ シェルエイトの部 「ワルラス」 第5位 7.31 中日本レガッタ シェルエイトの部 「ワルラス」 第5位 8.23 関西選手権 (大阪府立漕艇センター2000M) シェルエイトの部 準決勝進出 シェルフォアの部 優勝 10.16 瀬田川杯 シェルエイトの部 「大湖」 決勝進出 (着順不明) 「八州」 第2位 11. 全日本大学選手権 シェルエイトの部 「ワルラス」 準決勝進出 シェルフォアの部 準決勝進出 オックスフォード盾レガッタ 準決勝進出 全日本新人選手権競漕大会 準決勝進出 | 森主一教授、学長就任 陵水60周年記念式典 祝賀会 |

| 年 | 顧問 | 監督 | 幹部 (記載前年9月~8月) ◎:主将 ○:主務 | 主な戦績や出来事等 | 備考 |
|---------------|--------------------------|------------------|---|--|--|
| 1983 昭和58年 | | | | 関西学生秋季リーグ 対校エイトの部 第2位 Jr. エイトの部 優勝 決勝3位 シェルフォアの部 第2位 ナックルフォアの部 第4位 | |
| 1984 昭和59年 | 富田 光彦 (講師・助教 授・教授) | 片岡 帰一 (高商13回) | ◎清塚 徳 ○寺井 敏雄 木下 俊弘 鷹野 一郎 長谷川 裕一 春原 正典 森井 守 | 5.5 朝日レガッタ シェルエイトの部 対校エイト 準決勝進出 Jr. エイト 第5位 6. 中日本レガッタ シェルエイトの部 対校エイト 第2位 7.29 関西選手権 シェルエイトの部 「八州」 第4位 瀬田川杯 シェルエイトの部 「大湖」 優勝 8.26 全日本大学選手権(兼ロサンゼルスオリ ンピック代表選考会) シェルエイト 出漕 9. オックスフォード盾レガッタ シェルエイトの部 準決勝進出 奈良国体 第4位(瀬田 RC と合同) 11.18 関西学生秋季リーグ 対校エイトの部 第3位 Jr. エイトの部 「八州」 優勝 シェルフォアの部 「トランソニック」 優勝 「陵水」 第2位 ナックルフォアの部 優勝 | 水地宗明教授、経済学部 長就任 |
| 1985 昭和60年 | 富田 光彦 (講師・助教 授・教授) | 片岡 帰一 (高商13回) | ◎井上 洋光 ○原田 欣則 大野 義紀 北村 龍三 栗田 徳雄 郡山 泰知 坂本 幸司 新堀 展朗 橋 保男 藤山 雄亮 堀川 益夫 水谷 昌弘 | 5.5 朝日レガッタ シェルエイトの部 準決勝進出 シェルフォアの部 第5位 6.9 中日本レガッタ シェルエイトの部 準決勝進出 6.23 全日本軽量級選手権(戸田) シェルフォアの部 準決勝進出 7.21 第38回滋賀県民体育大会漕艇競技 (滋賀県琵琶湖) 成年男子シェルフォアの部 「陵水艇友会」 1回目 第2位 2回目 第4位 7.28 関西選手権 シェルエイトの部 優勝 time 4'32"7 瀬田川杯 シェルエイトの部 優勝(2連覇) シェルフォアの部 第4位 全日本大学選手権 シェルエイト 準決勝進出 オックスフォード盾レガッタ シェルエイト 出漕 | 関西選手権優勝エイト: C 水谷 S 黒田 7 堀川 6 北村 5 今林 4 杉本 3 浜 田 2 藤山 B 井上 瀬田川杯優勝エイト: C 池田 S 牧田 7 橋 6 山 戸 5 西村 4 豊崎 3 菊池 2 宮田 B 中村 |
| 1986 昭和61年 | 富田 光彦 (講師・助教 授・教授) | 片岡 帰一 (高商13回) | ◎牧田 善徳 ○深見 龍雄 会田 元信 池田 龍弥 今林 克朗 岡本 匡視 小倉 信 河上 隆男 黒田 士朗 佐々木 青也 下田 武 豊崎 亮 中村 克彦 西村 文彦 浜田 和良 | 3.2 エイト「湖龍」、ダブルスカル「Frontier」 新艇進水式(大津艇庫) 5. 朝日レガッタ シェルエイトの部 準決勝進出 6.8 中日本レガッタ シェルエイトの部 第2位 7. 関西選手権 シェルエイトの部 第4位 瀬田川杯 シェルエイトの部 優勝(3連覇) 8. 全日本大学選手権 シェルエイトの部 準決勝進出 9. オックスフォード盾レガッタ 第5位 山梨国体 シェルエイトの部 第2位 11. 関西学生秋季リーグ 対校エイトの部 第3位 | 片山貞雄教授、経済学 部長就任 |

| 年 | 顧問 | 監督 | 幹部 (記載前年9月~8月) ◎:主将 ○:主務 | 主な戦績や出来事等 | 備考 |
|-----------------------|--------------------------|------------------|---|---|---|
| 1986 昭和61年 | | | 山戸 博幸 山本 芳久 若松 直喜 渡會 俊仁 | | |
| 1987 昭和62年 | 富田 光彦 (講師・助教 授・教授) | 片岡 帰一 (高商13回) | ◎杉本 有生 ○中山 高 浅田 克巳 内田 肇 角尾 晴人 菊池 伸康 小島 之尚 仲 豊 宮田 達彦 渡辺 一彦 | 5. 朝日レガッタ シェルエイトの部 準決勝進出 6.14 中日本レガッタ シェルエイトの部 第6位 舵手なしペアの部 第2位 7.26 関西選手権 シェルエイトの部 「湖龍」 第3位 瀬田川杯 シェルエイト 第3位 8. 全日本大学選手権 シェルエイトの部 準決勝進出 11.22 オックスフォード盾レガッタ 準決勝進出 関西学生秋季リーグ シェルフォアの部 「セリーネ」 第3位 ナックルフォアの部 優勝 | |
| 1988 昭和63年 | 富田 光彦 (講師・助教 授・教授) | 片岡 帰一 (高商13回) | ◎伊藤 智弘 ○堀田 慎一 大塚 洋幸 川窪 孝訓 近藤 量行 芝田 友作 田口 英一郎 内藤 達也 西島 聡 西野 匡持 古畑 喜彦 三俣 太志 森尾 浩伸 山下 佳久 和島 健男 | 5. 朝日レガッタ 第4位 5.21 エイト「OCCIDENTALBRIDE」 新艇進水式(大津艇庫) 7. 関西選手権 準決勝進出 8. 全日本大学選手権 準決勝進出 11. 関西学生秋季リーグ 優勝 | 仙田左千夫教授、学部長に就任 |
| 1989 昭和64年 平成元年 | 富田 光彦 (講師・助教 授・教授) | 片岡 帰一 (高商13回) | ◎藤田 俊明 ○押谷 嘉博 今村 拓也 岡戸 久敏 斎藤 保幸 庄司 憲広 竹村 信克 田中 芳英 寺西 光博 芳村 弘昭 | 朝日レガッタ シェルエイト 準決勝進出 ナックルフォア 第3位 中日本レガッタ シェルエイト 準決勝進出 瀬田川杯 シェルフォア 第3位 関西学生秋季リーグ 荒天中止 | 滋賀大学創立40周年 記念式典祝賀会 |
| 1990 平成2年 | 富田 光彦 (講師・助教 授・教授) | 前田 偉量 (大学1回) | ◎山口 陽輔 ○藤川 直樹 梅本 竜弘 大屋 有司 奥田 明彦 森本 孝幸 赤坂 光彦 | フォア「TRIUMPH」新艇進水式 朝日レガッタ シェルフォア 準決勝進出 中日本レガッタ シェルフォア 第4位 シェルエイト 準決勝進出 関西選手権 シェルフォア 第3位 瀬田川杯 シェルエイト 優勝 シェルフォア 第4位 全日本大学選手権 シェルフォア 準決勝進出 全日本選手権 シェルフォア 準決勝進出 関西学生秋季リーグ シェルフォア 準決勝進出 Jr. エイト 準決勝進出 | 陵水艇友会:片岡帰一会長(高商13回) 美崎皓教授、経済学部長 就任 管理科学科を改組拡充し「情報管理学科」設置 |
| 1991 平成3年 | 富田 光彦 (講師・助教 授・教授) | 前田 偉量 (大学1回) | ◎今村 裕司 ○森 春樹 伊川 晃 石飛 勝徳 伊藤 政宏 小坂田 泰宏 後藤(石原)清 塩見 賢 高津 敬太郎 | 朝日レガッタ シェルエイト 準決勝進出 シェルフォア 第4位 中日本レガッタ シェルエイト 準決勝進出 関西選手権 シェルエイト 準決勝進出 瀬田川杯 シェルエイト 第2位 全日本大学選手権 シェルフォア 準決勝進出 | ファイナンス学科新設 |

| 年 | 顧問 | 監督 | 幹部 (記載前年9月~8月) ◎:主将 ○:主務 | 主な戦績や出来事等 | 備考 |
|--------------|--------------------------|------------------|--|--|---|
| 1991 平成3年 | | | 鷹村 淳史 野村 誠治 村田 照男 山本 周 | 全日本選手権 シェルフォア 準決勝進出 オックスフォード盾レガッタ 準決勝進出 | |
| 1992 平成4年 | 富田 光彦 (講師・助教 授・教授) | 北村 勝則 (大学12回) | ◎伊藤 弘隆 ○岩井 嘉宏 青山 弘幸 池田 知広 内山 尚也 佐久間(金原)理恵 河島 甚一 福尾(桐山)典子 後藤 洋一 竹中 利幸 水野 智泰 持田 英樹 山下 裕正 若松(山栴)達哉 | エイト「飛龍」新艇進水式 朝日レガッタ シェルエイト 準決勝進出 中日本レガッタ シェルエイト 第4位 瀬田川杯 シェルエイト 準決勝進出 シェルフォア 第2位、準決勝進出 関西学生秋季リーグ シェルフォア第2位 | 清水哲雄教授、経済学 部長就任 |
| 1993 平成5年 | 富田 光彦 (講師・助教 授・教授) | 北村 勝則 (大学12回) | ◎村田 和明 ○大江 啓俊 石津 健三 岩垂 省吾 筧 栄二 加藤 久善 北本 義人 小柴 唯嘉 佐々木 裕一 佐野 英史 猿橋 貴夫 瀬林 新 所 寛 西尾 亮哉 野々垣 太 三宅 伸央 山崎 剛 山本 雅由 | 朝日レガッタ シェルエイト 準決勝進出 中日本レガッタ シェルエイト 第4位、準決勝進出 関西選手権 シェルエイト 準決勝進出 瀬田川杯 シェルエイト 第4位 シェルフォア 準決勝進出 全日本大学選手権 シェルエイト 準決勝進出 関西学生秋季リーグ シェルフォア 第4位 同 準決勝進出2艇 Jr. エイト 準決勝進出 | 吉田修教授、学部長就任 学部全学科及び併設経 済短期大学部が改組さ れ、経済学科、ファイ ナンス学科、企業経営 学科(旧経営学科)、会 計情報学科(旧会計学 科)、情報管理学科、社 会システム学科(新設) となり、社会人コース が新設 滋賀大学経済学部創立 70周年記念事業実施 |
| 1994 平成6年 | 富田 光彦 (講師・助教 授・教授) | 北村 勝則 (大学12回) | ◎田崎 和人 ○大沼 義永 赤枝 公 猪口 英亮 菊池 克之 小西 圭吾 谷口 敦司 寺井 健晴 前川 大 前川 始 守 剛史 藪野 正時 吉川 晃司 芳村 浩樹 | 中日本レガッタ シェルエイト 準決勝進出 関西新人レガッタ ナックルフォア 第3位 関西選手権 シェルフォア 準決勝進出 瀬田川杯 シェルエイト 優勝 関西学生秋季リーグ シェルフォア 第7位 同 準決勝進出 女子Sスカル 第4位 | 吉田修教授が、経済学部 長就任 陵水艇友会70周年 (前田偉量会長) |
| 1995 平成7年 | 富田 光彦 (講師・助教 授・教授) | 北村 勝則 (大学12回) | ◎徳永 敦史 ○北脇 将志 石倉 義紀 伊藤 大介 稲葉 英樹 井上 康明 尾谷 ゆか 北川 勝之 後藤田 史和 齋藤 創太 谷 清高 西村 健志 中川(橋本)貴美子 針尾 周吉 前川 周一 山本 章弘 | 朝日レガッタ シェルエイト 準決勝進出 シェルフォア 準決勝進出 女子Sスカル 準決勝進出 以降水難事故のため大会中止 中日本レガッタ シェルフォア 準決勝進出 シェルエイト 第6位 関西選手権 シェルエイト 準決勝進出 女子Sスカル 準決勝進出 瀬田川杯 準決勝進出 全日本大学選手権 女子Sスカル 準決勝進出 関西学生秋季リーグ シェルフォア 第5位 女子シェルフォア 第4位 | |

| 年 | 顧問 | 監督 | 幹部 (記載前年9月~8月) ◎:主将 ○:主務 | 主な戦績や出来事等 | 備考 |
|---------------|--------------------------|------------------|--|--|-------------------------------------|
| 1996 平成8年 | 富田 光彦 (講師・助教 授・教授) | 北村 勝則 (大学12回) | ◎西岡 裕高 ○三和 陽一郎 木野 幹夫 鈴木 耕馬 長谷川(田中)千春 谷 直樹 田中(蔦川)美樹 菊池(中嶋)明子 | 朝日レガッタ シェルエイト 準決勝進出 シェルフォア 準決勝進出 中日本レガッタ シェルフォア 準決勝進出 シェルエイト 第6位 関西選手権 シェルフォア 準決勝進出 瀬田川杯 シェルエイト 第5位 シェルフォア 準々決勝進出 関西学生秋季リーグ シェルフォア 第5位 | |
| 1997 平成9年 | 富田 光彦 (講師・助教 授・教授) | 北村 勝則 (大学12回) | ◎西脇 隆 ○小林 文典 清水 崇宏 芹沢 良 川口(辻)公寿 辻野 裕嗣 戸田 和宏 服部 友彦 加藤(松尾)直美 三好 徹 八木 賢訓 吉野 泰輔 | 朝日レガッタ シェルエイト 準々決勝進出 中日本レガッタ シェルエイト 第5位 関西選手権・瀬田川杯 台風のため中止 | |
| 1998 平成10年 | 富田 光彦 (講師・助教 授・教授) | 北村 勝則 (大学12回) | ◎内藤 恵樹 ○越前 智大 上田 洋平 蒲 崇彰 河合 博之 織田(三郎丸)学 富田 祐樹 早川 崇弘 平川 太亮 楨野 知久 水野 修一 | 中日本レガッタ シェルエイト 優勝 女子Wスカル 第4位 関西選手権 シェルエイト 準決勝進出 瀬田川杯 シェルエイト 準決勝進出 関西学生秋季リーグ シェルフォア 第4位 | |
| 1999 平成11年 | 富田 光彦 (講師・助教 授・教授) | 北村 勝則 (大学12回) | ◎西 夏樹 ○谷 知憲 柳田(岩崎)恭子 奥野 健一 川合 祥彦 川合(宇田)奈生 麴屋 友彦 津村 秀昭 西山 知博 堀口 貴子 三嶋 洋平 | 中日本レガッタ シェルエイト 準優勝 女子Sスカル 準決勝進出 女子Wスカル 第3位 関西選手権 シェルエイト 準決勝進出 瀬田川杯 シェルエイト 準決勝進出 女子Sスカル 第4位 全日本大学選手権 女子Sスカル 準決勝進出 関西学生秋季リーグ シェルエイト 第4位 女子Wスカル 第3位 | セメスター制導入 陵水艇友会75周年 (高島皓二会長) |
| 2000 平成12年 | 富田 光彦 (講師・助教 授・教授) | 木村 善雄 (大学2回) | ◎長浦 賢明 ○白濱 雄介 加茂野 賢士 鈴木 健一 手塚 崇生 中村 晋也 那須 仁視 濱野 卓二 平野 秀幸 藤田(轟)由紀子 真木 雄平 三尾 浩一 矢倉 正典 山本 和史 | 朝日レガッタ シェルエイト 準決勝進出 中日本レガッタ シェルエイト 第3位、第6位 女子Wスカル 第4位 瀬田川杯 シェルフォア(2nd) 第2位 全日本大学選手権 女子Wスカル 準決勝進出 関西学生秋季リーグ 対校エイト 第3位 新人エイト 第7位 女子Sスカル(土田) 第5位 全日本軽量級選手権 男子エイト 第5位 | |
| 2001 平成13年 | 富田 光彦 (講師・助教 授・教授) | | ◎濱崎 慎市 ○西窪 昌彦 大滝 雅貴 小幡 孝一 菅家 愛子 近澤 隆英 | 朝日レガッタ シェルエイト 準決勝進出 女子Wスカル 準決勝進出 中日本レガッタ シェルエイト 第4位 女子Sスカル(土田) 準決勝進出 | 大学院経済学研究科設 置(グローバル・ファイ ナンス専攻) |

| 年 | 顧問 | 監督 | 幹部 (記載前年9月~8月) ◎:主将 ○:主務 | 主な戦績や出来事等 | 備考 |
|---------------|--------------------------|-------------------|---|---|--------------------------------|
| 2001 平成13年 | | | 辻井 貞行 古屋 陽平 堀尾 和弘 宮川 剛一 矢田 健一 白濱(渡部)可奈子 | 全日本軽量級選手権 シエルエイト 第5位 関西選手権 女子Sスカル(土田) 準決勝進出 瀬田川杯 シェルフォア 準決勝進出 全日本大学選手権 シエルエイト 第8位 女子Sスカル(土田) 第4位 関西学生秋季リーグ 荒天のため、決勝中止 | |
| 2002 平成14年 | 富田 光彦 (講師・助教 授・教授) | 木村 善雄 (大学2回) | ◎加味 直樹 ○谷 典秀 石橋 弘一 宇都宮 義行 大津 守 坂井 昭仁 伊藤(加藤)美佳 石川(熊谷)拓満 高山(土田)康代 平松 大輔 増田 明広 安木 喜俊 山本 陽一郎 | 朝日レガッタ シエルエイト 準決勝進出 女子Sスカル(土田) 第5位 全日本軽量級選手権 女子Sスカル(土田) 準決勝進出 関西選手権 シェルフォア 第4位 女子Sスカル(土田) 準優勝 瀬田川杯 シエルエイト 第2位 全日本大学選手権 シェルフォア 準決勝進出 全日本選手権 シェルフォア 準決勝進出 関西秋季リーグ 荒天のため、決勝中止 | |
| 2003 平成15年 | 吉川 英治 | 木村 善雄 (大学2回) | ◎栗本 賢児 ○中井 敦士 池淵 護拓 市川 大輔 田中 哉壮 田中 有希 都築 孝明 浜元 総一郎 坂 尚行 藤井 佐智代 松澤 玲 浦嶋 彩 | 朝日レガッタ シエルエイト 準決勝進出 全日本軽量級選手権 シエルエイト 第8位 関西選手権 シェルフォア 準決勝進出 女子Sスカル(藤井) 第4位 全日本大学選手権 舵手なしペア 第5位 全日本選手権 シェルフォア 準決勝進出 オックスフォード盾 シエルエイト 準決勝進出 全日本新人選手権 シェルフォア 第8位 関西学生秋季リーグ シエルエイト 優勝 | 大学院後期博士課程 「経済経営リスク専攻」 設置 |
| 2004 平成16年 | 吉川 英治 | 水野 久仁昭 (大学20回) | ◎恒川 和輝 ○小野 康宏 石黒 孝史 奥村 寿良 嶋田 美和 妹尾 大樹 武田 一幸 土山 卓男 恒川(池田)寿子 中島 慎一 松下 眞生 松村 寛樹 峯田 将之 山崎 康司 | 朝日レガッタ シエルエイト 準決勝進出 全日本軽量級選手権 なしフォア 第8位 全日本選手権 なしペア 第5位 オックスフォード盾 シエルエイト 準決勝進出 関西学生秋季リーグ シエルエイト 優勝(2連覇) 女子Sスカル(中川) 第3位 | 陵水艇友会80周年 (高島皓二会長) |
| 2005 平成17年 | 吉川 英治 | 水野 久仁昭 (大学20回) | ○市川 暢啓 藤原 和納 ◎古川 卓哉 前田 篤史 萬田 次郎 本谷 晃一 夜船 宏哉 | 朝日レガッタ シエルエイト 第5位 (63年以來の決勝) シェルフォア 準決勝進出 女子Sスカル(中川) 準決勝進出 全日本選手権 なしペア 第5位 女子Sスカル 準決勝進出 全日本軽量級選手権 なしペア 第3位 関西選手権 シェルフォア 第3位、準決勝進出 女子Sスカル(中川) 第4位 | |

| 年 | 顧問 | 監督 | 幹部 (記載前年9月~8月) ◎：主将 ○：主務 | 主な戦績や出来事等 | 備考 |
|---------------|-------|-------------------|--|--|--------------------------|
| 2005 平成17年 | | | | 全日本大学選手権 なしペア 第2位 シェルフォア 第7位 女子Sスカル 準決勝進出 関西学生秋季リーグ シェルエイト 優勝(3連覇) 女子Wスカル 第2位 | |
| 2006 平成18年 | 吉川 英治 | 水野 久仁昭 (大学20回) | ◎清水 武尊 ○田伏 稔英 川島 崇志 小林 まど加 中川 真希 矢納 智仁 山崎 充生 山島 知久 | 全日本選手権 なしペア 第8位 全日本軽量級選手権 なしペア 第6位 関西選手権 女子Sスカル 第3位 浜寺杯レガッタ シェルフォア 優勝 全日本大学選手権 女子Sスカル 準決勝進出 関西学生秋季リーグ シェルエイト 第2位 | |
| 2007 平成19年 | 吉川 英治 | 北居 和夫 (大学18回) | ◎中村 新吾 ○根来 布美 河辺 栄治 粉川 智広 小南 文香 立道 晃樹 森見 俊介 山口 さおり 渡邊 訓明 | 朝日レガッタ シェルフォア 準決勝進出 全日本選手権 シェルフォア 準決勝進出 全日本軽量級選手権 なしペア 第6位 関西選手権 なしペア 第3位 シェルフォア 準決勝進出 女子Wスカル 準決勝進出 全日本大学選手権 なしペア 第6位 関西学生秋季リーグ なしペア 第2位 | |
| 2008 平成20年 | 吉川 英治 | 北居 和夫 (大学18回) | ◎桑原 義章 石田 将之 大山 順子 川上 祐司 君島 和弥 百濟 歩 藪内 佑紀 | 朝日レガッタ シェルフォア 準決勝進出 全日本軽量級選手権 なしペア 予選棄権 関西選手権 シェルフォア 準決勝進出 全日本大学選手権 シェルフォア 予選敗退 舵手付女クォドルブル 予選敗退 関西学生秋季リーグ 新人フォア 第7位 | |
| 2009 平成21年 | 吉川 英治 | 北居 和夫 (大学18回) | ◎辻 剛平 ○木下 絢子 | 朝日レガッタ 新人獲得に専念するため出場辞退 全日本軽量級選手権 なしペア 予選敗退 関西選手権 なしペア 第5位 全日本大学選手権 なしペア 予選敗退 | 陵水艇友会85周年 (北村勝則会長) |
| 2010 平成22年 | 吉川 英治 | 北居 和夫 (大学18回) | ◎居松 洋輔 岡垣 憂 角田 美美子 宮島 正貴 | 全日本軽量級選手権 なしペア 予選敗退 滋賀県民体育大会 男子ダブルスカル 準優勝 男子シェルフォア 準優勝 女子舵手付きクォドルブル 優勝 関西学生夏季選手権 男子なしペア 第5位 男子ダブルスカル 予選敗退 浜寺杯 男子舵手付きフォア 第5位 女子舵手付きクォドルブル 第5位 全日本大学選手権 男子舵手なしペア 予選敗退 関西学生秋季選手権 対校男子舵手付きフォア 予選敗退 2nd男子舵手付きフォア 予選敗退 女子舵手付きクォドルブル 第4位 | |
| 2011 平成23年 | 吉川 英治 | 北居 和夫 (大学18回) | ◎永島 圭 ○西村 信哉 | 朝日レガッタ 男子舵手付きフォア 準決勝進出 女子対校ダブルスカル 予選敗退 関西学生新人レガッタ 男子舵手付きフォアA 第10位 男子舵手付きフォアB 準決勝進出 男子舵手付きフォアC 第11位 女子舵手付きクォドルブル 第8位 | 5月 北居和夫氏(大18回) 陵水艇友会会長就任 |

| 年 | 顧問 | 監督 | 幹部 (記載前年9月~8月) ◎：主将 ○：主務 | 主な戦績や出来事等 | 備考 |
|---------------|-------|-------------------|--|---|----|
| 2011 平成23年 | | | | 滋賀県民体育大会 女子舵手付きクォドルブル 第2位 関西選手権 男子対校ペア 予選敗退 女子対校ダブルスカル 準決勝進出 浜寺杯 男子舵手付きフォア 優勝 男子エイト 第5位 全日本大学選手権 男子対抗舵手付きフォア 棄権 女子対校ダブルスカル 予選敗退 関西学生秋季選手権 男子シングルスカル 予選敗退 男子新人舵手付きフォアA 第5位 男子新人舵手付きフォアB 第8位 男子新人舵手付きフォアC 準決勝進出 | |
| 2012 平成24年 | 吉川 英治 | 水野 久仁昭 (大学20回) | ◎藪 登志晴 ○岩田 有希菜 大脇 南 西川 祐貴 米澤 博聡 | 琵琶湖チャリティーレガッタ (例年の朝日レガッタ) 男子対抗エイト B決勝第3位 関西学生新人レガッタ 男子舵手付きフォアA 予選敗退 男子舵手付きフォアB 準決勝進出 男子舵手付きフォアC 予選敗退 男子舵手付きフォアD 準決勝進出 男子舵手付きフォアE 準決勝進出 男子舵手付きフォアF 予選敗退 (荒天のため二日目は中止) 関西学生選手権 男子対校エイト 準決勝進出 全日本大学選手権 男子対校エイト 予選敗退 関西学生秋季選手権 男子対校フォア 棄権 新人男子舵手付きフォア 第2位 新人女子ダブルスカル 準決勝進出 新人男子エイト「魁斗」 予選敗退 新人男子エイト「Autostrada」 予選敗退 新人女子舵手付きクォドルブル 予選敗退 | |
| 2013 平成25年 | 吉川 英治 | 水野 久仁昭 (大学20回) | ◎星野 雄貴 ○久保 さゆり 石田 早紀恵 白田 寛史 大塩 孝史 岡本 芳樹 木下 和子 佐々木 裕行 佐藤 広宙 前中 祥平 山崎 健晶 | 関西学生秋季選手権大会 男子一般フォア 対校 GreenBeret 第3位 2nd HIKONE85 準決勝進出 新人エイト Autostrada 予選敗退 新人エイト 魁斗 準決勝進出 女子一般ダブル 対校 戴天 第6位 女子一般ダブル 2nd 湖懂 予選敗退 新人クォドルブル セリーネII 順位決定戦進出 新人クォドルブル GALAXY 第6位 朝日レガッタ 男子対校エイト Autostrada 予選敗退 2nd エイト 魁斗 予選敗退 3rd フォア HIKONE85 予選敗退 女子対校クォドルブル セリーネII 予選敗退 2nd ダブル 戴天 予選敗退 全日本軽量級選手権 男子フォア HIKONE85 予選敗退 | |

| 年 | 顧問 | 監督 | 幹部 (記載前年9月~8月) ◎:主将 ○:主務 | 主な戦績や出来事等 | 備考 |
|---------------|-------|-------------------|---|---|-----------------------|
| 2013 平成25年 | | | | 関西選手権 男子対校エイト Autostrada 第4位 2nd エイト 魁斗 第10位 3rd フォア HIKONE85 予選敗退 女子対校クォドルブル セリーネⅡ 第6位 2nd フォア GALAXY 第11位 | |
| 2014 平成26年 | 吉川 英治 | 水野 久仁昭 (大学20回) | ◎植本 将史 ○島影 紗希 秋山 なな絵 浅野 洋介 伊藤 里々加 大森 菜由 大山 柚貴 上谷 守裕 川口 涼 下代 喬史 小西 孝明 左海 晃裕 柴田 孝太郎 鈴木 健太郎 田中 滋美 田中 暢 楢村 圭佑 福西 那奈 堀 智樹 安田 依里 | お花見レガッタ 男子エイト D決勝6着 女子舵手付きクォドルブル D決勝2着 朝日レガッタ 男子エイト 準決勝進出、予選敗退 男子舵手付きフォア 予選敗退 女子舵手付きクォドルブル 準決勝進出 関西選手権競漕大会 男子エイト 予選敗退 男子舵手付きフォア 予選敗退 女子舵手付きクォドルブル 予選敗退 全日本大学選手権大会 男子エイト 予選敗退 男子舵手付きフォア 予選敗退 女子舵手付きクォドルブル 予選敗退 女子ダブルスカル 予選敗退 オックスフォード盾レガッタ 男子エイト 予選敗退 全日本選手権大会 女子ダブルスカル 予選敗退 京都レガッタ 男子舵手付きフォア 準優勝、予選敗退 男子ダブルスカル 予選敗退 女子舵手付きクォドルブル 優勝 女子ダブルスカル 予選敗退 関西学生秋季選手権大会 男子一般舵手付きフォア 第7位、予選敗退 男子新人舵手付きフォア 第3位、準決勝進出 男子一般ダブルスカル 予選敗退 女子一般ダブルスカル 準決勝進出 女子新人舵手クォドルブル 第3位 | 陵水艇友会90周年 (北居和夫会長) |
| 2015 平成27年 | 吉川 英治 | 水野 久仁昭 (大学20回) | ◎西島 悠貴 ○森原 麻貴 赤津 皐太 足立 陽太 岩瀬 洋介 小澤 佳穂 小島 亜友 酒井 駿 鮫島 杏佳 菅野 優也 鈴木 千遥 瀬戸口 祐耶 竹中 洋亮 中村 壮平 花岡 真梨 平田 和佳乃 平松 大 水谷 洋太 | 朝日レガッタ 男子エイト 予選敗退 男子舵手付きフォア 準決勝進出 女子舵手付きクォドルブル 予選敗退 関西選手権競漕大会 男子エイト 予選敗退 男子舵手付きフォア 準決勝進出、予選敗退 男子舵手なしペア 予選敗退 女子舵手付きクォドルブル 予選敗退 女子ダブルスカル 予選敗退 全日本大学選手権大会 男子エイト 予選敗退 女子舵手付きクォドルブル 予選敗退 オックスフォード盾レガッタ 男子エイト 予選敗退 京都レガッタ 男子新人エイト 第5位、予選敗退 女子舵手付きクォドルブル 第4位、予選敗退 全日本新人選手権大会 男子舵手付きフォア 第4位 関西学生秋季選手権大会 男子一般舵手付きフォア 第5位 女子一般舵手付きクォドルブル 予選敗退 男子新人エイト 予選敗退 | |

| 年 | 顧問 | 監督 | 幹部 (記載前年9月~8月) ◎:主将 ○:主務 | 主な戦績や出来事等 | 備考 |
|---------------|-------|-------------------|--|--|---|
| 2016 平成28年 | 吉川 英治 | 辰己 馨 (大学25期) | ◎正多 宏章 ○藤道 哲人 岡田 和哉 梶浦 修平 角本 龍之介 岸川 雅典 中島 美咲 長沼 廣樹 平野 都和 福山 恭健 山崎 美紗都 山本 善紀 吉田 陽太 | 朝日レガッタ 男子エイト 準決勝進出、予選敗退 女子舵手付きクォドルブル 準決勝進出 女子ダブルスカル 予選敗退 全日本軽量級選手権大会 男子エイト 予選敗退 西日本選手権大会 女子舵手付きクォドルブル 第7位 関西選手権競漕大会 男子エイト 予選敗退 男子舵手なしペア 予選敗退 男子舵手付きフォア 予選敗退 女子Sスカル(高田) 準決勝進出 女子ダブルスカル 予選敗退 浜寺杯 男子エイト 第4位 女子舵手付きクォドルブル 棄権 全日本大学選手権大会 男子エイト 予選敗退 女子Sスカル(高田) 予選敗退 女子舵手付きクォドルブル 予選敗退 関西学生秋季選手権大会 男子新人舵手付きフォア 優勝 男子一般舵手付きフォア 第6位 女子一般ダブルスカル 準優勝、第6位 女子新人舵手付きクォドルブル 第8位 | |
| 2017 平成29年 | 吉川 英治 | 辰己 馨 (大学25期) | ◎植野 暢彬 ○望月 真帆 泉 安由美 井出 達也 大石 泰広 加納 俊 高田 萌香 田中 優大 土屋 啓明 村上 貴一 | 朝日レガッタ 男子舵手付きフォア 準決勝進出 男子ダブルスカル 予選敗退 女子舵手付きクォドルブル 順位決定戦(1組)2着 女子ダブルスカル 予選敗退 関西選手権競漕大会 男子エイト 予選敗退 男子ダブルスカル 棄権 女子舵手付きクォドルブル 予選敗退 女子ダブルスカル 予選後オープンレース3着 全日本大学選手権大会 男子舵手付きフォア 予選敗退 男子舵手なしペア 予選敗退 男子舵手なしフォア 予選敗退 女子ダブルスカル 予選敗退 女子舵手付きクォドルブル 予選敗退 京都レガッタ 女子舵手付きクォドルブル 優勝 女子ダブルスカル 第5位 関西学生秋季選手権大会 男子新人エイト 第4位、予選敗退 男子舵手付きフォア 予選敗退 | 高田治氏(大21回) 陵水艇友会会長就任 データサイエンス学部 設置 |
| 2018 平成30年 | 吉川 英治 | 井上 圭一郎 (大学29期) | ◎渡邊 洋一 ○落 祐里 井上 恭輔 川村 優香 小島 諒子 佐伯 直哉 四方 捺貴 重田 新 杉本 翔太 高木 優輔 田中 麻莉子 友岡 七海 藤井 花音 松田 理沙 松村 慈浩 | 朝日レガッタ 男子舵手付きフォア 準決勝進出 男子ダブルスカル 準決勝進出、予選敗退 女子舵手付きクォドルブル 予選敗退 女子ダブルスカル 準決勝進出 関西選手権競漕大会 男子舵手付きフォア 準決勝進出 男子舵手なしペア 予選敗退 男子ダブルスカル 準決勝進出 女子舵手付きクォドルブル 第6位 女子ダブルスカル 準決勝進出 全日本大学選手権大会 男子舵手付きフォア 予選敗退 女子舵手付きクォドルブル 予選敗退 | |

| 年 | 顧問 | 監督 | 幹部 (記載前年9月~8月) ◎:主将 ○:主務 | 主な戦績や出来事等 | 備考 |
|---------------|-------|-------------------|---|---|----|
| 2018 平成30年 | | | 水野 敬介 南出 沙織 安井 志帆 山口 大輝 | 京都レガッタ 男子エイト B決勝2着 男子舵手付きフォア 予選敗退 男子ダブルスカル 予選敗退 女子舵手付きクォドルブル B決勝1着 女子ダブルスカル 第5位 女子Sスカル(高橋) 第2位 全日本新人選手権大会 男子舵手付きフォア 予選敗退 | |
| 2019 令和元年 | 吉川 英治 | 井上 圭一郎 (大学29期) | ◎尾原 悠太郎 ○山莊 若那子 伊藤 穂香 河合 巧 齋藤 龍一 白井 幹人 高橋 佑実 段 涼馬 堤 耀徳 初田 彩音 古井 直己 増原 啓 | 京都レガッタ 女子シングルスカル 2位 朝日レガッタ 男子舵手付きフォア 6位 男子ダブルスカル 準決勝進出 男子ダブルスカル 予選敗退 女子舵手付きクォドルブル 予選敗退 女子ダブルスカル 準決勝進出 関西選手権競漕大会 男子舵手なしペア 予選敗退 男子舵手付きフォア 3位 女子舵手付きフォア オープン参加 オックスフォード盾レガッタ 男子エイト 予選敗退 全日空大学選手権 男子舵手付きフォア 予選敗退 女子舵手付きフォア 予選敗退 女子舵手なしペア 予選敗退 11.1 第30回加古川レガッタ -11.3 (秋季学生選手権大会) 新人男子エイト 予選敗退 新人女子舵手付きクォドルブル 予選敗退 一般男子舵手付きフォア 敗復棄権 一般男子舵手なしペア 3艇中3位 女子シングルスカル 決勝4位 | |
| 2020 令和2年 | 吉川 英治 | 太田 俊二 (大学32回) | ◎本田 昂広 ○堀田 拓海 浅野 凱也 大崎 和真 岡本 涼香 木方 泰輔 小寺 龍太郎 嶋田 尚輝 高橋 優輝 中井 陽樹 名倉 義貴 向山 鈴鹿 | 9.26 第5回西日本選手権 -9.27 男子舵手付きフォア 決勝6位 男子舵手なしペア 準優勝 男子ダブルスカルA 決勝4位 男子ダブルスカルB 第11位 女子ダブルスカル 準優勝 10.22 第47回全日本大学選手権大会 -10.25 男子舵手なしペア 準決勝敗退 男子舵手付きフォア 予選敗退 女子シングルスカル(長谷川穂波) 予選敗退 12.5 第31回関西学生秋季選手権特別代替大会 -12.6 新人男子舵手付きフォア 第3位 新人男子ダブルスカル 予選敗退 新人女子ダブルスカル 準優勝 一般男子舵手付きフォア 5艇中5位 一般男子シングルスカル(近藤優太郎) 予選敗退 一般女子シングルスカル(荒木瞳那) 決勝5位 | |
| 2021 令和3年 | 柴田 淳郎 | 太田 俊二 (大学32回) | ◎西村 拓人 ○斎藤 龍生 植松 香壮 嘉手納 遼 桜庭 美裕 名知 里利子 中ノ瀬 颯佑 長束 郁弥 長谷川 穂波 藤田 了子 | 4.17 第66回中日本レガッタ -4.18 一般男子舵手付きフォア 敗復棄権 6.19 第74回滋賀県民体育大会 一般男子舵手付きフォア - 一般男子ダブルスカルA 第3位 一般男子ダブルスカルB - 一般女子舵手付きフォア 1艇中1位 | |

| 年 | 顧問 | 監督 | 幹部 (記載前年9月~8月) ◎:主将 ○:主務 | 主な戦績や出来事等 | 備考 |
|--------------|-------|------------------|---|---|----|
| 2021 令和3年 | | | | 7.3 2022年度関西選手権競漕大会 -7.4 一般男子舵手付きフォア 予選敗退 一般男子ダブルスカルA 準決勝敗退 一般男子ダブルスカルB 予選敗退 一般男子舵手なしペア 予選敗退 一般女子舵手付きフォア 決勝5位 7.31 令和3年度関西学生新人レガッタ -8.1 男子舵手付きナックルフォアA 第7位 男子舵手付きナックルフォアB 予選敗退 男子舵手付きナックルフォアC 予選敗退 男子舵手付きナックルフォアD 予選敗退 10.28 第99回全日本選手権大会 -10.31 第48回全日本大学選手権 男子舵手付きフォア タイムトライアル敗退 女子ペア 第3位 女子ダブルスカル タイムトライアル敗退 11.27 第32回関西学生秋季選手権特別代替大会 -11.28 新人男子エイト 予選敗退 新人女子ダブルスカル 準優勝 一般男子舵手付きフォア 予選敗退 | |
| 2022 令和4年 | 柴田 淳郎 | 太田 俊二 (大学32回) | ◎近藤 優太郎 ○小山 晃汰 荒木 瞳那 市川 真綾 糸賀 遙也 小鞠 知暉 田村 尚太 吉田 光輝 | 4.23 第7回西日本選手権 -4.24 一般女子ペア 準優勝 5.1 第73回朝日レガッタ -5.4 一般男子舵手付きフォアA 第3位 一般男子舵手付きフォアB 予選敗退 一般男子ダブルスカルA 予選敗退 一般男子ダブルスカルB 予選敗退 7.2 2022年度関西選手権競漕大会 -7.3 一般男子舵手付きフォアA 優勝 一般男子ペア 予選敗退 一般男子ダブルスカルA 予選敗退 一般男子ダブルスカルB 予選敗退 一般女子ペア 第3位 7.9 2023年度関西学生新人レガッタ -7.10 男子舵手付きナックルフォアA 第5位 男子舵手付きナックルフォアB 第11位 女子舵手付きナックルフォア 優勝 9.8 第49回全日本大学選手権 -9.11 男子舵手付きフォア C決勝2位 女子シングルスカル(荒木瞳那) C決勝2位 11.4 第33回加古川レガッタ -11.6 (関西学生秋季選手権) 新人男子エイト 敗復棄権 新人女子ダブルスカル 予選敗退 一般男子舵手付きフォア 優勝 一般男子ダブルスカルA 予選敗退 一般男子ダブルスカルB 予選敗退 一般女子シングルスカル(西村菜々花) 準優勝 | |
| 2023 令和5年 | 柴田 淳郎 | 太田 俊二 (大学32回) | ◎野田 凌雅 ○齋藤 芽依 磯部 法子 河合 真吾 櫻井 竜希 西河 陽奈 西原 紀花 藤野 貴也 | 5.3 第74回朝日レガッタ -5.6 一般男子舵手付きフォアA 準決勝敗退 一般男子舵手付きフォアB 予選敗退 一般男子ダブルスカルA 準決勝敗退 一般男子ダブルスカルB 準決勝敗退 一般女子ダブルスカル 準決勝敗退 一般女子シングルスカル(西村菜々花) 優勝 6.17 第76回県民体育大会兼国体選考会 成年女子国体選考会シングルスカル (西村菜々花) 第7位 成年女子国体選考会シングルスカル (銖藤蓮) 第9位 | |

| 年 | 顧問 | 監督 | 幹部 (記載前年9月~8月) ◎:主将 ○:主務 | 主な戦績や出来事等 | 備考 |
|--------------|-------|------------------|--|---|----|
| 2023 令和5年 | | | | 7.1 2023年度関西選手権競漕大会 -7.2 一般男子舵手付きフォアA 決勝6位 一般男子舵手付きフォアB 準決勝敗退 一般男子舵手なしクォドルプル 予選敗退 一般女子ダブルスカル 決勝4位 一般女子シングルスカル(山本春希) 予選敗退 7.8 2023年度関西学生新人レガッタ -7.9 男子舵手付きナックルフォアA 準優勝 男子舵手付きナックルフォアB 第8位 男子舵手付きナックルフォアC 第7位 男子舵手付きナックルフォアD 予選敗退 9.6 第50回全日本大学選手権 -9.10 男子舵手付きフォア 総合22位 女子ペア- 総合7位 | |
| 2024 令和6年 | 柴田 淳郎 | 奥城 哲郎 (大学32回) | ◎高見 昌照 ○山越 由華里 青島 拓海 石川 晃大 梅田 康毅 中原 想太 西村 菜々花 林 俊輔 三宅 宏都 宮脇 佑哉 坂本 彩夏 | 10.13 第64回全日本新人ローイング選手権大会 -10.15 一般男子舵手付きフォア C決勝4位 一般女子シングルスカル(銚藤蓮) 準決勝敗退 11.3 第34回加古川レガッタ -11.5 関西学生秋季新人選手権 新人男子エイト 第3位 一般男子舵手付きフォア 第7位 新人男子舵手付きフォア 第6位 一般男子ダブルスカル 予選敗退 新人女子ダブルスカル 第4位 一般女子シングルスカル(銚藤蓮) 優勝 2024 Aon NZ University Rowing Championship Varsity 女子ダブルスカル(西村・銚藤) 優勝 Varsity 女子ペア(西村・銚藤) 優勝 Varsity 女子エイト(西村・銚藤含む) 全体6位 University 軽量級ダブルスカル(西村含む) 全体5位 4.27 第9回西日本選手権競漕大会 -4.28 一般男子エイト 第6位 一般男子舵手付きフォア 準優勝 5.3 第75回朝日レガッタ -5.6 一般男子エイト 第6位 一般男子舵手付きフォア 予選敗退 一般男子ダブルスカル 準決勝敗退 一般女子ダブルスカル 準決勝敗退 一般男子シングルスカル(吉田安里) 予選敗退 一般女子シングルスカル(西村菜々花) 準決勝敗退 5.20 第102回全日本ローイング選手権大会 -5.23 一般女子ペア 準優勝 7.6 2024年度関西選手権競漕大会 -7.7 一般男子舵手付きフォアA 第3位 一般男子舵手付きフォアB 準決勝敗退 一般男子ダブルスカル【翠柳】 第6位 一般男子ダブルスカル【翠嵐】 予選敗退 一般男子ダブルスカル【霞光】 予選敗退 一般女子ペア 優勝 一般女子シングルスカル(美濃島蓮伽) 準決勝敗退 浜寺杯男子シングルスカル(吉田安里) 優勝 | |

| 年 | 顧問 | 監督 | 幹部 (記載前年9月~8月) ◎：主将 ○：主務 | 主な戦績や出来事等 | 備考 |
|--------------|-------|------------------|---|--|----|
| 2024 令和6年 | | | | 8.24 第70回中日旗争奪びわ湖レガッタ -8.25 一般男子エイト 準優勝 一般男子ダブルスカル 準決勝敗退 一般女子シングルスカル(美濃島蓮伽) 第3位 9.4 第51回全日本大学ローイング選手権 -9.8 一般女子エイト【滋賀大・同志社大混成】 準優勝 一般男子舵手付きフォア B 決勝3位 一般男子ペア 予選敗退 一般女子ペア 優勝 | |
| 2025 令和7年 | 柴田 淳郎 | 奥城 哲郎 (大学32回) | ◎中川 健太郎 ○北野 沙英 境 茂源 清水 彩加 銚藤 蓮 西林 侑哉 | 10.18 第65回全日本新人ローイング選手権大会 -10.20 一般男子舵手付きフォア 準決勝敗退 一般男子ダブルスカル 予選敗退 11.2 第35回加古川レガッタ -11.4 関西学生秋季新人選手権 新人男子エイト 第5位 一般男子舵手付きフォア 準優勝 一般男子ダブルスカルA 第5位 一般男子ダブルスカルB 第3位 一般女子シングルスカル 第11位 新人女子ダブルスカル 優勝 4.26 第10回西日本選手権競漕大会 -4.27 一般男子エイト 第6位 一般男子舵手付きフォア 優勝 一般女子ペア 準優勝 5.3 第76回朝日レガッタ -5.6 一般男子エイト 予選敗退 一般男子舵手付きフォア 第5位 一般男子ダブルスカルA 準決勝敗退 一般男子ダブルスカルB 予選敗退 一般女子ダブルスカル 予選敗退 一般女子シングルスカル(銚藤蓮) 途中棄権 5.22 第103回全日本ローイング選手権大会 -5.25 一般男子舵手付きフォア 第14位 一般女子シングルスカル(銚藤蓮) 第5位 3.15 SBS(Small Boat Selection) -3.17 一般女子ペア 第4位 6.28 2025 U23 Holland Beker -6.29 一般女子ペア(1日目) 第6位 一般女子ペア(2日目) 予選敗退 7.5 2025年度関西選手権競漕大会 -7.6 一般男子エイト 第9位 一般男子舵手付きフォア 準決勝敗退 一般男子ダブルスカル 準決勝敗退 一般女子ペア 第4位 一般女子シングルスカル(銚藤蓮) 準優勝 一般女子シングルスカル(美濃島蓮伽) 予選敗退 一般女子シングルスカル(木本琴心) 準決勝敗退 7.20 2025年度関西学生新人レガッタ 男子舵手付きナックルフォアA 第12位 男子舵手付きナックルフォアB 第13位 男子舵手付きナックルフォアC 第11位 男子舵手付きナックルフォアD 第7位 男子舵手付きナックルフォアE 第19位 女子舵手付きナックルフォア 優勝 9.3 第52回全日本大学ローイング選手権 -9.7 一般男子舵手付きフォア 準々決勝敗退 一般女子ペア 予選敗退 一般女子シングルスカル(銚藤蓮) 第7位 第65回オックスフォード盾レガッタ 一般男子エイト 第4位 | |



陵水艇友会 × サークルスクエア

新たな絆、ここから始まる。

2025年4月30日、長年親しまれてきたメーリングリスト「MLIST」のサービス終了に伴い、陵水艇友会では新しいコミュニケーションツールとして「サークルスクエア」を導入しました。

このツールでは、

- インフォメーション配信
- 会員制掲示板
- 画像・動画のアルバム作成
- メールの一斉配信

など、多彩な機能を活用することで、会員同士の連絡や同期の交流がこれまで以上にスムーズになります。

2025年9月現在、396名の会員が登録済み。

皆様とのご縁を、より強く、より近くに感じられる場として、サークルスクエアをぜひご活用ください。

また、登録されたメールアドレスが他の会員に公開されることはなく、個人情報も適切に管理されますので、安心してご参加いただけます。



登録方法

方法①：

滋賀大学漕艇部ホームページ→「OB会」→ページ下部の「サークルスクエア」
→「新規登録」をクリック

方法②：

以下のリンクまたは QR コードから直接アクセスして登録

<https://www.c-sqr.net/invite/PyZnDWDtYOFz6f2vxT>



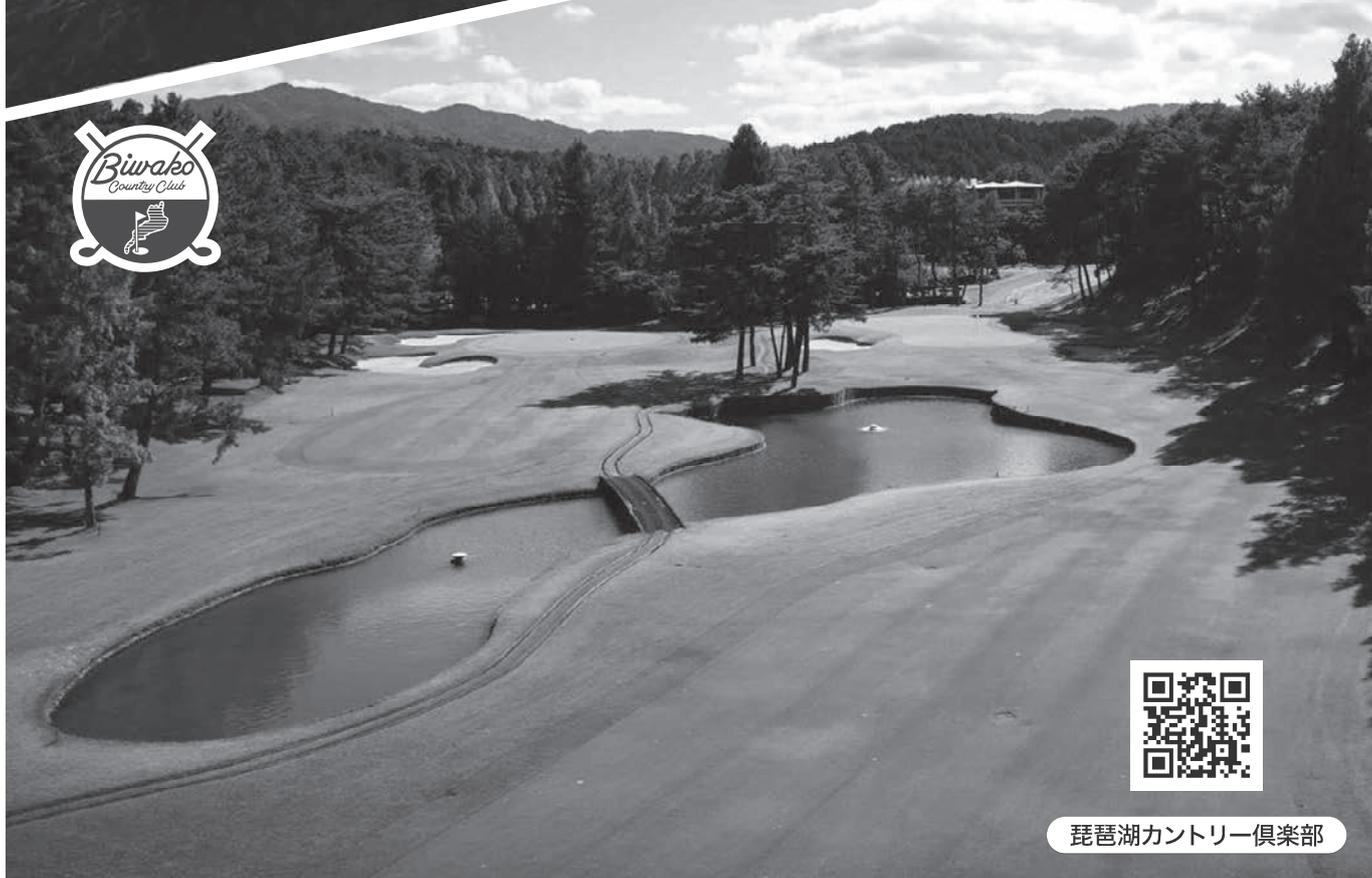
ぜひ、ご登録ください！



YANMAR MARINA
SUNSET



ヤンマーサンセットマリーナ



琵琶湖カントリー倶楽部

ヤンマーコーポレーション株式会社

大阪市北区茶屋町1番27号 ABC-MART 梅田ビル

祝 創部 100周年

四季折々の心を込めたおもてなし



いこいの村
はりま
加西市笹倉町823-1
0790-44-1750

彩り溢れる花々や自然にふれながら
四季の移ろいを感じませんか

アクセス 中国自動車道加西ICから5分
山陽自動車道加古川北ICから20分



赤穂ハイツ
赤穂市尾崎向山2470-64
0791-48-8935

瀬戸内海に臨む眺望は素晴らしいの
一言。名物「鯛ソーメン」は絶品です

アクセス 山陽自動車道赤穂ICから15分

ひょうご憩の宿グループ



新たんば荘

丹波篠山市郡家451-4
079-552-3111

四季の味覚を楽しみ城下町の雰囲気
を今に伝える街並みを散策

アクセス 舞鶴若狭自動車道
丹波篠山ICから10分



津名ハイツ

淡路市志筑162
0799-62-1561

日本のふるさと「国生み伝承の島」
豊かな海の幸をご堪能ください

アクセス 神戸淡路鳴門自動車道
津名一宮ICから15分



団体様には
マイクロバス送迎もござい
ます。詳しくは各施設に
お尋ね下さい。

一般社団法人ひょうご憩の宿

理事長 林直樹 (大学29回卒)

TEL 078-381-5250 FAX 078-381-5255

合宿・会議・研修・ご宴会
皆さまのお越しをお待ち
しております。



創部100周年おめでとうございます

EVERLOY



株式会社共立合金製作所

〒663-8211 兵庫県西宮市今津山中町12-16

TEL: 0798-26-3606

取締役会長 松本康三

取締役社長 藤原啓郎

常務取締役 寺岡孝憲 (大30回)

祝 滋賀大学漕艇部 創部百周年

滋賀大学漕艇部の皆様 そして先輩の方々が栄光の
歴史を刻み続けて一世紀

これからの益々のご活躍を心よりお祈り申し上げます

アイエックス・ナレッジ株式会社

代表取締役会長 安藤 文男

現役の皆様 大学選手権や全日本選手権出場の際は
是非お立ち寄りください 本社はお台場至近です

先進と信頼のシステムインテグレーター



IX Knowledge Inc.

東京証券取引所 スタンダード市場上場

元・社外監査役 大学 25 回 田村弘昭

外装タイル、外装モザイクタイル製造

東濃窯業株式会社

代表取締役 安藤 久 (大学31回)

【本 社】

土岐市下石町304番地

TEL 0572-57-8111

FAX 0572-57-8115

【山神工場】

土岐市下石町2308-1

TEL 0572-57-4500

FAX 0572-57-5033

【石拾出荷センター】

土岐市下石町304番地

TEL 0572-57-8281

FAX 0572-57-2889

祝 100 周年

「株式会社 水原建築設計事務所」は、滋賀県彦根市を拠点に
公共施設・商業施設・工場・事務所・店舗・住宅など建築全般について
設計及び監理を専門業務とする建築設計事務所です。

オフィスコンセプトとして、世代を超えて、皆の心の深奥に触れる魅力ある建築
を創造し、価値ある社会資産として、自然や歴史と共に良好な環境構成を生み出
す事を目標としています。



株式会社 水原建築設計事務所

代表取締役社長 水原 脩

〒522-0052 彦根市長曾根南町 443 番地 TAKAGI ビル 5 F

電話 0749-22-1679

<http://www.mizu-apo.com>

滋賀大学漕艇部艇庫 2025 年設計監修

| | |
|--|--|
| <p>不動産賃貸・太陽光発電・ コンピュータコンサルティング</p> <p>(有)ナレッジハウス</p> <p>代表取締役 林田 俊平太</p> <p>長崎市川口町6番24号サイモンビル2F</p> | <p>経済環境分析及びコンサルティング</p> <p>アルファ経済研究所(有)</p> <p>代表取締役 林田 幸親</p> <p>長崎市川口町6番24号サイモンビル3F</p> |
| <p>業務改善・経営改善コンサルティング</p> <p>(有)ランチア経営研究所</p> <p>代表取締役 菅 喜志子</p> <p>長崎市川口町6番24号サイモンビル3F</p> | <p>不動産賃貸及び不動産コンサルティング</p> <p>(株)マセラ不動産研究所</p> <p>代表取締役 菅 喜志子</p> <p>長崎市川口町6番24号サイモンビル4F</p> |

法人税・所得税・相続税・消費税 コンサルティング及び申告

林田公認会計士事務所

公認会計士 林田 幸親 (大 26 回済)
税理士 (院 6 回営)

〒852-8108 長崎市川口町6番24号 サイモンビル

TEL (095)848-0678 FAX(095)848-0655

祝100周年

岩崎公認会計士税理士事務所

公認会計士税理士 岩崎和文（大21回卒）
元 新日本有限責任監査法人パートナー

〒650-0023 兵庫県神戸市中央区栄町通2丁目4-13
神栄ビル604

TEL (078) 327-8839

FAX (078) 327-8846

祝 滋賀大学漕艇部百周年

昭和43年入部。

江国寺の合宿が懐かしく楽しい思い出。

森脇幸夫（整調）

坂井真修（2番、故人）

水野久仁昭（3番、主将、故人）

福岡守（バウ）

岩崎和文（バウ、主務）

宮本又男（コックス、主務）

祝100周年

総合看板、LEDサイン、プラスチック、テント、展示装飾

早川工芸株式会社

〒522-0038 彦根市西沼波町33-1

代表取締役社長 早川敬士

<https://www.hayakawa1493.com/>

Tel:0749-22-1493 Fax:0749-23-8219

滋賀大学漕艇部艇庫 寄付者銘板・表札制作

祝100周年

エレクトロニクスの
ミズショー株式会社
MIZUSHO



代表取締役 橋本 衛（大31回）

本社：〒466-0058
名古屋市昭和区白金一丁目4番20号
TEL: (052) 872-6451

拠点：愛知県刈谷市（事業所）
中国浙江省
タイ サムットサコーン県

URL: <https://www.mizusho.co.jp/>

祝 滋賀大学漕艇部 創部 100 周年



Kuwano 桑野造船株式会社

〒520-0357 滋賀県大津市山百合の丘 10-1 TEL 077-598-8090 FAX 077-598-2505 e-mail : kuwano@k-boat.co.jp



びわ湖の工房が生み出す、
憧れのボロン釣竿

釣りの楽しさと喜びを次の世代へ。

私たちはこの釣竿作りの技術を活かし
日本初、ボートのオール製作にも挑戦しています。

Restaffine
Restaffine custom rod

高品質フィッシングロッドの自社生産メーカー、フィッシュ・アンド・ハートのオリジナルブランド「レスターフライン」は、軽量かつ高弾性を備えた素材であるボロンを使用し、長年の素材研究を独自の技術をかけ合わせ、一本一本丁寧に手作業で仕上げています。この釣竿が多くの方から信頼を集め、私たちは国内有数のメーカーへと成長しました。

またシャフトカラーやスレッドカラーの変更はもちろん、グリップ素材の変更やオリジナルロゴの転写等幅広いカスタムメニューでオリジナルロッド製作を承ります。

2022年、桑野造船株式会社が経営を引き継ぎ、今年総業50年を迎えます。琵琶湖がある滋賀で釣竿を作る使命を持ち、SDGsにも積極的に取り組んでいます。修理や再利用可能な製品の選択は、持続可能な消費の促進に直結し「良いモノを長く使う」文化の醸成にもつなげています。また、釣りや自然遊びの魅力を広める活動も行っています。



お問い合わせ

フィッシュ・アンド・ハート株式会社 滋賀県大津市南船路188
TEL:077-592-8121 FAX:077-592-0107
E-mail:restaffine@iris.eonet.ne.jp

代表取締役 小澤 哲史
取締役副社長 今村 拓也(大38回)

Restaffine HP
<https://restaffine.com/>



祝 100 周年

人、物、時、金。「ビジネスの5大要素」と呼ばれているものです。川重ではまず第一に「人」。さまざまな「人」との出会いを大切にしています。人間同士の信頼や絆を大切にこそ、「物」や「金」という価値が生まれます。昭和31年、個人工務店から製材業を起こせたのも、その後、総合建設業、建築部材製造、不動産業・・・順調に拡大できたのも、そのときどきの人との出会いが実ったこと。

川重は「人」との出会いを大切に・・・

この思いをひとときたりとも忘れず、感謝の思いを「なりわい」を通じて「お客様」へ返していきたい・・・。川重の仕事は、そうした思いを「形」にするための物です。



川重株式会社

滋賀県東近江市上山町 907

電話 0749-46-1112

代表取締役社長 川瀬 静

<http://www.kawajyu.com/>

滋賀大学漕艇部艇庫 2025 年竣工 現場監督 中川喜八郎 監督補佐 田中龍星

祝 滋賀大学漕艇部 創部100周年

池田直樹 大28回

一般社団法人陵水会 理事長

株式会社十六フィナンシャルグループ代表取締役社長



御殿浜ローイングクラブ



御殿浜で育ったメンバーを中心に結成したクラブです。
 ガチに勝負にこだわり過ぎず、死ぬまで楽しくボートをすることを一番の目標にしています。とはいえアテンションゴーがかかる
 と真剣勝負。だからこそ、レース後のお酒が美味しい！
 関西メンバーは琵琶湖・瀬田川を拠点に、関東メンバーは横浜
 鶴見川を拠点に活動をしています。
 OBのみなさん、久しぶりにボートを漕ぎに来てください！
 今村拓也(大38回) 090-1147-2605 桑野造船勤務
 鈴木耕馬(大45回) 090-3822-6281 滋賀銀行勤務

祝 創部100周年

大学22回 阿部吉博 佐藤行伸 長野邦夫 若園清和

初出漕(1970年関西選手権一般ナックルフォア)

C長野、S石川先輩、3若園、2阿部、B佐藤



北居先輩、松林先輩と

祝100周年!

**大23期の仲間は
あの時の感動を
今でも忘れません!**

第13回全日本新人選手権 1972.11.3-5(戸田) 決勝 4位

B : 辻岡 榮一 (大23期)
2 : 森 重道 (大23期)
3 : 堀江 慎一 (大23期)
4 : 酒井 康行 (大23期)
5 : 太田 敦生 (大23期)
6 : 松本 正 (逝去) (大23期)
7 : 棚橋 稔 (大23期)
S : 川崎 重喜 (大24期)
Cox : 田村 勝治 (大23期)



祝 滋賀大学漕艇部百周年

静寂の琵琶湖で艇を走らせ 彦根城を仰いで練習の日々
幾多の輝かしい歴史を刻み続け 早や一世紀が過ぎた今
新しい世紀の始まりを 皆で祝えることを感謝致します

大学 25 回

主将 辰己 馨

主舵 岡本 幸博

主務 田村 弘昭

祝創部 100 周年

大学 26 期

主将 山田 昌嗣
副将 高田 義明
主舵 林田 幸親
主務 加藤 英隆
玉置 秀樹
西口 尚吾

戦績

1977 年 関西選手権 シェルエイト 3 位
C 林田 S 高田 7 山田 4 玉置 B 西口
1977 年 瀬田川杯 シェルエイト 3 位

新入部員の大量獲得を部の目標の一つに掲げ、練習時間を割いて
全員で勧誘に力を注ぎ、17 名の新入を迎えて男子 37 名の大所帯になりました。
活気あるクラブ運営のもと、彦根合宿は江国寺の駐車場 2 階宿舎だけでは収まら
ず本堂の部屋までお借りしました。
全て良き思い出です。漕艇部とのご縁に感謝いたします。

祝 滋賀大学漕艇部創部100周年



これからの100年に向けて漕艇部の
新たな挑戦を全力で応援します！

大学28回卒業生一同

井田茂・大野光宏・岡本勝彦・木村秀樹・桑島英彰・小杉祐司
長江高明・西川元啓・牧野博和

第57回 全日本選手権競漕大会
第6回 全日本学生選手権競漕大会
第19回 オックスフォード萬レガッタ AUG '79 戸田オアシス競漕コース

祝 漕艇部創部100周年



現役時代は、夢に向かい懸命に努力し、時には喜び、時には悔しい思いをしましたが、その中で仲間を信じて、支え合うことの大切さを学び、人として成長させていただいた貴重な時間でした。これはボート部の素晴らしい伝統です。100年という長い歴史の中で苦難の時もその都度、組織変革を起こし乗り越えてきた歴史でもあったと思います。これからもボート部の良き伝統を守りつつ環境変化に柔軟に対応しながら更に新たな歴史を刻んで欲しいと願って

「故 前田偉量先輩 揮毫」 います

大学29回卒 17人会一同

| | | | | |
|---------|-------|--------|-------|-------|
| 故 井上圭一郎 | 緒方 俊輔 | 佐々木 俊和 | 田村 喜宏 | 牧野 武 |
| 故 山根 正美 | 金森 俊樹 | 佐田 篤史 | 中村 邦男 | 森 秀司 |
| | 酒井 嘉登 | 鈴木 教義 | 林 直樹 | 横井 隆広 |
| | 酒向 良弘 | 谷川 佳裕 | 藤田 雅明 | |



祝 滋賀大学漕艇部 創部100周年

200周年に向かって
さらなる躍進を祈念しております。



大学31期 有志一同

祝 滋賀大学漕艇部 創部100周年！

走り、漕ぎ、語らい、寝食を共にした仲間と100周年を迎えることができ、先輩・後輩・現役・関係者の皆様に深く感謝いたします。

大学32期 有志一同

*United by oars, bonded for life.
Congratulations on 100 years of rowing
excellence.*

100th Anniversary

Shiga University Rowing Club

Toshiaki Fujita (Captain)
Yoshihiro Oshitani
Takuya Imamura
Hisatoshi Okado
Yasuyuki Saito



— From the 38th Class —

Norihiro Shoji
Nobukatsu Takemura
Yoshihide Tanaka
Mitsuhiro Teranishi
Hiroaki Yoshimura



「大学で日本一を目指せるクラブは、ボートかヨットしかない」
 先輩のその言葉に背中を押され、私たちは共に挑戦の日々を歩みました。
 支えてくださったOB・先輩方、後輩たちに心から感謝します。
 そして、何より共に汗を流した同期を誇りに思います。
 これからの世代が新たな歴史を刻んでいくことを、40期一同、心より応援しています。

滋賀大学漕艇部創部100周年 心よりお慶び申し上げます。

大学40期

| | |
|---------|--------|
| 赤坂光彦 | 塩見賢 |
| 伊川晃 | 高津敬太郎 |
| 石飛勝徳 | 鷹村淳史 |
| 伊藤政宏 | 故 野村誠治 |
| 今村裕司 | 村田照男 |
| 小坂田泰宏 | 森春樹 |
| 後藤（石原）清 | 山本周 |



2018年6月静岡



2025年2月京都



編集後記

滋賀大学漕艇部創部100周年の節目を迎え、編集委員一同 偲湖編集という形で携われたことを嬉しく思います。

今回の偲湖編集に当たっては、大学5期の高島さんから大学74期の銖藤さんまで実に幅広い漕艇部関係者の熱い想いのこもった寄稿に加え、いつも漕艇部を支援いただいている母校学長、学部長をはじめ大学関係者の皆さま、陵水会の皆さまなどに寄稿を賜りました。ご多用の折、偲湖への寄稿、多数の広告協賛のご協力を賜りましたことをこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。

さて、今回の偲湖は「100年の歴史を超え、新たな挑戦へ」をテーマに編集となりました。これまでの漕艇部100年の歩みとともに、次の100年を見据え完成間近の新艇庫建設についても寄稿いただきました。

お寄せいただいた寄稿を拝読する中で、改めて感じたことがあります。それは、各代様々な課題や制約がある中、常に部の存続、活性化、また強豪に勝つためにはどうすればよいかといった、各代のたゆまぬ努力や創意工夫の積み重ねで、我が漕艇部が100年という歴史を刻んできたということを再認識できたことです。また、新艇庫の建設に当たっては、多くのOBが寄付という形で関わり、次の100年を担う後輩に対し、形として残すものができたという点が非常に意義深く感じました。

最後になりますが、今回の偲湖編集を通じ、それぞれ4年間という漕艇部での現役生活でありながら、その後何十年も語り合える滋賀大学漕艇部の良き伝統を次の100年に向けてぜひ繋いでいきたいと思いました。この『偲湖』が、次の100年へ、その伝統を繋ぐ一助となることを心から願っています。

滋賀大学漕艇部創部100周年記念『偲湖』編集担当

創部100周年記念事業実行委員長 竹村 信克（大38期）

編集委員長 山本 和史（大49期）

編集委員 山本 周（大40期）

編集委員 本谷 晃一（大54期）

編集委員 中島 美咲（大65期）

編集委員 高田 萌香（大66期）

滋賀大学漕艇部
創部100周年記念「偲湖」

令和7年11月8日発行

編集・発行 陵水艇友会
〒522-8522
彦根市馬場1丁目1-1 滋賀大学内
e-mail surc100th@gmail.com
陵水艇友会 HP https://surc-hp.com/
印 刷 交友印刷株式会社
〒650-0047
神戸市中央区港島南町5丁目4番5号
TEL. 078-303-0088
